

やまがたりようおん

## 山縣良温の「アイヌ語講義原稿」

沢井春美・小川正人

目次	1 はじめに	(2)-1 吉田巖『北海道あいぬ方言語彙集成』
	2 研究の背景と意義	(2)-2 浅井亨による十勝方言の先駆的研究
	3 山縣良温のアイヌ語資料について	(2)-3 田村すゞ子による語彙調査
	(1) 山縣とアイヌ語	(2)-4 本別町での調査研究
	(2) 教育と教化の内容	(3) 山縣資料のアイヌ語
	(3) 書誌情報	(3)-1 人称代名詞
	(4) 「アイヌ語単語集」の特徴	(3)-2 主格人称接辞／目的格人称接辞／ 主格・目的格人称接辞
	(5) 「アイヌ語講義原稿」の特徴	(3)-3 親族名称について
	(6) 「全国地名考」と「十勝地名考」	(3)-4 語頭の h について
	(7) アイヌ語の表記	(3)-5 方位方角
4 山縣資料の翻刻		(3)-6 語彙
5 十勝方言のアイヌ語について		6 まとめ
(1) アイヌ語諸方言の概要		索引
(2) 十勝方言の調査研究について		

## Key Words

山縣良温 (Yamagata Ryouon)、長野県 (Nagano Prefecture)、浄土真宗大谷派 (Shinshū Ōtani-ha)、伏根弘三 (Fushine Kouzo)、アイヌ語十勝方言 (The Tokachi dialect of Ainu)

## 1 はじめに

## 山縣良温について

## (主な経歴と十勝への赴任)

この資料を遺した山縣良温は、1866（慶応2）年、信濃国高井郡押切村（現長野県上高井郡小布施町押羽）の浄照寺（真宗大谷派寺院）に長男として生まれた<sup>(1)</sup>。

地元の小学校や僧侶養成機関などを経て哲学館<sup>(2)</sup>に学び、のち清沢満之<sup>(3)</sup>が主導した大谷派の教団改革運動に参画した。1897年9月8日付けで同派より北海道出張を命じられ北海道へ。同年11月に十勝国中川郡の利別太説教場を、12月に同郡の止若イカン別説教場を開設したと記録されている。1898年1月、北海道集治

監十勝分監教誨師となり、帯広説教所の開設などを進めた。

## (教育との関わり)

伏根弘三<sup>(4)</sup>の回想によれば、彼が十勝にも多くの移住者が押し寄せつつある社会の動きの中で、自分たちの子どもには学校教育が必要になると考え、北海道庁の河西支庁にかけあったが、「考へては居るがそう言ふお金はない」と言ふ返事であるなど、積極的には応じてくれないため、彼は学校を自分で設けることにした。しかし教員の手配についても、「支庁に行ったが駄目」だったので自ら探していたところ、「丁度看守をして居た某」が「よしそんなら看守を止めて教えてやろう」と早速来てくれることになりました<sup>(5)</sup>という。

沢井春美：阿寒アイヌコンサル

小川正人：北海道博物館 アイヌ民族文化研究センター

(1) 以下、山県の経歴については、主に久木幸男「山県良温のアイヌ教育活動」（『横浜国立大学教育紀要』20、1980年）により、一部筆者による調査を補った。

(2) 井上円了（1858～1919 浄土真宗大谷派出身の仏教哲学者）が設立した私立の専門学校。のち東洋大学となる。

(3) 清沢満之（きよざわまんし）（1863～1903） 浄土真宗大谷派僧侶、宗教哲学者。大谷派の改革運動を主導、のち真宗大学（現在の大谷大学）初代学長をつとめた。

(4) 伏根弘三（1874～1938）は帯広に生まれ育った。本稿で取り上げた帯広での小学校の設置や、アイヌ民族の生活擁護、差別撤廃などに取り組んだことで知られる。アイヌ名として「ホテネ」「チャンラロ」の記録があり、1898年頃から和名伏根安太郎、1916年に安太郎を弘三と改名している。

(5) この部分の引用は、高倉新一郎「伏古村の旧土人ホテネ君談話聞書」『北海道社会事業』第五一号、一九三六年七月。この文の冒頭に記された高倉の言によれば1927年頃の聞き取りとのことである。ここでは「某」となっているが、伏根は例えば1910年にも山県に書簡を送っており（『信濃毎日新聞』1910年6月21日付けに伏根から山県のもとに届いた書簡が紹介されている）、伏根が名前を失念していたとは考えにくく、高倉が聞き落としたものと推察する。

この「某」が山縣良温であったと考えられ、例えば『帯広市史稿』（帯広市、1943年）には「明治三十四年五月三日より同三十五年六月七日まで、伏古村アイヌ伏根安太郎は帯広大通の自宅にアイヌ子弟十一名を養ひ、僧侶山縣良温に教授を囑託して之れが費用を自弁す」と記し、同時代の記録でも、例えば1901年6月13日付け『北東日報』には、「本願寺布教担任者たる録時山縣良温氏は、他の助勢を籍（か）らず独力以て土人教育の任に当らんとして、書籍筆墨其他凡ての費用を悉く給与し子弟を勸〔ママ〕化誘導し居れり。」との記事がある。

浄照寺に残る写真の、向かって右端が山縣、真ん中の樹の左側、「開教記念之桜」と書かれた標柱の傍らに立つのが伏根であり、遅くとも1901年春には山縣が伏根の求めに応じて帯広でアイヌの子どもたちの教育に当たっていたことが窺える（写真1）。

（帯広から本別へ）

同年8月2日付け『北東日報』は「嘗て報道せし如く帯広に於ける土人教育乃状態は爾来非常の好成績を呈したるが今回主任山県氏は更に土人教育事業の拡張を謀り新たに中川郡「ポンベツコタン」に於て私立学会を開設し以て土人三四十名を收容教育せんと〔中略〕依て山県氏は不日帯広を引払ひ中川郡に赴くべき筈」との記事を掲載している。

そして浄土真宗大谷派文書科による『宗報』第3号（1902年2月1日）には、山縣が1901年末に大谷派本文に送ったとされる、本別で従事していた教育活動の報告が掲載されており、そこでは、本別に設けた学校を自ら「私立不如学堂」と称し、その設置位置や地域の様子とともに、生徒数（33名）や教科程度、成績、学校維持の方法などを報告している<sup>(6)</sup>。

（アイヌ語・アイヌ文化に関する知見）

上記の報告の中で山縣は、「毎月一回二十八日土人一同老少男女を問はず学堂に集め半は土語を以て本願の不思議を宣説す」とも述べている。

これに先立つ『北東日報』1901年7月26日付けに掲載された「土人の祭文」との見出しのある記事では、「山県氏が多年心掛け土人の宗教風俗を取調べられたるものゝ一節」が紹介されており、「神前に於て拜誦する祭文」として「シノツサア」のアイヌ語文とその日本語訳などが掲載されている。また浄照寺に遺されている文書『玉堂日誌』（「玉堂」は山縣良温の号）には「蝦夷之断雲」と題された、「トエタック」などのアイヌ語とその日本語訳などを記したものがある。

これらのことから、山縣がアイヌの「宗教風俗」に関心を持ち、アイヌ語について一定の知見を有していたこ

とが窺える。

（十勝を離れてから帰郷後のこと）

山縣は大谷派の北海道寺務出張所からの命により、1902年3月に本別を離れて根室に移り、1903年6月に北海道寺務所在勤の任を解かれ長野に戻った。その後は横浜や新潟などでも布教に当たった時期もあるが、おおむね小布施で過ごし、1934年に生涯を終えている。

本稿で紹介するアイヌ語筆録資料については、故久木幸男氏よりその所在を教示いただき、浄照寺の現住職山縣良丸氏に閲覧・複写の許可をいただいた。久木氏からの学恩と、山縣氏のご厚意に、改めて感謝申し上げる。

## 2 研究の背景と意義

本稿では、山縣良温が19世紀末から20世紀初頭に、北海道十勝地方でアイヌ教育に従事した際に記録したとされるアイヌ語資料を整理し、言語学的に考察する。山縣が遺したアイヌ語資料については、山縣本人による手記（1901a, b）に加え、久木幸男（1980）、解放運動推進本部（編）による論考（2008）、小川正人による全国地方教育史学会での発表（2013）により存在が確認されていたものの、アイヌ語資料の具体的な内容と翻刻は本稿が初出である。当該資料は、採録された年代が明らかにされており、アイヌ子弟への教育及び教化のために記録されたという点も明らかであることから他に例をみない貴重な資料であると言えるだろう。これらのアイヌ語資料を翻刻、分析することで、アイヌ語の通時的、共時的な資料として学術的な研究に貢献されることが期待される。今後さらに詳しい分析がされることにより、資料が精査され、蓄積され、学習、研究や伝承活動等に活用されることが期待される。

なお、山縣以前にもアイヌ語の調査は行われており、アイヌ語調査の歴史について、中川裕は以下のように記述している。

アイヌ語の科学的研究が本格的に始まったのは金田一京助博士の登場以降、つまり、二〇世紀に入ってからのこととよいが、その前史を築いたのは、日本の夷通辞と呼ばれる人々と、ヨーロッパ人の宣教師や探検家であった（中川1985：2）。

とし、一七世紀初頭に記録されたアイヌの風俗や習慣に関する最古の記録から、時代を追って金田一京助がアイヌ語研究を志すに至るまでのアイヌ語調査の記録の内容と調査をおこなった人物を紹介している。

近世アイヌ語資料研究として『もしほ草』に注目し、資料の整理と翻刻をおこなった田中・佐々木は、「学問

(6) この報告の全文は前掲久木幸男「山縣良温のアイヌ教育活動」に引用されている。

としてのアイヌ語研究は二十世紀に入ってから始まったが、語彙の記録は既に十七世紀から行なわれていた」と指摘し、江戸時代のアイヌ語の語彙記録、文献名、成立年また作者等について紹介している（田中・佐々木 1985：22）。江戸時代の文献資料を用いた研究は、佐藤によりその多くが進められている（佐藤 1995, 2004, 2005, 2008a ほか）。

田村すゞ子は、古い時代のアイヌ語研究の目的について、以下のように記述している。

日本でも西洋でも、20世紀のアイヌ語研究は、いくつかの先駆的な研究を除いては、布教や政治的意図や商業的利益のために行なわれたが、20世紀以降、本格的な学問的研究が行なわれるようになった（田村 1997：4）。

山縣による教育及び教化活動を目的とするアイヌ語調査の開始時期は、アイヌ語学を科学として築きあげた金田一京助が調査を開始する少し前のことになる。

さて、山縣が滞在した1900年頃の十勝地方では、「彼等女性及小児に至ては全く和語を解せざるもの多し学童生徒中にも半ばは和語を解せず為に教授上多くの土語を要するの止むなきに至る」と山縣が報告している（久木 1980：11）。その後は、歴史的な過程でアイヌ語母語話者の数は減っていくことになる。

時代が下り、報告者が聞き取り調査をおこなっていた当時、十勝地方に在住で調査に協力的だったアイヌ語話者は少ないながらも確認されていた。

アイヌ語研究の第1人者であった田村すゞ子は、アイヌ語の方言についての記述の中で、次のように指摘している。

年々インフォーマントは少なくなり、1地域に複数の話し手を求めることは、多くの地域で、もはやできなくなっていた。〔中略〕将来、日高、十勝等、数か所の方言については、ある程度の記述が公刊される可能性もある。しかし、多くの方言については、従来の研究を補正する話し手がないため、新しい資料を得ることも望めず、言語地理学的調査もむづかしくなっている（田村 1997：1）。

田村の指摘、「従来の研究を補正する話し手がない」は、アイヌ語研究全体にとって深刻な問題点となっていた。報告者にとっても、十勝地方のアイヌ語の聞き取り調査がかなわなくなり、採録した資料の不備を補うことが難しくなっていた。その時期を前後として、帯広生まれの広野ハルさんのアイヌ語資料を整理する機会に恵まれた（沢井・田村編 2005『アイヌ語帯広方言の資

料：田村すゞ子採録 広野ハルさんの基礎語彙調査資料』<sup>(7)</sup>。基礎語彙調査資料のもとになったのは、昭和31（1956）年、田村すゞ子（当時は東京大学大学院生、旧姓福田すゞ子）が、北海道帯広市で1カ月間、アイヌ語の基礎語彙調査を行なった際の手書きの調査ノートである。田村の調査ノートを、報告者が整理、分析を行ない、入力、整形、表示、索引の作成などの処理を行うためにテキストデータベースシステムを開発し、アイヌ語索引を作成した。索引項目の総数は3,600語である。

なお、田村が行なった1956年の調査結果の一部は、すでに『アイヌ語方言辞典』（1964）に収録されており、この『アイヌ語方言辞典』は言語学者による信頼できる基礎資料として、これまでアイヌ語研究において、ながく利用されている。

帯広のアイヌ語資料は、報告者にとって本別での調査研究を進める際に、位置的に最も近い地域のものであり明治生まれの話者から聞き取りをした同時代の参考資料であり、基礎資料となっていた。広野さんの資料を整理分析する際に、本別のアイヌ語資料を参照し、補正をする役目を果たしていたともいえる。帯広方言の基礎語彙集が刊行された翌年2006年には、『アイヌ語十勝方言の基礎語彙集』（澤井編 2006）が刊行されている。

本稿では、山縣氏の資料を整理する過程で、すでに報告されている十勝地方のアイヌ語についてさらに分析を進める作業が可能になり、これまで例が少なく不明であった記述を同じ方言で比較することにより具体的な例として記述することができたと考えている。

### 3 山縣良温のアイヌ語資料について

山縣資料を整理するにあたり、服部・知里（1960）による「アイヌ語諸方言の基礎語彙統計学的研究」、『アイヌ語方言辞典』等を用いて予備的な調査をおこなった。語彙の多くは北海道東部の特徴を示しており、人称接辞や人称代名詞の種類、親族名称、十勝地方に特有な名詞等を調査した結果、議論を先取りすれば、山縣の記録した資料は十勝地方で採録されたアイヌ語である可能性が高いという印象を受けた。そこで山縣資料は十勝地方のアイヌ語が記録されているという前提で資料の整理・分析をすすめていくこととする。

なお、山縣が北海道に滞在したのは5年ほどであり、そのうちアイヌ教育に従事したのは約1-2年である。

また、主な活動地も十勝帯広および本別に限られている（久木 1980：2）ことが明らかになっている。

(7) この資料集は、「アイヌ語諸方言の調査・資料の保存・整理・公開版作成と資料アーカイブの構築準備」（研究代表：札幌学院大学・奥田統己）による研究成果の一部である。

## (1) 山縣とアイヌ語

山縣は、本別で教育活動を開始した後で、「彼等女性及び小児に至ては全く和語を解せざるもの多し学堂生徒中にも半ばは和語を解せず為に教授上多くの土語を要するの止むなきに至る」と報告し、自らアイヌ語を学んだ背景、理由について述べている(久木 1980: 11)。

帯広伏古出身の伏根弘三氏(1874-1938)がアイヌの子弟に教育の機会を望み、その希望に山縣が賛同することになったとされている。伏根は、回顧録のなかで日本語の学習について、「九つの時に一寸した言葉を聞き習っただけである」(伏根 1926: 66)と述べている。伏根が9歳といえは1883年頃である。また、『アイヌ語方言辞典』(服部編 1964)の調査に協力した帯広伏古生まれの広野ハル氏(1884-1963)は、両親とはアイヌ語で会話をしており、田村による調査が行われた1956年頃、お年寄りとの会話はアイヌ語が中心であった。日本語を学んだのは12、13才からという(沢井・田村 2005)。それは1896年頃のことになる。山縣が教育、布教活動に従事する1900年頃は、十勝地方の一部では児童はアイヌ語を中心とした生活をしていたと考えられる。

山縣は、自身がアイヌ語を学んだ環境と期間について以下のように記している。

予、固と蝦夷通を以て自ら任する者に非ず、如何で「アイヌ」通を銜ふ者ならむや。されど渡道以來こゝに五年、渡島、石狩、日高より、十勝、釧路の土人に接し親しく彼等の風習を究むる所あり、且つ聊か其土語を學びて、稍其宗教の梗概を知るを得たり。(山縣 1901b: 39)

山縣は、5年ほどのあいだに上記の地域においてアイヌに接し、アイヌの風習、アイヌ語を学んだとある。

山縣は、また、教育活動を始めてまもない明治34年の手稿に「小生も最早土語には少々通し申候」(山縣 1901a: 50)と述べている。

## (2) 教育と教化の内容

山縣は、アイヌ子弟には日本語を教え、自らは教育上必要となるアイヌ語を学んでいたことが明らかにされている。山縣資料には、「待て」「そこに座れ」「戸を開けよ」「一心に勉めよ」など、アイヌ語で指示する例文や、「けんか」「仲裁」など、実用的な目的で記録されたと思われる単語が含まれる。また、アイヌの信仰は、自然界や生物を敬うことから、動物名称「獣類」「鳥類」「蟲類」等が多く記録されている一方、衣食住に欠かすこと

のできない樹木や植物名の記録が少ないことは注目に値する。

教育や教化の内容について、「爾来一意開教に従事仕漸く布教の基礎も極り申候」、「刻下開教の間を割き、土人の教誨を始め、十二才を頭として六才に至る児童を取容致候。」(山縣 1901a: 49)と帯広での様子を紹介している。さらに、「扱て日課は、毎朝登場するや、三十分間生の書齋に引き來り、日常の進退應對等を実習せしめ、次に始業の際、佛前に坐せしめ、偈文讀誦の後、宗教的修身談を授け、終業の際も例の如く佛前に拜禮せしめ、歸宅致させ候。」(山縣 1901a: 50)と、アイヌの児童に礼儀作法の実習をさせる、お経を読み聞せる、仏前で礼拝をさせた様子が記されている。教育の過程では、「成績は誠に宜しく、宗教的感化は特に著しく候。毎夜寝に就くの際と、起床の時は必ず佛名三聲せしめ候に忘るゝもの一人も無之候」、さらに、「學業は、僅々三十餘日にして、五十音は熟達し、「イェエキ」と明了に發音仕、單語も連書致し申候。實に「シヤモ」の児童よりは、進歩は一入速に感じ申候。由来「アイヌ」は一般に濁音は發し申不、爲に非常なる困難にて、九分通りは目的を達し候。反之、半濁音は苦もなく發音致候。阿彌陀の御恩、と、天皇陛下『チマエレカムイ』(土語)の御恩と、善知識『カムイ子アングル』の御恩と父母『ハボミチ』の恩とは、明確に彼等の腦に印象を止め候」(ibid.)と結んでいる。

## (3) 書誌情報

浄照寺が保管する資料の中の山縣良温関係のものとしては、本稿で紹介する山縣資料のほか、前出の『玉堂日誌』<sup>(8)</sup>、写真、山縣良温が受けた辞令や子どもの証書類(小学校の修業証書など)、その他の文書(帯広の「市街」における「未開地」について寺院のため無償貸付を許可する北海道庁や河西支庁の文書など)がある。山縣良温の足跡はもとより、十勝における真宗大谷派の歴史に関しても、重要な資料群ではないかと思う。

これらの資料を実見したのは本稿の筆者のうち小川のみである。2011年11月に初めて浄照寺を訪問して資料の概要を拝見する機会を得、2013年4月に再訪してアイヌ語・アイヌ史関係の資料を撮影させていただいた。本稿はこのとき撮影した画像データを用いている。また2018年9月には内田祐一氏(元帯広百年記念館学芸員、このとき文化庁調査官)、大和田努氏(帯広百年記念館学芸員)とともに改めて同寺において資料調査を行った。

山縣資料はいずれも、美濃判の原稿用紙に墨書された

(8)『玉堂日誌』の「蝦夷之断雲」には、土人の詩「トエタック」、お伽話「クウシュイブトゥウー」、祭詞「シノツツア」などが所収されている(ただし、これらのアイヌ語は山縣氏による和訳、分類である)。今回は紙幅の都合などもあり取り上げることができなかった。

ものである。幾つかに綴じられ、一括して二つ折りされた状態であった。筆跡及び記述内容を当時の山縣による筆記資料や新聞・雑誌記事の内容と対比し、これらは山縣自身によるものと推察した。これを綴じたのは山縣によると思われるものの、いま確認できるもの以外にも資料があったのか等は不明であり、本稿では現状で確認できる範囲のものについてのみ紹介する。

山縣資料は、綴じられた状態と記述の体裁・内容からみて、大きくふたつに分類することができる。前半部分は、アイヌ語（日本語平仮名表記）をいろは順に配列しそれぞれに日本語訳を列記した部分である。アイヌ語－日本語単語集、あるいは、辞典の原稿といえるだろう。後半部分は、「アイヌ語講義原稿」と記載のある紙を表紙とする、アイヌ語（日本語カタカナ表記）とその日本語訳や、各地の地名解などを記述したものと大別できる。本稿では前者を「アイヌ語単語集」と仮称し、後者は山縣による「アイヌ語講義原稿」をそのまま使用する。

なお、本稿で用いたのは資料の複製であり、紙のよじれやしわ等により判読が難しい箇所があった。そのような情報は注に明記した。また、原資料は縦書きであるが本稿では横書きに改めた。

#### (4) 「アイヌ語単語集」の特徴

「アイヌ語単語集」に記録された単語を整理するにあたり、作業の効率化をはかるため、あらかじめ索引を設計する目標を立てた。後述するように、資料が変体仮名とカタカナ書きで記録されており、2005年の帯広方言の語彙集、2006年の本別の語彙集のそれぞれの索引を作るプロセスとは完全に異なるプログラムになっている。

単語総数は、索引の作成プログラムと深く関連することから、ここでアイヌ語の音素について確認しておく。

アイヌ語の母音音素は、a, i, u, e, o の5個であり、子音音素は、p, t, k, c, s, r, m, n, w, y, h, ' の12個（田村1997：6）である。音節の頭には、この12個全部の子音が立ちうる（ibid.）のであるが、「単語集」の(る)(を)(わ)(か)(よ)(そ)(す)(ん)は、原稿用紙そのものが確認されていない。また、(な)(る)(ゑ)は原稿用紙の1行目にそれぞれ(な)(る)(ゑ)と書いてあるのみで、アイヌ語は記録されていない。

アイヌ語では、多くの動詞、一部の名詞、一部の副詞は、主語、目的語、付加語等の名詞、代名詞の人称に呼応して、人称形を造る。人称形は、「人称接辞」を接合することによって造られる（田村1997：16）。

「アイヌ語単語集」に人称形で記録されている例を挙げる。

(く)

「くゆぼ = 実兄」「く」我か。私の。と云ふ意。

「ゆぼ」は、「…の兄」をあらわす名詞で、「く」は、人称接辞1人称単数である。この人称接辞が「ゆぼ」に接頭し、「くゆぼ」という形になり、「私の兄」をあらわす。

「単語集」では、「くゆぼ」と記録された形を1語とし、人称接辞「く」をはずした形も1語と数えている。

索引では、yupo から「くゆぼ」も「ゆぼ」も検索できるように組み立ててある。このような工夫により、十勝地方の人称接辞のうち、もっとも注目されている不定人称接辞 a-, an- の検索が容易になった。

また、他動詞において、主格と目的格は組み合わせられた人称接辞として表示される。これは自動詞主格人称接辞、他動詞主格人称接辞、また目的格人称接辞とは違って、非常に方言差の大きいものであることが知られている（中川2024：170）。方言差が大きいということは、主格・目的格の組み合わせがどの地域のアイヌ語が記録されているかを判断するための手がかりのひとつとなる（5-3-2を参照のこと）。

前述したように、この部分を仮に「アイヌ語単語集」として翻刻作業をすすめていく。

複製された作業用の原稿用紙1枚目に大きく「No. 1」と書かれている。次のページから(い)がはじまり(ぬ)までが「No. 1」。「No. 2」は(た)以下(こ)までである。「No. 3」と書いた紙の次のページに「十勝地名考」が確認され、続いて(え)から(せ)までである。

「単語集」には、見出し語であるアイヌ語の単語、句例文を上部に書き、その下に日本語の対訳がある。文字や記述してある情報は整理されている印象を受ける。

「単語集」は原稿用紙52枚分あり、いろはの(い)からはじまり(せ)で終わっている。なお、原稿用紙に見出し語のひらがなだけ書いてあるページがあるが、そのページも枚数に数え入れた。

「アイヌ語単語集」の枚数は以下の通りである。

No. 1 (全11枚) 113語 (写真3、7)

(い) 2枚 21語 (え 含む)

(ろ) 1枚 2語

(は) 1枚 14語 (ぼ 含む)

(に) 1枚 6語

(ほ) 1枚 12語 (ぼ 含む)

(へ) 1枚 7語

(と) 1枚 16語 (とい tuy 含む)

(ち) 1枚 18語 (ちや ca, ちゅ cu 含む)

(り) 1枚 6語

(ぬ) 1枚 11語

No. 2 (全17枚) (写真4)

- (た) 1枚 8語
- (れ) 1枚 6語
- (つ) 1枚 4語 (つ tu, ci, つあ ca 含む)
- (ね) 1枚 3語
- (な) 記録なし 0語
- (ら) 1枚 11語
- (む) 1枚 1語
- (う) 1枚 18語
- (ゐ) 記録なし 0語
- (の) 1枚 6語 (ぬ 含む)
- (お) 2枚 25語
- (く) 2枚 25語
- (や) 1枚 4語
- (ま) 1枚 7語
- (け) 1枚 5語
- (ふ) 1枚 4語
- (こ) 1枚 16語

No. 3 (全24枚) (写真5)

十勝地名考 (5枚) (索引で「十勝」)

- (え) 4枚 66語 (い 含む)
- (て) 1枚 12語
- (あ) 3枚 50語
- (さ) 1枚 13語
- (き) 1枚 6語
- (ゆ) 1枚 2語
- (め) 1枚 2語
- (み) 1枚 5語
- (し) 3枚 44語
- (ゑ) 記録なし 0語
- (ひ) 1枚 13語 (び、び 含む)
- (も) 1枚 13語
- (せ) 1枚 2語

原稿用紙合計 52枚、単語総数 484語である。

(5) 「アイヌ語講義原稿」の特徴

「アイヌ語講義原稿」と記された原稿用紙を含む33枚分の草稿である。原文は縦書きであり、日本語の見出し語を上部に書き、その下にアイヌ語の単語や例文を記録してある。「獣類」「鳥類」「虫類」などにおいてはアイヌ語名称に続いて語源分解も記されており、清書されている。「獣類」「鳥類」に類似した内容の「四足動物」「鳥」も含まれる。こちらは書き込みが確認され「獣類」「鳥類」にくらべると下書きのように見える。「四足動物」「鳥」を整理、清書し、「獣類」「鳥類」として仕上げた可能性がある。(写真6)

他には、用紙1枚にアイヌ語地名の意味や語源を記しそこに動詞、名詞など、さまざまな調査項目が並んで

いるページが含まれる。原稿用紙に丸印や線を伸ばし、発音、意味や語源を書き加えたり、文字を消すなどして訂正、修正したあとが読める。この部分は、草稿あるいは下書きのような印象を受ける。

記録された内容としては、日本語で見出し語を立て、「狸、モ、ユック、」「蟻、カムイ、エトナップ。」のように句読点を打ってある。狸「モ、ユック、」の場合「モ」と「ユック」のあいだは「、」だが、まんなかに読点が打ってあり「・」としたほうがよいのかもしれない。語源、意味や息継ぎ等で、区切りの点を入れた可能性がある。単語の中で使われている場合は、その位置によって「、」と「・」のうち近いものを入力した。また「蟻、カムイ、エトナップ。」の「プ」のあとの句点は形が三日月のような形をしている。「、」を書いたあとで音や意味等を確認し「、」を「。」に整形した可能性がある。「、」も「。」もできる限り原文に近い形で入力した。なお、「雲ニス」「逃ケヨ キラ」のように句読点を打っていない記録もある。

原稿の枚数は以下の通りである。下書き、語源分解などが重複して含まれるため、単語の総数を数えることは簡単ではない。

「地名メモ」2枚 (1枚目に「アイヌ語講義原稿」というタイトルが書いてあり、そのページには地名についての記述がある)

「獣類」1枚 23語 (索引で「獣類」)

「鳥類」1枚 17語 (索引で「鳥類」)

「日本語—アイヌ語」5枚 111語 (索引で「指示」)

「虫類」2枚 28語 (索引で「虫類」)

「日本語—アイヌ語、一部アイヌ語地名」4枚 (人体：1) (気象：3)

「アイヌ語地名」1枚

「日本語—アイヌ語例文」8枚 (索引で「文例6:」「植物:2」)

「アイヌ語地名メモ」1枚

「四足動物」2枚 (索引で「四足」)

「鳥」1枚 (索引で「鳥」)

「日本全国地名考」3枚

「アイヌ語地名メモ」2枚

合計 33枚である。

(6) 「日本全国地名考」と「十勝地名考」

山縣は、日本各地の地名の意味をアイヌ語で解くという試みを行なっている。

山縣が地名について寄稿した内容として、以下のよう な記述が確認される。

◎小生も最早土語には少々通し申候。日本の地名杯も『アイヌ』語にて考へ申せば、頗る興味有之候、先つ一ツニツ御慰に申上ければ。

『イトゥー』(鼻の義) 江戸城、伊豆國、  
 『ノット』(喉の義) 能登國、  
 『フジ』(白髪のお婆の義) 富士山、  
 『トゥピオカ』(上古人民の住みし土地) 富岡、  
 『チヨック』(乾燥せる砂原の義) 千代田村、  
 「十勝オベリベリブにて(オベリベリブとは想戀郷  
 の意味に候)

六月廿八日 山縣玉堂

と記している(山縣 1901a: 50)。

アイヌ語地名研究は、金田一京助、知里真志保、山田秀三らにより、文献や古地図などの机上の調査に加え、地元の地名に親しんでいた人々への聞き取り調査、また現地へ赴き、地形や季節によって起こる環境の変化も調査するなどして研究が大きく進んでおり、山縣の時代に書かれた内容とは異なる意味記述や分析があるかもしれない。「日本全国地名考」には興味深い事例が多くあるものの、紙幅の都合上、今回は取り上げることができなかった。

また、山縣資料には「十勝地名考」も収録されている。「十勝地名考」には、十勝地方の地名の語源や由来話などが記されている。当時、山縣が訪れた、あるいは滞在した地域で伝承されていた可能性のある地名、川や沼の名前の記録であろう。吉田巖の著作のなかに、これらの地名の伝承が残されており、「十勝地名考」は、山縣が十勝の地名に詳しい人物から聞き取った記録であるという根拠のひとつになり得ると考えられる。

なお、山縣は「十勝地名考」に記録された単語や語源を参考にして「アイヌ語講義原稿」の意味記述をしていることから「十勝地名考」の記述も翻刻する対象としている。

なお、山縣は、地名について、

「北海道國名は已に調べ了り候、後日申上候。昨今は、八十餘州の地名調査中にて御座候。」(山縣 1901a: 50)

と報告している。「アイヌ語単語集」には、「く」「釧路」、「し」に「後志国」などの記録が残されている。

## (7) アイヌ語の表記

「アイヌ語単語集」では、アイヌ語を表記するために変体仮名が用いられている。可能な限り、原文通りに翻刻するように務めた。

「アイヌ語講義原稿」では、アイヌ語をカタカナで表記している。資料全体に、日本語とは異なるアイヌ語の音をあらわすための工夫がみられる。ひとつは、一般的に用いる文字より小さい文字の使用である。それらの小文字は、アイヌ語の音声を工夫した可能性があると考えられるが、あるいは、あとから文字を付け足したために

小さく書いてあるのか、文字の大きさによる意味付けの有無は、これを記した山縣以外には判断がつけられないことである。そこで、原稿用紙のマス半分程度の大きさで記された文字は小文字として扱い、その旨を注記に書き入れた。

山縣氏は、長野県高井郡小布施村(現小布施町)の出身である。長野県の上・下高井は、「北信方言」とされ(馬瀬 1983: 65)、この北信方言の音韻の特徴として、*i* (イ) と *e* (エ) は一般に音韻的対立がないことが挙げられている。

それを示す1例として、ekaci「子ども」という単語が *i*- に(いかち)、*e*- (えかち)の2箇所に見出し語として記録されていることが挙げられる。

現在、十勝地方で知られている「*e* え」と「*i* い」の音を左側に、山縣資料にあらわれる「え」と「い」を右側にあげる。「」の中の意味は、山縣資料に記録されているものである。

*e* に (い)

ekaci (いかち) 「こども」  
 etutanne (いとうたんね) 「蚊」  
 e-kor pe (いころべ) 「女の所持品」  
 eisokor (いい口よころ) 「信する」  
 sir-ekurok (しりいくろく) 「暗夜」

*i* に (え)

inkar (えんがら) 「見る、見ろ」  
 iperusuy (えべるしゆい) 「空腹である」  
 irkur (えりくる) 「兄弟」  
 ipe (えいべ) *i* が *ei* になる例「食物」  
 imeru (えめる) 「電光」  
 isopo (えそーぼ) 「兎」  
 isam (えしやま) 「無志」  
 ikokkare (えこつかれ) 「侮る」  
 irkur (えりくる) 「兄弟」  
 inonnoytak (えのんのえたつく) 「祈祷」  
 imok (えもく) 「みゝず」  
 imak (えまぎ) 「齒」  
 etunnap (エトナップ) 「蟻」

「いかち」「えかち」の他にも、「いめる」「えめる」「いねちうか」「えねちうか」などは、2つの音を別の見出し語として採録している。

以下に、山縣氏がアイヌ語をあらわすために工夫をした表記をあげる。

ca に (つあ) carkar (つあからから)  
 ca に (ちえぎ) ecakokoan (えちえぎここあん)  
 ci に (じ) huci (ふじ)  
 ci に (つ) hacir (はつり)、ciraymun (つらいむん)  
 cu に (ちつ) sirpekercupkamuy しりべけりちつかむい

(は) には、(は) (ぼ) (ば) から始まる語が記録されている。

アイヌ語の子音について、知里真志保は以下のように記述している。

II, 子音

3 破裂音 : k, t, p, g, d, b。無声音 k, t, p とそれに対応する有声音 g, d, b とはそれぞれ同一の音韻 (phonème) に属し、両者を置換へても語義に影響は無い (知里 1974 : 7)。

つまり、頭をあらわすアイヌ語 pake をパケと発音しても、パケと発音しても意味が変わることはない。

po- に (ほ)

(ほ) に、(ほ ho-) と (ぼ po-) ではじまる語が記録されている。アイヌ語では (ほ ho-) (ぼ po-) は同じ音韻ではない。

(ほん) 「小」「ぼんべつ 本別地名或ハ小河」  
 poknasir (ほつくなしり) pone (ほね)

k に (つく)

pokna (ほつくな) takne (たつくね)  
 ek (えつく) sirekrok (しりいくろく)  
 moyuk (もゆつく)

音節末の -k に (き) honi sik (ほにしぎ)

音節末 -k に (く) sak (さく)

音節末 -k は表記されず tustek (つして)

音節末 k を (つけ) sesek (せいせつけ)

o と u の混同 roru- (ろろ)

-m に (ま) isam (えしやま)

音節末 -m に (む)

tom (とむ) ram (らむ) kem (けむ)  
 hum (ふむ)

m に (ん) numke (ぬんけ)

m に (む) omke (おむけ)

m に (んむ) yam に (やんむ)

-m に (も) sisam (ししやも)

音節末子音 -n に (む)

nun (ぬむ) osimon- (おしもむー) an (あむ)  
 ahun (あふむ)

na に (が) siknak (しきがく)

nu に (の) nupuri (のぼり)

o に (う) toorunpe (とうるんぺ)

p に (ぶ) sikup (しくぶ)

音節末子音 -r (ら) (り) (る) (れ) (ろ)

-ar (ら)

paykar (ぱいから) rikun puyar (りくんぶやら)

nukar (ぬから) carkar (つあからから)

a-nuykar (あぬいから) oharkisamun (おほらきさむん)

-ir (り)

hacir (はつり) retar (れたり)

urar (うらり) eyapkir (えやぷきり)

asir (あしり) sir (しり)

sirpeker (しりべけり) irkur (えりくる)

sirpekercupkamuy (しりべけりちつかむい)

pirka (ぴりか) pirpa (ぴりぱ)

-ur (る)

irkur (いるくる) cisekorkur (ちせころくる)

retar (れたる) 「白鳥」の「白」は (れたり)

irkur (えりくる) kur (くる)

例外的な例

arka (あるか) sar (さろ)

paskur (ばすくろ)

-er (れ)

peker (ペけれ)

-or (ろ)

taskor (たすころ) korkoni (ころこに)

kotankorkamuy (こたんころかむい)

ar- に (る)

arwanpe (あるわんぺ)

音節末の s に (し)

kes (けし) etukemkus (えとうけむくし)

mos (もし) oske (おしけ)

husko (ふしこ) kosne (こしね)

apusta (あぶした) aspa (あしば)

mosospe (もそしべ)

音節末 s に (す)

nis (にす) us (うす)

taskor (たすころ)

音節末 s に (っす)

upas (うばっす)

sa に (しゃ)

nisatta (にしやつた)

esaman (えしゃまん) sisam (ししやも)

su に (しゅ)

nisu (にしゅ) kusuyep (くえしゅえ)

e-erusuy (ええるしゅい) sunke (しゅんけ)

supuya (しゅぶや) suma (しゅま)

sunku (しゅんく)

si に (す)

rewsi (れうす)

so に (しょ)

osoro (おしよろ) soya (しょや)

somo (しょも)

音節末 - t に (ち)

ooat (おおあち)

音節末 - t に (つ)

sat (さつ) sinot (しのつ)

ta に (だ)

cinita (ちにだ)

tu に (と)

tuyma (といま)

tomotuye (ともつゑ)

kewtum(u) (けうとも) etutanne (えとたんね)

eci-tura-an (えちとらあん) atuy (あとい)

tu に (とう)

etu (えとう) etukemkus (えとうけむくし)

tu に (つ)

tuwa (つわ) ku-turesi (くつれし)

e-ramutuypa (えらむつえば)

tu に (づ)

atusa (あづさ)

to に (ど)

tokkoni (どつこに)

pa に (ぼ)

pake (ぼけ) parewrew (ぼれうれう)

kokkapake (こっかぼけ)

pu に (ぶ)

rikun puyar (りくんぶやら)

pu に (ぼ)

nupuri (のぼり)

po に (ほ)

pon (ほん) pone (ほね)

poknasir (ほつくなしり)

ye に (ゑ)

tomotuye (ともつゑ) ye (江ゑ)

ye に (い)

simoye (しもい) uraye (うらい)

ye に (え)

ku-yayesioro (くやえしおろ)

ku-yayesanniyo (くやえさんによ)

音を付け加える (長母音か)

i- に (いえ)

ni (にえ) nikap (にえかつぶ)

po (ぼう)

ri (りい) rase (らあし)

isopo (えそーぼ) sesek (せいせつけ)

kukew (クーケエ)

不明

notkir, notkirihi (のちぎりり)

音節末子音 -p に (つぷ)  
 cironnop (ちろんのつぷ) cip (ちつぷ)  
 cikap (ちかつぷ)

音節末子音 -p に (ぶ)  
 nup (ぬぶ) sinep (しねぶ)  
 wo に (うを)  
 worun cikap (うをるん・ちかつぷ)

小文字の使用

nup ぬぶ  
 num ぬむ

文字の欠落?

ukattuyma (うか・とうえま)  
 teeta (てた) attus (あとし)

-re に (れい) en-ere (えんねれい)

これらの表記は、日本語とは異なるアイヌ語を記録するにあたり工夫をしている。

#### 4 山縣資料の翻刻

山縣資料の翻刻を行なう前に、ここで古文獻の研究について触れておきたい。

江戸時代の文獻資料を用いた研究は佐藤知己が中心になって進められている(佐藤 1995, 2004, 2005, 2008a ほか)。古文獻を用いた研究について佐藤は、「アイヌ語の歴史的な変遷の研究を主たる目的とするものである」とし、「現在知られているアイヌ語がどのようなプロセスを経て形成されたものであるのかは大きな問題であり、アイヌ語研究の重要な課題の一つである」(佐藤 2008a: 153-154)と研究の意義と目的を指摘している。

佐藤は、アイヌ語の方言のうち、記録されないまま、あるいはアイヌ語話者が確認できずに、すでに消滅してしまった方言があることを指摘し、「古い記録を整理分析して失われた方言の資料を収集する必要がある」(佐藤 2008b: 6)と述べている。さらに、これまでに古文獻を用いておこなわれたアイヌ語研究は「古文獻に現れる形式に当たるものを現代のアイヌ語辞書類から探して引き当てるといものがほとんどであった」とし、このような作業は「アイヌ語の言語学研究としては価値が低いもの」であり、「既存の研究を無批判に寄せ集めている

にすぎない」と問題点を挙げている。

上記の問題点に留意し、山縣資料が、古い時代と現代をつなぐ資料であることから、報告者が明治、大正生まれのアイヌ語話者から採録した資料とは分けて明記する方針を立てる。

なお、十勝地方のアイヌ語であるという前提で作業を進める方針を立てたものの、佐藤が指摘する「話者から直接調査した資料が望ましい」という点については、報告者自身の採録資料に採録が少ない例や、採録できなかった単語、例文があり、その場合、田村すゞ子採録の帯広の語彙集も用いて分析を進めている。本文には山縣資料の記録を翻刻し、現在知られている十勝のアイヌ語を注に明記し、その区別がつけられるようにしている。その際、『アイヌ語帯広方言の資料：田村すゞ子採録 広野ハルさんの基礎語彙調査資料』を引用する際には(帯広)とし、『アイヌ語十勝方言の基礎語彙集一本別町・沢井トメノのアイヌ語一』を引用する際には(本別)と表記している。

山縣資料に記録された語が、本別で採録したデータベースでも帯広(広野ハル氏)の語彙集でも確認できないことがある。他の方言の各種辞典や資料を調べると、それらの単語が記録されていることもあったが、これは最小限の利用にした。なお、山縣資料に記録されたアイヌ語は、現代十勝方言に確認されていなくても索引で引けるように入力したことを付記する。

報告者による調査ではこの語は確認されない、この語の記録はない、と明記したのは、報告者以外にも本別で調査研究がおこなわれていることによる。

帯広・広野氏の語彙集についても、田村による調査は調査表を用いての語彙調査であるため、調査表にないものは聞き取りされていないと考えられる。語彙集に報告されていないというだけで、帯広でその語が使われていないということにはならない点には注意が必要である。

「アイヌ語単語集」と「アイヌ語講義原稿」は、両方がそれぞれを補う形で記録されている。「講義原稿」は書き込みがされており、語形が正確に判断できない場合があり、注に書き入れ、参照できるようにした。また、文献を参照する際に、本稿では特に必要のない限り、声門閉鎖音は省略した。

#### 「アイヌ語単語集」

(い)  
 いたつき<sup>(9)</sup> = 為よ。

(9) 原稿用紙が重なり、1行目は左側半分ほどしか判読できないが、原稿用紙の裏から「いたつき=為よ。」と読める。「アイヌ語講義原稿」に「為ヨイタッキイ」と書いてある。「為よ。」がどのような文脈で用いられたか不明であり、アイヌ語を判断することは難しい。etak iki, etak ki かもしれない。

- いでつけき<sup>(10)</sup> = するふ。  
 いるかねちうか<sup>(11)</sup> = 待て。  
 いやいきぶて<sup>(12)</sup> = 危嶮。  
 いかい志ゆぶね<sup>(13)</sup> = おたまゑ<sup>ゝ</sup>やく志。「いかい」尖らさる扁平のもの、意  
 いてめききり<sup>(14)</sup> = 尺蠖。「てめ」量る「い」物柄「ききり」虫のこと、物を量る虫。  
 いびろれ<sup>(15)</sup> = ぶゆ。「い」きず「ひろれ」附ける、傷を附ける物。  
 いめる<sup>(16)</sup> = 電光。  
 いゑわろれい<sup>(17)</sup> = 應答の禮。  
 いからん<sup>(18)</sup> = 真直<sup>ゝ</sup>回らす<sup>ゝ</sup>。(□□□□□□)<sup>(19)</sup>。  
 地名<sup>(20)</sup>。見透<sup>ゝ</sup>。迂回せず<sup>ゝ</sup>。
- いゑゑ<sup>(21)</sup> = 告くる。「いゑゑ」後より、「ゑゑ」云ふ、  
 いたきすら<sup>(22)</sup> = 遺言。  
 いかち<sup>(23)</sup> = 小供  
 いね<sup>(24)</sup> = 及び  
 しいゑよころ<sup>(25)</sup> = 信する  
 いぬ<sup>(26)</sup> = 聞く  
 いたう<sup>(27)</sup> = 鼻、又魚名 江戸、伊豆、  
 いたうたんね<sup>(28)</sup> = 蚊 鼻長の義  
 いるかいねちうか<sup>(29)</sup> = 待て  
 いころべ = 汝の所持品<sup>(30)</sup>  
 いころべちね<sup>(31)</sup> = 汝の品を失ふ<sup>ゝ</sup>

- (10) 「アイヌ語講義原稿」に、「為スナ イデッケキ」と書いてある。先に「イダッケ」と書いて線で消して、「イデッケキ」としている。itekke iki. そうするなよ。次の例文を参照のこと。ekattar, pon ekattar eyaypuni cik iyaykipte! itekke iki yan! って、huci 怒る。(あぶないことをして遊んでいると) 子どもたち、小さな子たちが真似したらあぶないよ。そういうことするもんでないって、おばあさんが怒る(本別)。あるいは、itekke ki. 次のような例文を採録している。「母親が、upopo ene ne yakkay eikostek katuwen upopo itekke ki yan とよく言っていた」。話者により「あんまりみっともないウボボするな」と和訳されている。
- (11) 「アイヌ語講義原稿」に「待テ イルカ・イネチウカ」とある。田村すゝ子が帯広で採録した調査項目「32. 用意する」に、irúka 'én'eciwka, tané kuimi na. (帯広 2005 : 243) という例文が記録されている。和訳すると、ちょっと待って、いま私、服を着るから。en- 目的格人称接辞 1 人称単数、私を、eciwka 待つ。帯広では iruka も irukay も報告されている(帯広 2005)。報告者による調査で本別では irukay を用いる。irukay en-eciwka. (本別) 和訳は、ちょっと(私を)待って。
- (12) 「アイヌ語講義原稿」に「危嶮 イヤイクプテ、」と記されている。iyaykipte. あぶない(本別)。
- (13) 「アイヌ語講義原稿」に「蟲類」に「ヲタマジヤクシ イカイシュブネ。(「イカイ」尖ラサル平ナル物)」とある。ekasupne. おたまじゃくし(本別)。
- (14) 「アイヌ語講義原稿」に「蟲類」に「蠖レ尺、イ・テム・キキリ。(「テム」量ルコト「イ」総テノモノ、「キキリ」蟲)」とある。itémekikir. 青虫(本別 2006 : 160)、また、尺虫、はかり虫(本別)。
- (15) 「アイヌ語講義原稿」に「ブユ、イ・ピロレ。(「イ」キズ「ピロレ」ツケル)」とある。報告者の調査ではブユは ipirore であり、目黒治助による調査では ipirorep である(本別町教育委員会編 1989 : 66)、(内田・沢井 2002 : 1052)。
- (16) 「アイヌ語講義原稿」に「電、イメル」とある。imeru. いなびかり(本別)。
- (17) 「應問の禮」と書き、「問」という字に斜線をひき、その右側に「答」という字を書いてある。「アイヌ語講義原稿」に「今日ハ、イシ・オロレイ、」とある。あいさつの言葉。村崎恭子は「isi'ororee. (女が静かな声で言う)」と報告している(村崎 1983 : 173)。報告者は、本別で isiorore は男性同士のあいさつの言葉だと聞いたが、1988 年の北海道教育委員会の調査では、本別では男性は男性同士で、女性は女性同士でこのあいさつ言葉を用いる(北海道教育庁社会教育部文化課 1998 : 100-101)と報告されている。
- (18) 「アイヌ語講義原稿」に「真直ニ行ケ、」と書き、「行ケ」を線で消し、「真直ニナツタ、」としている。その下に「イーカアン、」(イカン別村)と書き、さらにその下に「イカン」を示す図が描いてある。また、「真直ニナツタ、」の上部に「物、人ニアラス」と書いている。帯広の広野氏は、ika を「曲ったところを行かないで、近道してまっすぐ行くこと。」(帯広 2005 : 14)、また、「ika 近道にとおって行くこと。」(同 : 272)と説明している。「ななめによこぎろう」のアイヌ語として、ika 'omán. とある。広野氏の説明では、「近道して行く」(同 : 289)と報告されている。
- (19) 紙のよじれにより、一部の文字(6文字分)判読できない。
- (20) 「十勝地名考」に「唎別、イカンベツ、イーカアン、(イーカ) 曲ルベキヲ直線ニ、(アン) 行ク也」とある。

- 後カラ  
 (21) 「アイヌ語講義原稿」に「告クル イオン・エエ」とある。i-os e-ye. あとからあなたが言う。または、i-os ye. あとから言う、であるか。
- (22) 「アイヌ語講義原稿」に「遺言」の記録なし。沙流方言で「イタクラ 遺言(する)」(萱野 1996 : 58)。
- (23) 「アイヌ語講義原稿」に「子供 ポー」とある。ekáci. 子ども(本別 2006 : 47)。帯広で ekáci は子ども(帯広 : 34)、また、ekáci 7 ~ 8 歳の男の子(帯広 2005 : 74)と報告がある。「ポー」は「ぼう」の項を参照のこと。
- (24) 「アイヌ語講義原稿」に記載なし。ene. …でも、もまた。kam ene a-e korkay pet otta an sey usa a-e. (本別) 和訳は、肉も食べるけれども、川の貝も食べる。
- (25) 「アイヌ語講義原稿」に記録なし。eisokor. 沢井氏は「本気にすること」と説明した(本別)。帯広の調査項目「23. 信じる」で tápne eháwki yákkay somó ku'éysokor. 広野氏により、「どんなにいても おれ本気にしない」と和訳されている(帯広 2005 : 254)。
- (26) 「アイヌ語講義原稿」に「聞 ヌ、ヌ アヌウ 我々聞」とある。inu. 聞く、nu ... を聞く(本別)。
- (27) 「アイヌ語講義原稿」に「鼻、エトゥー。(江戸城ノ地海中ニ突出シ鼻ノ如シ)」とある。「アイヌ語講義原稿」で「エトゥ」である。etú. 鼻(本別 2006 : 22)。
- (28) 「アイヌ語講義原稿」に「蟲類」に「蚊、エト・タンネ。(鼻長)」とある。etútanne. 蚊(本別 2006 : 161)。
- (29) 「アイヌ語講義原稿」に「待テ イルカ・イネチウカ」と記されている。また、(い)の項目にも「いるかねちうか = 待て」とある。
- (30) 次の行「いころべちね」を参照のこと。

- 汝物イラス  
 (31) 「アイヌ語講義原稿」に「失フ エコロベ オチエ」とある。エの字を太字で上書きしている。初めはイと書いたように読める。e-kor pe. あなたの持ちもの(本別)。帯広で、「なくす」をあらわす語として óciwe があげられている。広野氏は「外で落としたのは óciwe」と説明している(帯広 2005 : 212)。本別では otciwe は汚いものを捨てる(なげる)ことをいう。帯広の例文 a'óciwe aw an ari awki kús kuéstan kus kuóman a. (帯広 2005 : 329) を、報告者は以前、捨てられたようだ... と和訳したが、「落としたみたいだから私はさがしに行った」という意味であろう。帯広でも腐ったものをなげる(捨てる)、汚いものをなげることを óciwe という(帯広 2005 : 206)。「講義原稿」で「エコロベオチエ」は「汝物イラス」「失う」、「単語集」では「失ふ<sup>ゝ</sup>」とある。

(ろ)  
 ろった阿<sup>(32)</sup> === 奥へ進んで坐れ  
 ろるんべ<sup>(33)</sup> === 戦争

ろ°せ<sup>(45)</sup> === 重き。  
 ろうつるん<sup>(46)</sup> === 仲裁  
 ろ°らら<sup>(47)</sup> === ちり。

(は)  
 はんけ<sup>(34)</sup> === 近。  
 ろ°んけ<sup>(35)</sup> === 下流の方。  
 ろぼ<sup>(36)</sup> === 母親。  
 ろんく・ぶかちちう<sup>(37)</sup> === とんぼ。  
 ろ°け<sup>(38)</sup> === 頭。  
 ろ°れうれう<sup>(39)</sup> === 「ろ°」頭「れうれう」羽根打ちする、

(に)  
 にす<sup>(48)</sup> === 雲。  
 にまゆ<sup>(49)</sup> === 白。  
 にうねね<sup>(50)</sup> === 木鼠。木より木へ飛び移る。  
 に志やつた<sup>(51)</sup> === 明日。  
 にんけゑへ<sup>(52)</sup> === 胸板。  
 にねかつぶ<sup>(53)</sup> === 樹皮。新冠

草の頭へ  
 ろ°すくろ<sup>(40)</sup> === からす。炭色の物と云ふ意。  
 ろ°ったき<sup>(41)</sup> === ろたわり虫。  
 ろんかぶい<sup>(42)</sup> === 臍也。  
 ろ°いから<sup>(43)</sup> === 春「はい」年。「から」作る 年中  
 の萬物を□□□□□の意。  
 ろつり<sup>(44)</sup> === 倒れる。

(ほ)  
 ぼう<sup>(54)</sup> === 小供  
 ほん<sup>(55)</sup> === 小 「ほんべつ」本別地名或ハ小河。  
 ほいぬ<sup>(56)</sup> === 貂、てん。  
 ぼろ<sup>(57)</sup> === 廣ま。「ほろむい」幌向地名、「むい」湾形  
 の地、

- (32) 「アイヌ語講義原稿」に「<sup>ソコ</sup>其処ニ坐レ」、「此処ニ坐レ」に対してそれぞれ「トオンタ、ア」「タエンタ、ア」とある。「アイヌ語講義原稿」に「ロット」の記録なし。本別で、ror 上座、ta ... に。ror ta を続けて発音すると [rotta] となる。ror は家の入口から入り、炉のあるほうへ、奥にある上座をさす。a 座る。上座に座る、上座に座りなさい。
- (33) 「アイヌ語講義原稿」に記録なし。rorúnpe. 戦争、いくさ (本別 2006 : 57)。
- (34) 「アイヌ語講義原稿」に「近 ハンケ」とある。hánke. 近い (本別 2006 : 188)。
- (35) 「アイヌ語講義原稿」に「下流 パンケ」とある。先に「下方」と書き、「方」の字を斜線で消し「流」を書き「下流」と読める。panke. 川のしもて (本別)。
- (36) 「アイヌ語講義原稿」に「母 ハボ」とある。hápo. 母、おかあさん (本別 2006 : 50)。
- (37) 「アイヌ語講義原稿」に「蟲類」に「蜻蛉、ハンク、プカエチウ。」とある。hánkupkaeciw. とんぼ (帯広 2005 : 382)。
- (38) 「アイヌ語講義原稿」に「頭、パケ」とある。paké. ... の頭 (本別 2006 : 19)。
- (39) 「ろ°れうれう」がなにをさすのか、対応する日本語がない。「アイヌ語講義原稿」に「蟲類」に「蝶、パ・レウレウ。」(「パ」頭「レウレウ」羽根打シテテ止マル意 艸花ノ頭ニトマルノ意) とある。1979 年頃の目黒治助による調査では、沢井トメノ氏は「蝶」のアイヌ語名を parewrew と答えた(目黒による聞き取り。内田・沢井 2002 : 1019)。1990 年頃の報告者による調査では marewrew と呼んでいた。帯広で蝶は maréwrew (服部編 1964 : 192) と報告されている。
- (40) 「アイヌ語講義原稿」に「鳥類」に「烏、バスクロ、炭色ノモノ」とある。páskur. からす (本別 2006 : 158)。
- (41) 「アイヌ語講義原稿」に「蟲類」に「ハタオリ、バツタキ」とある。páttaki. バツタ (本別 2006 : 161)。
- (42) 「アイヌ語講義原稿」に「臍、ハンカブイ。」とある。hánkapyu, hánkapyue. へそ (帯広、服部編 1964 : 14)。
- (43) 「アイヌ語講義原稿」に「春 パイカラ、(パイ)年 (カラ)作ル」とある。原稿用紙のよじれにより、「萬物を」以降(おそらく 5 文字)は読めない。páýkar. 春 (本別 2006 : 198)。
- (44) 「アイヌ語講義原稿」に「倒レル ハツリ」とある。hácir. 倒れる (本別 2006 : 117)。音声資料に、hatcir 発音しているように聞こえ、確認したところ、hatcir でない、hacir だ、と答えた。帯広で調査項目「ころぶ」に hácir. (帯広 2005 : 215) と報告されている。
- (45) 「アイヌ語講義原稿」に「重キ パセ」とある。páse. 重い (本別)。
- (46) 「アイヌ語講義原稿」に「仲裁 ハウツルン」とある。本別ではこの語は確認されない。久保寺 (2020 : 85) に「hauturun-kur 仲介の労をとる ちゅうさい人 仲にたつて話をとめる人」とある。
- (47) 「アイヌ語講義原稿」に「ユリ バララ」とある。本別では記録なし。
- (48) 「アイヌ語講義原稿」に「雲 ニス」とある。nis. 雲 (本別 2006 : 182)。
- (49) 「アイヌ語講義原稿」に記録なし。nisu. 白 (本別 2006 : 107)。
- (50) 「アイヌ語講義原稿」に「獸類」に「木鼠、ニ・ウエオ」、「(木ヨリ木ニ蜚ビ移ル)」とある。「四足動物」にも「木鼠 ニウエオ」、「ニ口木ウエオ 蜚ウツル」とある。「ニ」の下に 1 文字書いてあり、上書きしたように見え、判読できない。その右横に線が引いてあるが、なにを意味するか不明である。報告者の調査では niueo. キネズミ (本別)。『本別町教育委員会』(1989) ではリス (キネズミ) niuweo ニウエオ。帯広でリス ni'ue'eo (服部編 1964 : 187) と報告されている。
- (51) 「アイヌ語講義原稿」に記述なし。nisátta. 明日 (本別 2006 : 196)。
- (52) 「アイヌ語講義原稿」には「胸 ペンラムフ 胸骨 ニンケウエ・へ。」とある。胸板は、帯広で rerár. (服部編 1964 : 13)。帯広で「胸」は、pénram, pénramuhu (服部編 1964 : 12)、本別で penramu である。
- (53) 「アイヌ語講義原稿」に記述なし。nikap. 木の皮 (本別)。
- (54) 「アイヌ語講義原稿」に「子供 ポー」とある。po, poho 子、息子。ku-poho 私の子、息子 (本別)。「いかち」の項を参照のこと。
- (55) 「アイヌ語講義原稿」に「小 ポン」とある。pon. 小さい、幼い (本別)。
- (56) 「アイヌ語講義原稿」に「獸類」に「<sup>テン</sup>黄鼠、ホイス」とある。「四足動物」にも「<sup>テン</sup>黄鼠ホイス」とある。hóynu. エゾクロテン (本別 2006 : 155)。テン hoynu ホイス (本別町教育委員会編 1989 : 48)。
- (57) 「アイヌ語講義原稿」に「大 ポロ オンネ」とある。また、「十勝地名考」に「浦幌、ウラホロ、」の語源分解がされており、「オロボロ、(オロ)内部也、(ポロ)廣キ也大也、内部ノ廣ク大ナル処」とある。poró 大きい (本別 2006 : 209)。広いは sép (本別 2006 : 210)。

ぼね <sup>(58)</sup> = 骨。	ぺんけ <sup>(71)</sup> = 上流の方。
ほに <sup>(59)</sup> = 腹。	べべけりちう <sup>(72)</sup> = 杜鵑。
ぼふぶから <sup>(60)</sup> = 小き質の鹿。	べつちや <sup>(73)</sup> = 河岸。「べつぼう」地名、支流。河の子、
ほつくふまり <sup>(61)</sup> = 土人の楽土として地下幾句の最下 底より。	べつちやろ <sup>(74)</sup> = 河の陥ち口
ほるけう <sup>(62)</sup> = 狼、叢みて物を取り殺す。	(と) <sup>(75)</sup>
ぼうゑた <sup>(63)</sup> = 犬の子。	とめんぴろ <sup>(76)</sup> = 雲雀。
ぼうぼきちう <sup>(64)</sup> = 鶯。	とたんゑい <sup>(77)</sup> = 其処に坐れ。
ほまゑき <sup>(65)</sup> = 満腹。	とたんゑいゑ <sup>(78)</sup> = 其処に置け。
(へ) <sup>(66)</sup>	といゑ <sup>(79)</sup> = 遠え。
ぺ <sup>(67)</sup> = えたたる、涓滴也。「ぺるつふい」地名、 <sup>(68)</sup>	とうるんべ <sup>(80)</sup> = 蛙。沼に居る物。
ぺかんべ <sup>(69)</sup> = ひゑ	とむ <sup>(81)</sup> = 光る。「とむとむききり」ハ螢也光る光る 虫 <sup>(82)</sup> 。
ぺけ逢 <sup>(70)</sup> = 明い、すむ      ぺけ逢別	どつこよ <sup>(83)</sup> = まむゑ。「どろこ」膨るゝ也。

- (58) 「アイヌ語講義原稿」に「骨、ボ子。」とある。 poné. 骨 (本別 2006 : 35)。
- (59) 「アイヌ語講義原稿」に「腹、ホニ。」とある。 honi. ... の腹、おなか (本別 2006 : 30)。
- (60) 「アイヌ語講義原稿」に「獣類」に「小鹿、ポナプカー。」とある。また、「四足動物」「牡鹿」に4つの名称が記録されている。「アプカー」、「ボナプカー、小ナルアプカー」「今年タンバ、ユック コトシノシカ 角新シキ小キモノ」「ピンネラウ □モセス大クモナラズ三寸位ノ角アルシカ」とある。本別では、おい (老い) た雄鹿を apka (本別町教育委員会編 1989 : 53) という。
- (61) 「アイヌ語講義原稿」に記録なし。本別で pokna-sir は地獄のことをさし、悪口のように使うという。
- (62) 「アイヌ語講義原稿」に「獣類」に「狼、ホル・ケウ、(叢ニテモノヲ殺ス)」とある。「四足動物」に「狼 フキ ワラ様 亡者  
ホル ・ケウ、カモイ フキ原ニテ  
[ママ]  
凡テノモノヲ 殺ロ ス者」とある。帯広出身の山川弘氏は、狼を horkewkamuy とよんでいた (内田祐一氏による)。広野氏は狼のアイヌ語名を「知らない」と答えている (服部編 1964 : 186)。本別で órkewkamuy. 常に kamuy (神) をつけてよぶ。
- (63) 「アイヌ語講義原稿」に「獣類」に「小犬、ボー、シタ、」また、「四足動物」に「小犬 ボー、シタ」とある。sitá 犬 (本別 : 155)。posita, pon sita 子犬。産まれたばかりの子犬は posita という (本別)。帯広では póysita. 子犬をいう (帯広 2005 : 375)。
- (64) 「アイヌ語講義原稿」に「鳥類」に「鶯、ボウボキチウ、(鳴声)」とある。帯広でうぐいすを 'uyúykecir' といひ、「por:potciw となく鳥ある。うぐいすと同じでないかな」(帯広 2005 : 381) と広野氏による説明がある。
- (65) 「アイヌ語講義原稿」に「満腹 グ・ホニシキ」とある。ku-honi sik. 私はおなかがいっぱい (本別)。
- (66) 「へ」の項目には he- の記録はなく、pe- (「べ」「ぺ」) が記録されている。1行目の「ぺ」と2行目の「ぺかんべ」のあいだには4行分あいている。
- (67) 「アイヌ語講義原稿」に「水滴」の記録なし。pe について、田村は、「水、固体の中に含まれていてどうかすると出て来る水気 (ぬれたタオルの水、果物の汁など、何かについている水やしずく、露) と記述している (田村 1996 : 518)。帯広で、調査項目「63 しずく」は pé cik (しずくが落ちる) ; wakka cik «水がしたたる» と報告されている (服部編 1964 : 230)。本別で wakka cik. しずくが落ちる。調査項目「62 露」は帯広で kinápe (服部編 1964 : 230)、本別でも kinápe である。
- (68) 北海道の地名を調査した山田秀三は「歴舟 れきふね 大樹町の地名、川名。歴舟川はこの辺での長河である」とし、永田地名解での記述、「ペ・ルツネ・イ。大水川 (水・大きい・もの)」を紹介している (山田 1984 : 327)。「十勝地名考」に「歴舟、ベルフネ」があげられ、地名の語源を記してある。原稿用紙のよじれにより、前半部分の一行全体の解説ができない。後半に、「(ナイ) 澤也、山澤ヨリ水ノ滴リテ太ク流ルゝ意」とある。また、別のページに地名のメモ書きが残されており、そこに「ベルツナイ」「ペ シタル ルツ 大」とある。
- (69) 「アイヌ語講義原稿」に「ひし」なし。pekanpe. ひしの実 (本別)。
- (70) 「ぺけ逢」を含む語として、「アイヌ語講義原稿」に「日、旭 シリベケリ チュプカムイ」とある。また、「晝 シリベケリ」とある。本別で、peker. 明るい、清い、(水が) 澄んでいる。以下2例とも本別の例である。eikostek ranpu peker kaska kus ponno ponka. 和訳すると、ランプ (の光) があまりにも明るいので少し小さくしなさい。wakka peker kus cepkoyki できる。和訳は、(川の) 水が澄んでいるので魚がとれる。ペケレ別は、川の名前であると思われるが、「十勝地名考」には記録されていない。
- (71) 「アイヌ語講義原稿」に「上流 ベンケ」とある。「上方」と書き「方」を線で消し、「流」と書き、「上流」としている。penke. 川のかみて、川上 (本別)。
- (72) 「アイヌ語講義原稿」に「鳥類」に「杜鵑、べべけり、チウ、(鳴声)」、「鳥」に「杜鵑、べべけり、チウ 鳴声」とある。「アイヌ単語集」のべべけの「ケ」は小さく書いてある。あとから書き足したのかもしれない。杜鵑 (ほととぎす) であろうか。吉田巖に totpit ほととぎす (伏) (帯広 : 33) とある。帯広の語彙集にも、本別の語彙集にも記録なし。
- (73) 「アイヌ語講義原稿」に「川岸 ベツチャ、」とある。地名「べつぼう」は、「十勝地名考」に「ベツポー、」(ベツ) 河 (ポー) 子也、河ノ子即支流」とある。pétca 川岸 (本別 2006 : 175)。
- (74) 「アイヌ語講義原稿」に「川」はない。「口、チャロホ」とある。帯広で pétcar 川口 (帯広 : 273) とある。
- (75) 「と」には tuyma が含まれている。なお、tu- で始まる語は「つ」にも含まれている。
- (76) 「アイヌ語講義原稿」に「鳥類」と「鳥」に「雲雀、トメンピロ」とある。本別で、ひばりは pukusa-cir. pukusa (ぎょうじゃんにく) がとれる頃に鳴くので、pukusa cir という (内田・澤井 2002 : 1033)。十勝毛根での採録として、とめむびろ tomembiro つばめ (吉田 2005 : 34) とある。
- (77) 「アイヌ語講義原稿」に「其処に坐れ トオンタ、ア」とある。「オ」は小さく書いてある。toon ta a. (彼は) そこに座る、そこに座りなさい (本別)。
- (78) 「アイヌ語講義原稿」に「其処に置け トオン、タ、アマ、」とある。オは他の文字より小さく書いてあるように見える。「トオンタ、アマ」を書き、「ヌア」を線で消して「マ」にして、全体として「トオンタ、アマ、」と読める。toon ta ama. (彼は) そこに置く、そこに置きなさい (本別)。
- (79) 「アイヌ語講義原稿」に「遠 トイマ」とある。túyma. 遠い (本別 2006 : 188)。
- (80) 「アイヌ語講義原稿」に「蟲類」に「蛙、オオアチ。 鳴声」とある。また、その右側に「トールンベ。(沼に居る物)」とある。tóorunpe (沼) . oóat (鳴声) . カエル (本別 2006 : 159)、帯広で tó'orunpe (ヒキガエル) (服部編 1964 : 190) である。
- (81) 「アイヌ語講義原稿」に「光 ヌベキ」はあるが、見出し語に「光る」はない。本別で tom は、ホタル、星、太陽、刃物などピカピカ光ることをいう。帯広で emús tóm. 広野氏による説明で「ぴかっと光る」。また、nekó sikihi tom. の tom に「きらっと光る」と話者による説明がある (帯広 2005 : 267)。
- (82) 「アイヌ語講義原稿」に「蟲類」に「ホタル、トムトム、キキリ (光ル光ル虫)」とある。十勝では、螢はトム・トム・キキリ (光り・光りする・者) とよばれる (井上 1989 : 26-30)。帯広で tómptomkikir. (服部編 1964 : 193)。本別でも tómptomkikir.
- (83) 「アイヌ語講義原稿」に「蟲類」に「マムシ ドッコニ。(ドッコ) ハレル」とある。本別では、ヘビはすべてタンネカムイとよぶ (内田、澤井 2002 : 1037)。帯広での採録なし。

- とう<sup>(84)</sup> = 沼 「とうぷい」<sup>(85)</sup> 当縁地名。沼尻也。 ちろんのつづ<sup>(96)</sup> = 狐。我々の捕獲えたもの。  
 と<sup>(86)</sup> = 物柄。「とかぶち」十勝地名。生氣ふき意。 ちつぶ<sup>(97)</sup> = 舟。丸木舟。  
 とい<sup>(87)</sup> = 土。 ちまから<sup>(98)</sup> = 鳴く、啼く也。  
 とむつた<sup>(88)</sup> = 日中よ。戸蔭地名。 ちかつぶ<sup>(99)</sup> = 小鳥。  
 ともつゑ<sup>(89)</sup> = 河を渡る。 ちかつぶこゝろきつづ<sup>(100)</sup> = 鷹。小鳥を捕ふる物。  
 とこむ<sup>(90)</sup> = こぶ也。「とこむわろ」床室地名。こぶ ちせころくる<sup>(101)</sup> = 主人。  
 のゐる処。 ちゐいれかむい<sup>(102)</sup> = 天皇陛下。  
 とのまころ<sup>(91)</sup> = ひるね ちきり<sup>(103)</sup> = 足。  
 とけま<sup>(92)</sup> = 日中 ちやろほ<sup>(104)</sup> = 口。  
 といたらん<sup>(93)</sup> = 畑を耕さう ちゆく<sup>(105)</sup> = 秋。  
 (ち)<sup>(94)</sup> ちやまぬ<sup>(106)</sup> = 溫柔。  
 (ちせ)<sup>(95)</sup> = 小屋。家也。 ちやらんけ<sup>(107)</sup> = 文句を并べる。くだまく也。  
 ちからさけ<sup>(108)</sup> = 自製の酒。濁酒也。「ちから」自製也。

- (84) 「アイヌ語講義原稿」に見出し語として「沼」はない。「十勝地名考」に「當縁、トウプイ或ハトウベリト通称ス、トープイ、(ト一) 沼也、(プイ) 尻也、沼尻也。」とある。to 沼 (本別)。  
 (85) 「十勝地名考」に「當縁、トウプイ或ハトウベリト通称ス、トープイ、(ト一) 沼也、(プイ) 尻也、沼尻也。」とある。  
 (86) アイヌ語地名を書いたメモに、「トカブチ」がある。「ト」から線をひき「トウモノ」、その下に「カブ 皮」と書き、トカブチの右横に「死セン」、「チ」の字から線をひき「生物テナイ」のように読める。清書が見つからないため、語源の意味をどのように解釈して記したのか不明である。  
 (87) 「アイヌ語講義原稿」に「土 トイ。」とある。toy. 土、畑 (本別)。  
 (88) 「アイヌ語講義原稿」に「to otta 日中に」はないが、「アイヌ語単語集」に「と」に「とけま=日中」とある。「十勝地名考」に「戸蔭 トツタ、 トオツタ、(トオツ) 日中也 (タ) ニ也 日中ニ変事アリシ意、」とある。「日中に」は本別で sirpeker hi ta という。  
 (89) 「アイヌ語講義原稿」に「渡ル トモツエ」また、「横 トモツエ」とある。cip ari pet a-tomotuye. 舟で川を渡る (本別: 69)。tomotuye. 横 (本別)。帯広の例で、調査項目「よこ」に tomotuye. (帯広: 324) と記述がある。また、調査項目「幅」に tomotuye nep pákno 'an? 広野氏は tomotuye に「ハバ」と和訳している (帯広 2005: 325)。  
 (90) アイヌ語地名を書いたメモに「トコム オロ」とある。帯広で tokóm. こぶ (瘤) (服部編 1964: 19)。本別で nitokom. 木のこぶという意味で、サルノコシカケをいう。火種にしてビウチ石から着火させるのに使用した (本別町教育委員会編 1989: 87)。「十勝地名考」に床室 (とこむわろ) という地名の記録はない。不明である。  
 (91) 「アイヌ語講義原稿」に「ひるね」の記録はない。帯広、本別ともに昼寝の調査記録がない。  
 (92) 「アイヌ語講義原稿」に「日中」の記録はないが、「アイヌ語単語集」に「と」に「とむつた=日中よ」とある。tókes. 正午 (本別 2006: 198)。tókes 昼間 (帯広 2005: 16)、「正午」に tané tokes 'an. (帯広 2005: 331) とある。  
 (93) 「アイヌ語講義原稿」に「畑を耕す」の記録はない。toyta 畑仕事をする、畑をつくる (本別 2006: 102)。「畑を耕さう」とあることから、-an は人称接辞、聞き手を含むわたしたち、toyta-an で畑を耕す、耕しましょう。  
 (94) (ち) の項目に、ちや、ちゆの例が含まれる。  
 (95) (ちせ) がかっこに入っている理由は不明である。「アイヌ語講義原稿」に「家ニ入レ チセ・オレン・アフン」とある。cisé. 家 (本別 2006: 93)。  
 (96) 「アイヌ語講義原稿」に「獣類」に「狐、チ、ロンノツプ、(我々ノ殺シタモノ) とある。「四足動物」に「狐 我 コロス タ□ チ・ロン ノツプ・カモイ」とある。「ノツプ」の右の文字のうち、「タ」の次の1文字は判読できない。cirónnop. きつね (本別 2006: 156)。  
 (97) 「アイヌ語講義原稿」に「舟」をさす記録はない。cip. 舟 (本別)。  
 (98) 「アイヌ語講義原稿」に「啼 ラアーレセイ」とある。ラアー「レ」は上書きされており、「レ」に読めるので、仮に「レ」とする。帯広で、調査項目「182. 泣く」に ráse. [自] (声をたてて)、cis [自]「だまって」と報告されている (服部編 1964: 22)。本別で、ray-ciskar という語の記録があり、葬儀において、泣き声を死者に持たせるといふ。「鳴く、啼く」は、動物や鳥によっていくつかの動詞が確認されるが、「ラアーレセイ」も ráse も採録例がない。  
 (99) 「アイヌ語講義原稿」に「鳥類 チカップ、」鳥 チ・カップ」とある。cikáp. (本別 2006: 151)。  
 (100) 「アイヌ語講義原稿」に「鷹、チカップ、コキキップ、(小鳥ヲ捕フル) とある。また、「鳥」に「鷹 チカップ、コキキップ、捕フル」とある。本別では、話者がトンビと鷹の区別で迷っており、図鑑を用いた聞き取りもしたがそれほど身近な存在ではないと話していた。田村は帯広での調査の際に図鑑を参照しながら聞き取りをしたという。鷹は kapacir(?) とある (服部編 1964: 188)。広野氏は、kapácir と sicikap は、「トンビよりまだ大きい。似ている。羽根でわかる」と説明している (帯広 2005: 379)。  
 (101) 「ちせくる」と書き、「ちせ」と「くる」の間に「ころ」と書き加え、「ちせころくる」としている。「アイヌ語講義原稿」に「主人 チセコロ、クル」とある。「チセウン、クル」と書き、「ウン」を線で消し、「コロ」を加えて、「チセコロ、クル」としている。cisekor kur. 家の主人 (本別)。  
 (102) 「アイヌ語講義原稿」に「天皇 チマイレ・カモイ」とある。「最尊神」という字を消して、「天皇」と書いてある。広野氏が cimáwrekamuy は「生キ神サマ。天皇陛下ノコト」と説明している (帯広 2005: 80, 101)。本別での記録なし。  
 (103) 「アイヌ語講義原稿」に「足、チキリ。」とある。cikiri. 足、cikiri ... の足、あし (全体)、人間の足、動物の足、お膳の足 (本別)。  
 (104) 「アイヌ語講義原稿」に「口、チャロホ。」とある。caróho ... の口 (本別 2006: 23)。  
 (105) 「アイヌ語講義原稿」に「秋 チュク、」とある。cuk. 秋 (本別)。  
 (106) 「アイヌ語講義原稿」に「柔和 チヤンヌ」とある。帯広で casnu は「35. やさしい (容易)」(服部編 1964: 293) のアイヌ語として報告されている。本別で、やさしい (容易) に casnatara. casnatara は、kewtumu casnatara 心優しい人、性格が穏やかである、のようにも用いる (本別 2006: 225)。ku-kewtumu kay casnatara. 沢井氏は「心がなごむ」と説明した。sir casnatara は、土地がでこぼこしておらず、たいらな様子 (本別)。  
 (107) 「アイヌ語講義原稿」に「議論、ウコ、チヤランケ、」とある。caranke. 話し合い (本別)。caranke より解決が難しいほうは ukurutke といい、こちらは男と男の一騎打ちである (本別)。帯広で caranke は、「五分五分の男のなにか事故のときつかう言葉だ。子供や女につかう言葉でない」と広野氏の説明がある (帯広 2005: 199)。uko- が接頭した形での ukocaranke は本別、帯広ともに記録はない。  
 (108) 「アイヌ語講義原稿」に「濁酒 チカラサケ」とある。cikarsake. 自家製の酒、どぶろく (本別)。

ちまきふ <sup>(109)</sup> = うど	(ぬ)
ちにだ <sup>(110)</sup> = ゆめ	ぬぶ <sup>(119)</sup> = 原野
ち <sup>(111)</sup> = 男根	ぬから <sup>(120)</sup> = 傳へて云ふ
ちわかい <sup>(112)</sup> = 我等	くぬから <sup>(121)</sup> = 我見た
(り)	ぬ <sup>(122)</sup> = 聞け 命令
りくん <sup>(113)</sup> = 上方。「りくんべつ」陸別地名河名。	ぬさ <sup>(123)</sup> = 御幣 復 武蔵
りくんぶやら <sup>(114)</sup> = 煙出窓。	ぬんへ <sup>(124)</sup> = ゑぼせ
りやちびやく <sup>(115)</sup> = ゑぎ也。越年する谷地ゑぎ也。	ぬぶけえ <sup>(125)</sup> = 原の下端せ
りこわろ <sup>(116)</sup> = 天。上方の処。	ぬつり <sup>(126)</sup> = 原の上端せ
りい <sup>(117)</sup> = 高。	ぬむ <sup>(127)</sup> = 吸ふ
りてんたゑ <sup>(118)</sup> = 砂原。「りてん」柔ふる「たゑ」砂。	ぬんけ <sup>(128)</sup> = 扱ふ
	ぬぬか <sup>(129)</sup> = うやほう

- (109) 「アイヌ語講義原稿」に「ウド チマキナ、我ノ マ ヤリ艸 キナ艸」と読める。「チ」に「我ノ」、「マ」に「ヤリ」ではなく、「ヤク」の可能性はある。「キナ」に「艸」。cimakina. うど(北海道全域)(知里 1993[1976]: 植物篇68) 報告者による調査での記録はない。広野氏の語彙集(帯広)にも記録がない。
- (110) 「アイヌ語講義原稿」に記録なし。cinita. 夢(本別 2006: 39)。
- (111) 「アイヌ語講義原稿」に記録なし。帯広で ci, ciyé (服部編 1965: 15) . 本別では未調査である。
- (112) 「アイヌ語講義原稿」に記録なし。ciókay. 人称代名詞 1 人称複数(除外形) わたしたち、手前ども(本別 2006: 231)。田村により帯広方言の人称代名詞の調査が行なわれ、ci'ókay が「1 人称複数除外形」として記録されている(服部編 1964: 308)。
- (113) 「アイヌ語講義原稿」に「りくん」の記録はない。また、「十勝地名考」に地名「りくんべつ」の記録なし。rik 高いところ、rik ta 高いところに、rik peka 高いところで。rikun の例は rikunkamuy という神様の名前に確認される(本別)。
- (114) 「アイヌ語講義原稿」に「煙出窓」の記録なし。アイヌの伝統的家屋では、屋根の一部に「煙窓」や「煙抜きの窓」を設け、煙が外に出るように工夫した。本別では、これを etupok と呼び、炉の上についている(内田 1998: 119)。帯広の山川弘氏は、「エトウポク(煙窓)は入口の上についている」(内田 1994: 34)と説明している。内田によると、伝統的家屋の屋根に天窓のようなものがあり、これがリクンブヤルではないか(内田 1998: 125)という。沙流では「リクンスイ 煙出し穴: 家の屋根棟木の両側にある三角の穴」(萱野 1996: 467)、「rikunsuy / rikusuy 天井の煙出しの穴」(田村 1996: 580)とある。
- (115) 「アイヌ語講義原稿」「鳥類」に「シギ、リヤ、チビヤク、(越年スル「シギ」(ヤチジキ) ママ)とある。また、「鳥」に「シギ リヤ、チビヤク、リヤ越年スル チビヤク 鳴声」とある。cipiyak. ku ku ku と鳴く。riya- のつく形は採録なし(本別)。
- (116) 「アイヌ語講義原稿」に「天上 リコオロ」とある。「リコ」と「ロ」のあいだに「オ」を書き入れたように見える。rik 高いところ(本別)。「りくん」を参照のこと。
- (117) 「アイヌ語講義原稿」に「高 リイ」とある。ri. 高い(本別)。
- (118) 「アイヌ語講義原稿」に「砂原 リテン、オク、リテン 柔力」とある。本別で ota は砂、砂原をいう。riten は、柔らかい、柔らかくなった(本別: 223)、なにかうるけた(水分を含んだ)ことをいう。eikostek ruyanpe yupke ahinne toy kay oan riten, poronno wakka piskan peka an tek tanekuran eikostek ruyanpe ruy cikanak nisatta okimunpe an nankor. 報告者の試訳は、あまりにも雨がひどくて畑もすっかり riten した、あちこち水たまりができて今晚雨が降ったら明日は洪水になるな(調査日が雨の日で、窓から外を見ながらの会話。本別)。萱野は、リテンに「しなやか、柔らかい、ねばる」と記述している(萱野 1996: 468)。本別で riten に ota 砂が続く例が見つからない。
- (119) 「日本全国地名考」の長野県に「ぬぶ」の説明がある。今回、「日本全国地名考」の翻刻予定がないが、「ぬぶ」の記録が他には見つからないため、参考までに記述をみる。「長野、ナガノ (ふんかぬぶ)、(ふんか)ハ綺麗なる景色よき也。(ぬぶ)野也(略)」とある。ぬぶの「ぶ」は小さく表記されている。帯広で、調査項目「19. のはら(野原) núp. 《平地、山のない所》(服部編 1964: 215)。本別では nupka, pon-nupka, poronupka(本別 2006: 174)である。
- (120) 「アイヌ語講義原稿」に記録なし。和訳部分、「見た」と書き、線で消し、その下に「傳言て云ふ」と書いてある。「傳言」の「言」を消して「へ」にしている。全体で「傳へて云ふ」と読める。nukar. ... を見る、... が見える(本別 2006: 20)。
- (121) 「アイヌ語講義原稿」に記録なし。ku-nukar. 私が ... を見る、見た(本別)。
- (122) 「アイヌ語講義原稿」に「聞 ヌ、ヌ アヌウ」とある。「ヌ、ヌ」とヌを2回書いている理由は不明である。nu. ... を聞く、聞きなさい(本別 2006: 23)。
- (123) 「アイヌ語講義原稿」に「幣東 ヌサ」とある。山縣資料のうち、手稿「玉堂日誌」は今回翻刻しないと既に明記した。しかし、「日誌」に「幣」について記述があり、ここで記録されている「幣東」に関連することが書いてあるため参考にしたい。「日誌」の「地名の考察(一)」に「土人語と内地の地名の関係については史的興味あるものよして、[後略]」、「武蔵一 是は(ヌサウシ)で(ヌサ)とは「エナウ」の復[ママ]数で、御幣を澤山に樹てた處なり、」と記録している。なお、「r2」に「r2ふう 御幣の一本」とあり、「一本」と本数を限定している。また、吉田巖が帯広伏古の古川辰五郎(コサンケアン、明治元年生まれ)から聞き取ったイナウについての記録がある(吉田 1952: 59. 引用ページは[1984])。「削懸(イナウー本文ではルビ)イナウを立てればヌサという。ヌサは立てない間、イナウという。」「えなう」を参照されたい。
- (124) 「アイヌ語講義原稿」に記録なし。nunpa. ... を絞る、しばれ芋の団子を作る際に、ついたものを pukuro oske a-o wa a-nunpa wa... 袋に入れてしぼる…。(本別 2006: 115)。
- (125) 「アイヌ語講義原稿」に記録なし。帯広での調査項目「19. のはら(野原)」は núp. 《平地、山のない所》(服部編 1964: 215)と報告されている。kes はし(端)(本別 2006: 188)。
- (126) 「アイヌ語講義原稿」に記録なし。(野)原のアイヌ語は、ぬぶけえを参照のこと。pa …のかみて(上手)(本別)。
- (127) 「アイヌ語講義原稿」に記録なし。nun 吸う、手などを切って血が出たときに吸う、親が風邪ひいて苦しい子どもの鼻水を吸う、nunnun 赤ちゃんが乳を吸う(本別)。帯広で、調査項目「すする」は nun, núnnun. 広野氏は「口をあげないで吸うこと。赤ちゃんが乳吸う、手に細く血が出たとき、など」と説明している(帯広: 45)。
- (128) 「アイヌ語講義原稿」に記録なし。númke. ... を選ぶ(本別 2006: 142)。
- (129) 「アイヌ語講義原稿」に記録なし。「ぬぬか」の下に「愛する」と書いて縦線で消してある。田村による帯広での調査で、núnuka 「大切にする」(帯広 2005: 71)とある。本別では、a-nunuka の形で、a-nunuka cinita, a-nunuka kotan, a-nunuka cep, a-nunuka itak, a-nunuka p, a-nunuka hi, などの例を記録している。… を大切にする、大事にする、尊い。

- (た)
- たんね<sup>(130)</sup> = 長
- たっくね<sup>(131)</sup> = 短
- たんい<sup>ゆ</sup>つ<sup>(132)</sup> = 新あき角の鹿。
- たんだ<sup>(133)</sup> = 此処。「たんだら」此処に坐れ。「たらんべくらよ」<sup>(134)</sup>。是を持って。
- たすころ<sup>(135)</sup> = 霜。
- たらん<sup>(136)</sup> = 耕す
- たんい<sup>ゆ</sup><sup>(137)</sup> = 今年。
- たらんべねぶこん。<sup>(138)</sup> = 此の通り。「ねぶこん」道理、
- (れ)
- れぶん<sup>(139)</sup> = 沖。「れぶんかむい」の水牛也。禮文
- 島の水牛の居る島の意
- れあつちり<sup>(140)</sup> = 白鳥。「れたり<sup>(141)</sup>」白色。「チリ」鳥。
- れうけ<sup>(142)</sup> = 曲る。
- れら<sup>(143)</sup> = 風。「れらるい」風吹く。
- れたる<sup>(144)</sup> = 白色。
- れうす<sup>(145)</sup> = 宿泊する。
- (つ)
- つゑて<sup>(147)</sup> = 黙れ。「つゑてきまん」静ませよ。
- つらやらから<sup>(148)</sup> = 辛。
- つわ<sup>(149)</sup> = まらび。
- つらいむん<sup>(150)</sup> = 福寿草。

(130) 「アイヌ語講義原稿」に「長 タンネ」とある。tánne. 長い (本別 2006 : 210)。

(131) 「アイヌ語講義原稿」に「短 タックネ」とある。tákne. 短い (本別 2006 : 210)。

(132) 「アイヌ語講義原稿」「獣類」に「新角鹿、タンバ・ユック、(今年ノ鹿)」とある。また、「四足動物」に「タンバ、ユック コトシノシカ角新シキ小キモノ」とある。シカをさす yuk は総称で、年齢や性別に応じた特別な名称もある (知里 1993[1976] : 動物篇171-173) もの、『分類アイヌ語辞典 動物篇』に記録されている多くの名称の中に「今年ノシカ」は確認されない。本別での調査でもこの語の採録はない。tampa 今年 (名詞) と yúk 鹿 (名詞) (本別 2006 : 157) で「今年ノ鹿」を意味するのだろうか。

(133) 「アイヌ語講義原稿」に「此処ニ坐レ タアンタ、ア」とある。「タ」と「ン」の間に「ア」をあとから書き入れたように読める。taanta ここに (本別 2006 : 232)。a. 座る (単数)。ここに座りなさい、(彼が) ここに座る。

(134) 「アイヌ語講義原稿」に「持ッ ダアン ベク、ワニ」とある。また、同じページに「持テ、アニ」とある。taanpe これ (本別 2006 : 231)。ku- 主格人称接辞 I 人称単数、ani ... を持つ (本別 2006 : 113)。taanpe ku-ani. 私がこれを持つ、という意味になり、命令形であれば、taanpe ani. これを持ちなさい、となる。「単語集」で「くらよ」、講義で「クワニ」と表記されている。

(135) 「アイヌ語講義原稿」に「霜、タスコロ、」とある。táskor. 霜、しばれる空気 (本別 2006 : 185)。

(136) 「アイヌ語講義原稿」に「耕す」の記録なし。「たあん」が耕すという意味であるかは不明である。tóyta. 畑をつくる、耕す (本別 2006 : 102)。toyta-an. 畑を耕す、耕そう。toyta- an を、toy と ta-an にわけて、taan を「耕す」とした可能性があるか。

(137) 「アイヌ語講義原稿」「獣類」に「新角鹿、タンバ・ユック (今年ノ鹿)」とある。tánpa. 今年 (名詞) (本別 2006 : 197)。注(132) 参照のこと。

(138) 「アイヌ語講義原稿」に「此ノ通り タアンベ、ネブコン 道理」とある。ネブコンから線を引き「道理」と書き入れてある。taanpe nepkon ku-yaynu korkay eani nekon e-yaynu? 話者による和訳は、「オレこう思っているんだけど、」後半の和訳は、おまえさんはどう思う? (本別) taanpe nepkon このように、このとおりに。帯広の例で、調査項目「19. こう」「こうやるんだよ、よく見てなさい。」に taanpe nepkon akar pe esta an ne, pírkán nukár. と例文が記録されている。話者は、taanpe népkon を「こういうように」と説明している (帯広 2005 : 353)。

(139) 「アイヌ語講義原稿」「獣類」に「水牛、レブン、カモイ、(大洋ノ神) 天鹽ノ禮文鳥」とある。また、「四足動物」に「水牛 レブン、カモイ」とあり、「レブン」と書いた上から線を引き「沖」と書いてある。「鯨は沖の神 (repun-kamui) と呼ばれ、鯨をも殺す猛勇な神であるとして、さながら海中の王者として崇拝される (金田一 1973 : 22)。「水牛」は不明である。報告者による本別での調査で repunkamuy の採録はない。

(140) 「アイヌ語講義原稿」「鳥類」に「白鳥、レタツチリ、(白色ノ鳥) (レタリ (白))」とある。また、「鳥」に「白鳥 レタツチリ レタリ 白色チリ 鳥」とある。田村による調査で「おおはくちょう」は retátcir (帯広 2005 : 380) である。本別では retátcir はイタチのことをいう。更科源蔵は、「エゾイタチ」は、十勝 (本別、帯広、音更) や釧路の屈斜路や虻別ではサチリカムイ (サチリ神) と呼び、特に本別では意味は明らかではないが、チカシノノツツとか、アノノカカムイ (人の形をした神) とも呼んだという (更科 1976 : 324-326) 記述している。アノノカカムイ a-nunuka kamuy は、大切な神という意味であろう。

(141) retár 白い (本別 2006 : 217)。同じページに「白」を「れたり」、「れたる」と表記している。

(142) 「アイヌ語講義原稿」に「曲ル レウケ」「(曲レ) レエ」とある。ru rewke. 道が曲がっている (本別 2006 : 119)。

(143) 「アイヌ語講義原稿」に「風、レラ、」とある。réra. 風 (本別 2006 : 183)。rera ruy. 風が吹く (本別)。

(144) 「アイヌ語講義原稿」に「白 レタル、」とある。retár. 白い (本別 2006 : 217)。白鳥の「白色」をあらわす語に「れたり」と書いてある。ここでは「れたる」とある。

(145) 「アイヌ語講義原稿」に「宿泊スル レウス」とある。「アイヌ語単語集」にも「講義原稿」にも「レウス」と記録されている。本別で「泊まる」は rewsí. レウシ (本別 2006 : 93) である。

(146) 「つ」には tu-, ca-, ci- が記録されている。なお、ci- で始まる語は「ち」の項目にも記録がある。

(147) 「アイヌ語講義原稿」に「静ニセヨ ツウシテキファン」とある。別のページに「黙レ ツシテ」とある。tustek. 黙っている、じっとしている (本別)。帯広で「じっとしてろ」を tústek. tústek wa an. とある (帯広 2005 : 179)。

(148) 「アイヌ語講義原稿」に「辛 ツアヤカラ」とある。「つ」のあとに小さい「阿」が書いてあり、ca- の音をあらわす工夫をしていると考えられる。cárkar. から (辛) い (本別 2006 : 91)。

(149) 「アイヌ語講義原稿」に「ワラビ ツワ」とある。知里に、tuwa. 「ワラビ 新葉」(長萬部、様似、本別、名寄、近文) (A 十勝・石狩上川・手塩) とある (知里 1993[1976] : 植物篇242)。更科に「十勝や天塩、石狩川上流などではワラビをト°ワと呼んでいる (更科 1976 : 221) と記録されている。目黒による調査で、ワラビは warambi, ワラビの新葉は tuwa とある (本別町教育委員会 1989 : 81)。

(150) 「アイヌ語講義原稿」に「フクシュ艸 ツライムン」とある。「ツライムン」と書いたすぐ下に「エトノ ムン 草」と読める。ciraymun. 福寿草 (本別)。

(ね)	常の『ち』ふらずや
ねぶゑた <sup>(151)</sup> = 何か。「ねぶゑふねほうらふ <sup>(152)</sup> 」何を云ふのか。	らい <sup>(163)</sup> = 死也、『らいくる』死人也亡者也。
ねも <sup>(153)</sup> = 消ゆる。失せる。	らむらん <sup>(164)</sup> =
ねこふぼかい <sup>(154)</sup> = 何卒。	らまちころ <sup>(165)</sup> =
	らむゑろま <sup>(166)</sup> = 落ち附く。『らむ』の低也、『ゑろま』の重き也。
(な) <sup>(155)</sup>	らつつゑら <sup>(167)</sup> = 緩か。
(ら)	(む)
らむ <sup>(156)</sup> = 低。	むから <sup>(168)</sup>
らむろ <sup>(157)</sup> = 地。『らむむろ』 <sup>(158)</sup> まで低き処也。	(う)
らぶちゑふけ <sup>(159)</sup> = 蝸。『らぶ』羽根、『ちゑふけ』縮むる。	うせい <sup>(169)</sup> = 湯。
らゑゑ <sup>(160)</sup> = 滯く也。	うばつす <sup>(170)</sup> = 雪。「うはつするい」雪ふる。
らんぬま <sup>(161)</sup> = 眉也。	うわ <sup>(171)</sup> = 知らぬ。英の「ドントノー」の意。
らいよち <sup>(162)</sup> = 虹。『らいよ』非常ふる。奇怪ふる。『ち』男根。雨を尿として、如此多大の尿を降らすとの非	う・をるん・ちかつぶ <sup>(172)</sup> = 鴨。「うをるん」水中よ居るの意、「ちかつぶ」鳥類也。

- (151) 「アイヌ語講義原稿」に「何デスカ、ネフタタ、」とある。nep tata? ひとりが質問をして、相手が内容を聞かえなかったようなとき、相手はnep tata? という反応するような採録例がある(本別)。「転ぶ」という語を調査した際の例文に、nep tata ku-eokok tek ku-hacir. 報告者による試訳は、なにかに引っかかって私は転んだ、となる。nep tata, nekon tata, 以外にも nen tata, ney tata, enon tata, onon tata など、tata が疑問代名詞と共に、「なにに、だれだれ、どこどこ、どこそこへ、どこそこから」となる例が確認される。
- (152) 「アイヌ語講義原稿」に「何ヲ云フノカ ネフタプエエハウアナ」とある。「エエ」に続く4文字分を上書きして「ハウアナ」と読める。本別で、nep tap e-ye aw an a! という例文を採録している。言っただけか、言うべきではないことを言ってしまった時など、nep tap e-ye aw an a. (報告者による試訳、おまえさんは一体なにを言うんだ)と叱られたり、注意を受けるような表現である。「ゑ」は「講義原稿」の「ええ」、e-ye (あなたが言う)である可能性がある。「ハウアナ」の「ハウ」は、本別で'aw はhawの異形態(切替1996:173)であり、全体としてnep tap e-ye (haw an a. と読める。
- (153) 「アイヌ語講義原稿」に「消ユル ウス」とある。「ねも」は不明である。
- (154) 「アイヌ語講義原稿」に「何卒 ネコナボカイ、」とある。白糠では、ネコナボカイ nekona pokay. が「どうにか」をあらわす(田村雅史2010:265)。なお、名前をたずねる際は、e-re nekon an? と記録されている。nekon pokay なんとかして、どうにかして(本別)。
- (155) (な)の項目には、なにも書いていない。
- (156) 「アイヌ語講義原稿」に「低い ラム」とある。ram. 低い(本別2006:210)。
- (157) 「アイヌ語講義原稿」に「地下 ラオロ」とある。ra 下のほう、低いほう、or... のところ、ra or pakno 下まで(本別)。
- (158) 「低い ラム」を参照のこと。ram or. 低いところ。
- (159) 「アイヌ語講義原稿」「蝸類」に「蝸 ラブチュブケ。(「ラブ」羽根「チュブケ」縮メル)」とある。昆虫学の研究者井上壽によると、ラブチュブケはアブ(アブ科)で、翅に大きい黒斑があることから、ヒメアブのうちのメクラアブではなからうか、としている(井上2006:96-98)。rapucupke. 馬や牛について腹に卵をうんでまっしろくなる(本別、内田・澤井2002:1045)。
- (160) 「アイヌ語講義原稿」に「啼 ラアーレセイ」とある。「レ」は別の文字に上書きされているが、「レ」と読める。また、別のページに「涙、ナク ラーシ」とある。帯広でráse 泣く(声を立てて)が報告されている(服部編1964:22)。調査者田村によると、広野氏はrá:se と発音したので、田村がrase と第一音節を短く発音して、いいかと聞くと、広野さんはいいと答えた、と報告されている(帯広2005:24)。本別での採録なし。
- (161) 「アイヌ語講義原稿」に「眉、ランヌマ」とある。「ラ」と「ヌマ」のあいだに「ン」を書いている。「ラヌマ」と書いてから「ン」を入れて「ランヌマ」としたか、「ン」は小さい文字で記録したか不明である。ránnuma. まゆ(本別2006:20)。
- (162) 「アイヌ語講義原稿」に「虹、ライヨ、チ」とある。その下、右側に「ライヨ」と書き、「ライヨ」の下・右側に「大ナル」、その左に「通常テナイ」と書き、「ライヨ、チ」の「チ」の真下に「カモ」とある。「ライヨ、チ」はrayyo-ciのような発音であったか、あるいは、上記のように語源を意識して表記したか。本別でraóci(本別:183)、帯広でrayóci(服部編1964:229)である。虹についての伝承は北海道各地で記録が残されており、本別で虹はkamuy riwka(神様の橋)であるという。なお、報告者は各地の虹の言い伝えを調査したことがあるが、雨を尿として、という伝承は他に知らない。この記述が、山縣がアイヌ語を学んだ地域について知る手がかりになる可能性がある。
- (163) 「アイヌ語講義原稿」に「死ス ライ」とある。ráy. 死ぬ(本別2006:41)。ráykur 死者(本別2006:42)。
- (164) 日本語は書いていない。「アイヌ語講義原稿」には「賢 ラム、アン 又ハ ラマチコロ」とある。
- (165) 日本語は書いていない。「アイヌ語講義原稿」には「賢 ラム・アン 又ハ ラマチコロ」とある。ramatkor 賢い(本別)。
- (166) 「アイヌ語講義原稿」に「落附ク ラムシロマ」とある。「シロマ」を一括りにして右横に「重」と書いてある。落ち着く ositciw(本別)。「アイヌ語方言辞典」31. 価値、性質」54. 落着いた」のページに、八雲'osiroma、幌別'osiroma、宗谷でramúhu'osiroma とある。
- (167) 「アイヌ語講義原稿」に「緩 ラツツグラ」とある。ratcitará. 静かに、ゆっくりと(本別)。ratcitará enci-koyki. 話者の和訳で「(固有名詞、だれだれか)ちくりちくりといじめる」。ちくりちくりと私はいじめられた。また、次のような例文も記録されている。沢井氏「土砂降り1時間もしたら大変だ、iisoneka, 土砂降り...ruyanpe eikostek yupke somo ki tek ratcitará ruyanpe ruy manu kus okimunpe isam.」報告者による和訳、よかった、土砂降り...雨があまりひどく降らないで静かに降るから水害こないな(本別)。
- (168) (む)に「むから」という語だけ書いてある。
- (169) 「アイヌ語講義原稿」に「湯、ウセイ」とある。usey お湯(本別)。
- (170) 「アイヌ語講義原稿」に「雪、ウパッス」とある。upás. 雪(本別2006:182)。「うばつす」の「つ」は小さく書いてある。「うはつするい」の「つ」はやや小さくみえるので、見出し語にならない小さい文字であらわす。upas ruy. 雪が降る(本別)。
- (171) 「アイヌ語講義原稿」に「知らヌ ウワ(ドントノー)」とある。uwá. わかりません、知りません(本別2006:137)。田村による沙流方言の記述で、何か聞かれたときに、「さあ、知らないよ」と答える言い方(田村1996:801)で、田村の記述と同様に本別でも尻上がり発音される。
- (172) 「アイヌ語講義原稿」「鳥類」に「鴨 カモ、ウ、ヲルン、チカッブ、(河中ニオル鳥)」とある。また、「鳥」に「カモ ヲウルウン、チカッブ 河中ニオルヲルウン」とある。worincikap. カモ(鴨)(本別2006:158)

うらり <sup>(173)</sup> = きり。がす。	うちゑべうこて <sup>(186)</sup> = あやめ草。「うちゑべ」魚。「う
うこいけ <sup>(174)</sup> = 争ふ。喧嘩。争闘。	こて」つふぐ。蒼の形魚を并べて、つふぐか如ゑ。
うこさんによ <sup>(175)</sup> = 相談。「うこ」相手ふり。	うこらい <sup>(187)</sup> = 一処よほとめる、
うちちやらんけ <sup>(176)</sup> = 議論。	
うるい <sup>(177)</sup> = 足らと 「うれかりぶ」十勝の村名賣買	(ゐ) <sup>(188)</sup>
村 趾を慕ふて行くの意 <sup>(178)</sup> 。	
うかた <sup>(179)</sup> = 覆ふ。ふたする。始末する、	(の)
うか・とうねま <sup>(180)</sup> = 離るゝ。	のや <sup>(189)</sup> = よもぎ、「のやうゑ」十勝原野の名。よも
うてきさむうん <sup>(181)</sup> = 并ぶ。列を成す。	ぎの多き処。
うともいらん <sup>(182)</sup> = 絶交。	のぼり <sup>(190)</sup> = 山。
うやいこちや・ここあん <sup>(183)</sup> = 和睦。	のん <sup>(191)</sup> = 唾。
うこらん・らまちてらん <sup>(184)</sup> = 仲善ゑ「らまちて」	のちきりり <sup>(192)</sup> = ちご
好き物、	のちう <sup>(193)</sup> = 星。
うす <sup>(185)</sup> = 消ゆる。滅する。	のか <sup>(194)</sup>

- (173) 「アイヌ語講義原稿」に「霧 ウラリ」とある。úrar は、雲 (白いモクモクとした)、urar at ガス (霧) がかかる (本別 2006: 182)。
- (174) 「アイヌ語講義原稿」に「ケンクワ ウコエケ」とある。見出し語 (喧嘩) の漢字を途中まで書き、その右横に「ケンクワ」とカタカナで書いてある。ukóyki. けんかする (本別 2006: 74)。
- (175) 「アイヌ語講義原稿」に「相談、ウコ、サンニヨ、」とある。ukosanniyo. 相談する (本別)。
- (176) 「アイヌ語講義原稿」に「議論、ウコ、チャランケ、」とある。(ち) チャランケの記述を参照のこと。
- (177) 「アイヌ語講義原稿」に「跡ヲ遂テ行く、ウルエカリ (売買村)「ウレイ」趾、「カリ」シトウ、) とある。「ウレイカリ」と書き、ウレイの部分丸で囲み、その外側にエと書き、ウレイの上に「ウル」と書いて、「ウルエカリ」と読める。また、「十勝地名考」に「売買、ウレカレップ」「ウレイカリッ (ウレイ) 足跡也 (カリッ) 慕フ也 或物ノ跡ヲ慕フテ行也、」とある。地名・売買村の語源分析から「あしあと」とした可能性がある。「アイヌ語方言辞典」「あと (跡)」は、帯広で ruyé (-he)《通った跡》(服部編 1964: 275) と報告されている。「足の裏」は、帯広で cikirasam と paráwrekotor, uréasam が記録され、'urépok は「クマの」とある。また、urépok と cikirasam は広野氏により「両方つかう」と説明がある (帯広 2005: 20)。ure は足の裏の例のみで、自立的に用いられる例はいまところ確認されていない。足をさすアイヌ語は、十勝方言で cikir, -i である (ちきりを参照のこと)。 静内方言における ure について、奥田は「足 (自立的に用いられることは稀。「足」も「脚」もふつう cikir / cikiri という)」と記述している (奥田 1999: 162)。
- (178) 山田秀三の『北海道の地名』に、「売買 うりかい、うりかり、うりかれえ」と、十勝札内川の西支流の名 (山田 1984: 310) としている。
- (179) 「アイヌ語講義原稿」に「重ナル ウカオ」とある。ukáo. ... を重ねる、... をしまう (かたづける) (本別 2006: 125)。
- (180) 「アイヌ語講義原稿」に「離レル ウカトウエマ」とある。「ウカトウエマ」の「エ」は上書きされて「エ」と読める。帯広での調査項目「18. 粗い」において、「ukáttuyma 間はなれている」、「cisé ukáttuyma. 」は「家がまばらだ」と話者により和訳されている (帯広 2005: 291-292)。本別の調査ではこの語は確認されていない。
- (181) 「アイヌ語講義原稿」に「井ブ ウテキサムウン」とある。『アイヌ語方言辞典』の調査項目「79. 並ぶ」で、帯広では 'utéksam ta 'án. 《並んでいる》と報告されている。また「78. 並べる」は、'utéksam ta 'amá. (服部編 1964: 140) である。また、並んで立つ (前後にでも) ことは、'usám peka róski, また、'utéksam peka róski. と報告されている (帯広 2005: 214)。
- (182) 「アイヌ語講義原稿」に「絶交 ウトモイアン」とある。パチラーに Utomoye, ウトモエ、喧嘩. n. A quarrel. Wrangle. To talk together. (パチラー 1938: 546) とある。本別での記録は確認されない。
- (183) 「アイヌ語講義原稿」に「和睦 ウヤイコチヤ、ココアン」とある。cakoko は... を教える (他) (帯広 2005: 158)、調査項目「8. 叱る」を、koiruska paték itékke kí no pónoo cakoko usá kí yan. 広野氏による和訳は、「叱ってばかりいないで静かにいって聞かせなさい」(帯広: 199) とある。また、調査項目「10. 習う」に cakoko という語が記録され、これを話者は「意見する」と説明し、また、「yáycakoko といえば自分のこと自分で意見する」と話者による和訳が報告されている (帯広: 249)。本別でこの語は確認されていない。
- (184) 「アイヌ語講義原稿」に「仲善シ ウコ、 アン、 ラマチ テアン」とある。久保寺に uko-an (okai) 一緒にいる (久保寺 2020: 945) という記述がある。「らまちて」に「好き物」とある。吉田に、帯広伏古で採録された語 ukoramraike 仲よくなる (友と) が報告されている (吉田 2005: 80)。『アイヌ語方言辞典』「78. 仲が好い」で、'utúyaskarap (帯広、服部編 1964: 48)、本別でも utúyaskarap (本別: 55) である。
- (185) 「アイヌ語講義原稿」に「消ユル ウス」とある。us. 消える (本別 2006: 99)。
- (186) 「アイヌ語講義原稿」に「アヤメ ウチエベウコテ」とある。「ベウコテ」をくり、「ツナグ」と書いてある。吉田 (1970: 14) に、「夏脚絆はウチエベウコテムン (野あやめ草) の茎葉の乾き枯らされたもので編んだ」と記録されている。更科によると、日高から十勝にかけてはアヤメをチェブ・エウコテ・キナ (魚をつなぎ合わせる草) と呼んだ理由を、「葉を刈って乾しておき、魚をつなぎ合わせたりしたからである。これを見て藁のなかつた時代の開拓者たちは草鞋をつくったともいう」と書いている (更科 1976: 248-249)。「ち」と「ゑ」で「ちえ」を表わしている可能性がある。
- (187) 「アイヌ語講義原稿」に「ひととこにまとめる」という語、文の記録はない。静内方言で ukoraye [2 項動詞] ～を両手でかき寄せて持つ、～を抱きかかえる (奥田 1999: 157) と報告されている。
- (188) (ゐ) には記録がない。
- (189) 「アイヌ語講義原稿」に「ヨモキ ノヤ」とある。noya. よもぎ (本別町教育委員会 1989: 80)。
- (190) 「アイヌ語講義原稿」に「山、ヌプリ、」とある。nupúri. 山 (本別 2006: 173)。
- (191) 「アイヌ語講義原稿」に「唾 ノン」とある。non. つば (唾)、よだれ (本別 2006: 24)。
- (192) 「アイヌ語講義原稿」に「オトカヘ ノチキリリ」とある。nótkir, (本別 2006: 24) (帯広 2005: 13) あご。nótkirih. …のあご、ku-nótkirih. 私のあご (帯広 2005: 13)。
- (193) 「アイヌ語講義原稿」に「星、ノチウ」とある。nocíw. 星 (本別 2006: 180)。
- (194) 「のか」に対応する日本語は書いていない。

(た)	たわらち <sup>(205)</sup> = 蛙
たろ <sup>(195)</sup> = 内。内部	たとつぷ <sup>(206)</sup> = 髪。「たとつび」此の髪。
たろわ <sup>(196)</sup> = 夫から。	ためらに <sup>(207)</sup> = 股。
たびった <sup>(197)</sup> = 皆。一同。	たんくりすつ <sup>(208)</sup> = もののつけね。
たね <sup>(198)</sup> = 深え。「たねつ」大津地名。	た志よろ <sup>(209)</sup> = 臀。忍路の地名。
たはつく <sup>(199)</sup> = 浅え。	たくいま <sup>(210)</sup> = 小便。
た志ほけ <sup>(200)</sup> = 後ろ。	たぬまん <sup>(211)</sup> = 暮れ方。
た志もむさむん <sup>(201)</sup> = 右也。	たつうわえ <sup>(212)</sup> = 賞る。
たはらきさむん <sup>(202)</sup> = 左也。	たゑるゑ <sup>(213)</sup> = 不具。
たっかい <sup>(203)</sup> = 男子の総称。	たよち <sup>(214)</sup> = ちんぱ。
たこっこ <sup>(204)</sup> = 怪物。	たきんべあん <sup>(215)</sup> = 出水。洪水。山より押え来るも

- (195) 「アイヌ語講義原稿」に「内 オロ」とある。田村は、or について、以下のように記述している(田村1996:477)。or【位名】[概](所は oro / orke) ① (モノを表す名詞の後に置かれて、そのモノを場所としてとらえる名詞句とする。場所や時を表す名詞の後に置かれると、よりはっきりとその場所、その時を示す。目的語として位置を表す名詞句を要求する語、たとえば位置名詞 ta《…に/で》、un《…へ》など、動詞の接頭辞 o-《…に/で》など、他動詞 kus《…を通る》、oma《…に入る/位置する》などの前で多く使われる。)…の所、…のとき。(その他、文脈によって…の中、…の家、…の上などいろいろに訳せる。)  
「たろ 内。内部」は、地名「浦幌 ウラホロ、オロポロ、(オロ) 内部也、(ポロ) 廣キ也大也、内部ノ廣ク大なる処。」から「内、内部」という意味を導き出した可能性がある。
- (196) 「アイヌ語講義原稿」に「夫ヨリ」ヨリの横に薄い字で「カラ」と書き、「夫ヨリ」「夫カラ」、その下に「オロワ」と書いてある。or wa. …から、oro wa それから(本別)。
- (197) 「アイヌ語講義原稿」に「皆ナ悉 オピッタ、」とある。opitta. 全部、すべて(本別2006:208)。
- (198) 「アイヌ語講義原稿」に「深 オオ」とある。oo.(川が)深い(本別2006:210)。pet sep cikanakne somo oo korkay hutne cikanakne pet oo. 川(幅)が広ければ深くないが、川(幅)が狭ければ川は深い(本別)。
- (199) 「アイヌ語講義原稿」に「浅 オハック」とある。『アイヌ語方言辞典』「114. 浅い」は帯広で 'ohák. (服部編1964:271)。本別ではこの語の記録なし。
- (200) 「アイヌ語講義原稿」に「后 オシマケ」とある。ósmak. うしろ、ósmake (-he). …のうしろ(後)(本別2006:189) e-osmake ta an kur nen tap an a? あなたのうしろにいる人はどなたですか?(本別)
- (201) 「アイヌ語講義原稿」に「右 オシムサムン」とある。帯広での調査項目「26. 右」は、simon《右の》、simoysam《右側》と報告されている(服部編1964:237)。「右をむく」は esimonsamún sikíru. 広野氏の説明では、osímónsamún sikíru でもいい、と報告されている(帯広2005:324)。本別では音素交替(n+s→ys)により、pon sisam は poysisam, pon saranip は poysaranip となるが、pon sita(小さい・犬)は poysita とならずに ponsita あるいは posita(子犬)となる(澤井2006:13)。帯広では esimónsam, esimónsamún, esimoyasamun に見られるように音素交替を示す形と、音素交替を示さない両方の形が記録されている。また、osímónsamun, osimoyasama, osimoyasamun も同様である。意味について確認する。田村(沙流方言)は以下のように記述している(田村1996:636)。simoysam【位名】[概](所は simoysama) [simon-sam 右の・側] 右側。simoysama【位名】[所]…の右側、その(彼の)右側。続いて、esimonsamún をみていくと、e-…-un【接頭+接尾】[その頭・(位置名詞)にある/に向く]、①~③のうち、③の用法は、[副詞]…の方へ、…の方に向かって、と記述している(田村1996:71)。o-…-un【接頭+接尾】[その尻・(位置名詞)にある/に向く]とまとめ、その用法①~④までを記述している。ここではそのうち④の用法をみると、④[副]…から、…の方から(田村1996:450)と記している。esimoyasamun【副詞】[e-simoysam-un その頭・右側・へ] 右へ。esimoyasamun sikíru 右側へ向きを変える=右を向く、と記述されている(田村1996:124)。osímónsamún は、[o-simoysam-un その尻・右側・へ] 右側から、右のほうから、となる。「右」を指す語は、見出し語に「お志もむさむん」とあることから、simoysam ではなく、simonsam に近い語形だった可能性がある。
- (202) 「アイヌ語講義原稿」に「左 オハラキサムン」とある。オハラキサムンの「キ」は上書きされて太字になって読みにくい「キ」と判断して整理する。帯広の調査項目「27. 左」で hárkí 《左の》、hárkisam 《左側》(服部編1964:237)。「左を向く」ehárkisamún sikíru. 広野氏の説明では、ohárkisamún sikíru でもいい、と報告されている(帯広2005:324)。「右」の項目と同様に整理をすると、ehárkisamún [e-harkisam-un その頭・左側・へ] 左のほうへ。ehárkisamún sikíru は左側へ向きを変える=「左を向く」。ehárkisamún [o-harkisam-un その尻・左側・へ] 左側から、左のほうから。ohárkisamún sikíru は、「左のほうから向きをかえる」。
- (203) 「アイヌ語講義原稿」に「男 オッカイ」とある。また、別のページに「男児 オッカイ、」とある。ókkay. 男、男性(本別2006:47)。男児は okkay ekaci と、okkaypo. 「11, 12才」である(本別)。帯広で、ókkaypo は「男の子。10才前後」と記録されている(帯広2005:140)。
- (204) 「アイヌ語講義原稿」に「蛇、タンネ・オッココ(長キ怪物)」とある。蛇をさすアイヌ語は、本別でも帯広でも tánnkamuy(本別:159)(服部編1964:190)である。本別での調査で「怪物」に okokko という語は確認されない。
- (205) 「アイヌ語講義原稿」に「蛙、オオアチ。鳴声」とある。カエルは oaat(鳴声からそう呼ぶ)、pikki, toorunpe. (本別)。帯広で「ひきかえる」は toorunpe, 広野氏による説明では「ビキ、また、あまがえる(?)は kupkaruyke と報告されている(帯広2005:383)。
- (206) 「アイヌ語講義原稿」に「髪、オトツピ」とある。オトツピのオの右斜めに「広」と書いてある。「オトツピ」の下に「オトツピ 狭」とある。この「広」「狭」の意味は不明であるが、概念形と所属形を表している可能性がある。otóp. 髪の毛、otópi. …の髪の毛(本別2006:19)。
- (207) 「アイヌ語講義原稿」に「股、オメアニ。」とある。初めに「オンクリシュ」と書き、「オ」以下を線で消して、「メアニ」と書き、「オメアニ」と読める。「股」のアイヌ語は、本別、帯広でも不明である。もも(腿)は、本別で om である(本別2006:32)。帯広で om, omihi(帯広2005:19)である。
- (208) 「アイヌ語講義原稿」に「モ・ノツケネ オンクリスツ」とある。もも(腿)は、本別で om である(本別2006:32)。帯広では om, omihi(帯広2005:19)である。沙流方言では、omkursutu(hu) [om-kursutu 腿(もも)・根本]…のものつけ根(前側)とある。ただし、omkursut 概念形では未出とされている(田村1996:468)。
- (209) 「アイヌ語講義原稿」に「臀 オシヨロ 忍路高島等地名」とある。osór(帯広2005:18)・osóro. …の尻(本別2006:31)。
- (210) 「アイヌ語講義原稿」に「小便 オクイマ」とある。okúyima. おしっこする(本別2006:32)。
- (211) 「アイヌ語講義原稿」に「夕 オヌマン」とある。onúman. タガ(本別2006:199)。
- (212) 「アイヌ語講義原稿」に「賞ル オトウワシ」とある。「つ」のあとに小さく「う」と書いてある。tu- をあらわすために工夫と思われる。otúwasi. …をほめる、…をかわいがる(本別2006:73)。
- (213) 「アイヌ語講義原稿」に「不具 オシルシ」とある。本別での調査でこの語の記録はない。
- (214) 「アイヌ語講義原稿」に「チンパ オニチ」とある。帯広で「びっこをひく」'onici. [自]と報告されている(服部編1964:17)。報告者による本別での調査では、この語の調査記録はない。

山カラクルモノ アル

- (215) 「アイヌ語講義原稿」に「洪水 オキン ベ、アル」とある。okimunpe 大水害、洪水、山からくる洪水、okimunpe an. 大水になる、大水害(本別)。帯広では、'okímunpe 'an. 広野氏による説明として「水増えたこと、山から水あふれていること」(帯広2005:272)と報告されている。

のゝ意。	くこんふるべ <sup>(228)</sup> = 叔母。
ねぶに <sup>(216)</sup> = 起きる。	くうけゑ <sup>(229)</sup> = 肩。
ねむけ <sup>(217)</sup> = せき。	くする <sup>(230)</sup> = 釧路。国名、或物の通行する一定の路、
ね志け <sup>(218)</sup> = 内部。	くまとま <sup>(231)</sup> = 恐ろまき。
ねほんの <sup>(219)</sup> = 長時間	くハ <sup>(232)</sup> = 私見出す、発見する。
(く) <sup>(220)</sup>	くんね <sup>(233)</sup> = 夜。暗ま 黒色。「くんねまり」国後の 国名。日夜中よ現出せま島の意=地震の為？。
くゆぼ <sup>(221)</sup> = 実兄。「く」我が。私の。と云ふ意。	くんふの <sup>(234)</sup> = 早朝。暁方。夜のつゞきと云ふ意。
くろき <sup>(222)</sup> = 実弟。	くまよ <sup>(235)</sup> = 我休む。
くらに <sup>(223)</sup> = 私。自分。	くやねまをる <sup>(236)</sup> = 安心する。
くるまゆゑ <sup>(224)</sup> = 鳩。鳴き声也。	くたらいば <sup>(237)</sup> = 不安心だ。
くころさぼ <sup>(225)</sup> = 実姉。	くらむねま <sup>(238)</sup> = 気の合ふこと。「くらむ」我思ふ。 「ね志ま」の様よ、私の思ふ様よ。
くつれま <sup>(226)</sup> = 実妹。	くる <sup>(239)</sup> = 人間。人。
くころあちや <sup>(227)</sup> = 叔父。	

- (216) 「起きる」の「き」の字が小さく書いてある。あとから書き足したように読める。「アイヌ語講義原稿」に「起ル オブニ」とある。「オブニ」の下に「ク  
ンナノ オブニ 朝起」とある。opúni. 起きる、起き上がる (本別 2006 : 39)。
- (217) 「アイヌ語講義原稿」に「せき (咳)」の記録なし。ómke. せき (咳) をする (本別 2006 : 26)。風邪をひく omke, omkekar. (本別)。帯広では、  
ómke は「せき」(帯広 2005 : 12)、また、せきが出る (同 : 76)。
- (218) 「アイヌ語講義原稿」に「内部」の記録なし。óske. ... の中、... の内部 (本別 2006 : 191)。saranip oske cep ku-o. 袋の中に私は魚を入れる。
- (219) 「アイヌ語講義原稿」に「長時間」の記録なし。ohónno. しばらくの間、長い間 (本別 2006 : 201)。
- (220) (く) に ku- 主格人称接辞 1 人称単数が接頭する形で記録されている形が含まれる。
- (221) 「アイヌ語講義原稿」に「兄 クコサボ」とあり、「兄」をさす語と「姉」をさす語を書き間違えた可能性が高い。同じページに「従兄弟 クユボ」  
とある。初めにそれを「クササボ」と書き、縦線でササを消し、「ユ」を書き「クユボ」としている。その下に「アトマワシ」と書き加えられている。  
また、同じページに「長上」がある。「長上」の下に「女 サボ」と書いてある。「サボ」の右に、「男 ユ」とある。「サボ」と並べて書いてある  
ことから、「ユ」は、「ユボ」と読ませる可能性がある。本別で、yúpo は、兄、兄さん、妻の兄、夫の兄、年上のきょうだい、または年上の  
男のいとこ、姉の夫の兄をいう。ku-yupo. 私の兄 (澤井 2001 : 34-35) をいう。
- (222) 「アイヌ語講義原稿」に「弟 クアキ」とある。本別で、aki は、弟、妻の弟、夫の弟、年下の男きょうだい、または男のいとこ。ku-aki. 私の弟、  
年下の男性のいとこ (澤井 2001 : 39) をいう。
- (223) 「アイヌ語講義原稿」に「私 クアニ」とある。kuáni. わたし、俺、僕 (本別 2006 : 231)。人称代名詞 1 人称単数。
- (224) 「アイヌ語講義原稿」に「鳥類」に「鳩、クキシユエ、(鳴声)」とある。kúsyep. はと (本別 2006 : 158)。
- (225) 「アイヌ語講義原稿」に「姉 クユボ」とあり、「兄」をさす語と「姉」をさす語を書き間違えた可能性が高い。本別で、sapo は、姉さん、年  
上の女きょうだい、または年上の女のいとこ。私の姉は kusapo, ku-kossapo という (澤井 2001 : 33-34)。帯広の上野サグ氏によると「私の姉」  
は kusapo, ku-kor sapo である (澤井 2001 : 33-34)。
- (226) 「アイヌ語講義原稿」に「妹 クツレシ」とある。本別で、ku-turesi. 私の妹。turési は兄が妹をいう、姉が妹をいうのは mátaki という (本別  
2006 : 52)。
- (227) 「アイヌ語講義原稿」に「叔父 クコロアチャ」とある。「クコロアチャ」ku-kor 'aca のような発音であった可能性がある。本別で、ku-kor  
aca. 私のおじ。おじには、父方、母方の区別はない (本別 2006 : 53)。本別では、常に koraca (コラチャ) のように発音された。清川ネウサル  
モン (沢井氏の母) は父親を ku-kor aca (クコラチャ) と呼んでいた。aca. おじ。帯広で、「42. おじ (伯・叔父)」を áca (kóraca (彼の))  
と報告されている (服部編 1964 : 43)。2005 年帯広の『語彙集』の調査項目「21. おじ」で、おじさん acá, áca といわない、とある (アクセ  
ントの位置)。ku-kór acá. (帯広 : 9)。また、別のページに、調査項目「21. 伯叔父」kóraca とある。話者により「kóraca 父母の兄弟、祖父母  
の兄弟、その上の兄弟、父母のいとこもだろう」(帯広 2005 : 137) と報告されている。
- (228) 「アイヌ語講義原稿」に「叔母 クコンナルペ」とある。ku-kónnarpe. 私のおば。unárpe. (よその) おばさん (本別 2006 : 53)。帯広で、調  
査項目「22. 伯叔母」ku-kónnarpe. 話者広野氏の説明では、「父母の姉妹、祖父母の姉妹、その上のも、父母のイトコもだろう」とある (帯広  
2005 : 137)。2005 年発行の『広野ハルさんの基礎語彙調査資料』の調査項目「おば」が、報告者の入力ミスにより nárpe と印刷されているが、  
これを unárpe と訂正する。
- (229) 「アイヌ語講義原稿」に「肩、クークエ。」とある。kúkew 肩、kúkewe... の肩 (本別 2006 : 27)。帯広で、肩は kúkew, kúkewe と報告されている (服  
部編 1964 : 10)。
- (230) 「アイヌ語講義原稿」のメモ書きのページに「クスル」とある。「クスル」をまんなかに書きその右に「アリクミチ」、「クスル」の左に「クシロ」  
とある。
- (231) 「アイヌ語講義原稿」に「恐シキ クシトマ」とある。ku-sitoma. 私は...がおっかない、恐ろしい。ku- 主格人称接辞 1 人称単数、sitoma ... が  
恐ろしい (本別)。
- (232) 「アイヌ語講義原稿」に「見出す ク、パ」とある。pa... を見つける、ku-pa. 私が...を見つける (本別 2006 : 125)。
- (233) 「アイヌ語講義原稿」に「夜 クンネ」とある。また、「黒 クンネ、」とある。本別でも、kúnne は夜 (本別 : 199)、黒い (本別 : 217)、  
sirkunne 暗い、暗くなる。
- (234) 「アイヌ語講義原稿」に「朝 クンナノ」と、その下に「クライツキ」とある。kúnnano. 朝 (本別 2006 : 198)。esin kunnano 今朝 (本別)。
- (235) 「アイヌ語講義原稿」に「休ム 復 シニアン、単 クシニ、」とある。単は単数形、復は複数形を表していると思われる。sini は、休む、休憩  
する (自動詞)。私が (ひとり) 休むことを表すために、sini に主格人称接辞 1 人称単数 ku- をつけて、ku-sini (私が休む) となる。私たちが (複  
数) 休むときには、sini に複数を表す人称接辞 -an を接尾させ sini-an とする (本別 2006 : 42)。
- (236) 「アイヌ語講義原稿」に「安心 ク、ヤエシオロ」とある。切替は、yayesi'oro (自動詞) ~が安心する (本別) (切替 1996 : 284) と記述している。  
ku-yayesioro. 私は安心する。本別で、話者はこの語の意味を「なんにも心配しない」と説明した。
- (237) 「アイヌ語講義原稿」に「不安心 ク、タライバ、」とある。報告者による十勝方言の調査では「ク・タライバ」の記録がない。
- (238) 「アイヌ語講義原稿」に「気力合フ クラム、オシマ、」とある。「クラム」に「我思」と書いてある。オシマのオの上から線を引き「様」と  
書き入れてある。帯広の調査項目「26. 好む [好きだ]」で、帯広では konúpuru (他) である (服部編 1964 : 164)。田村による調査では、  
konúpuru に加えて ramu'osma も報告されている。hápo 'iotta kurámu'osma. 広野氏により「心持からこれはいい人だと思ふ」(帯広 2005 :  
200) と和訳されている。本別では、柳という木について、kamuy opitta ramu'osma ki (木) ne. と言う。話者により、「心の優しい木だから神  
様とっても柳が好きなんだって、ni ne wa kamuy opitta (そういう木だから神様みんな) 喜ぶ ni 木だから... と説明した。「好き」と和訳した。  
(239) 「アイヌ語講義原稿」に「人 クル」とある。また、「主人 チセコクル」とある。cisekor-kur 家の主人 (本別)。

- くやねさんによ<sup>(240)</sup> = 用向。 (ま)  
 くやねにんころ<sup>(241)</sup> = 願ふ。 まち<sup>(251)</sup> = 妻。  
 くころんるすい<sup>(242)</sup> = 入用。 まつねゑた<sup>(252)</sup> = 牡犬<sup>(253)</sup>。妻とふるべき犬の意。  
 くこれとらんね<sup>(243)</sup> = 不用。 まやねけ<sup>(254)</sup> = 痒ふ。  
 くんふのねふよ<sup>(244)</sup> = 朝起き。 また<sup>(255)</sup> = 冬。  
 くい<sup>(245)</sup> = かむ。 ま<sup>(256)</sup> = 遊ぶ。  
 (や) まか<sup>(257)</sup> = 開く。明くる。  
 やんむ<sup>(246)</sup> = 冷。「やんむわつか」止若地名清冷の水 き物と云ふ意。  
 の意<sup>(247)</sup>。 まかよ<sup>(258)</sup> = たんほこ。「よ」物柄。切開て食すべ  
 やいらいけれ<sup>(248)</sup> = 有難ふ。謝す。 (け)  
 やねまけつぷ<sup>(249)</sup> = 蜘蛛。「や」らみ。「ねまけつぷ」 けむ<sup>(259)</sup> = 血。  
 編む。 けり<sup>(260)</sup> = 鮭或ハ獣の皮よて造りし靴。  
 やき<sup>(250)</sup> = 蟬。 けふゑ<sup>(261)</sup> = 林。「けふゑハ」蓋派ハ地名林の頭即

(240) 「アイヌ語講義原稿」に「用向 ク、ヤエ、サンニヨ」とある。帯広での調査項目「全部の」の例文「すべての人がしがあわせになるように」を、広野氏は 'áynu opittano pirkano yayésanniyo kuni áki rusuy. とアイヌ語にしている(帯広2005:361)。本別では、yayésanniyo の記録はなく、yaykosanniyo と esanniyo が確認される。yay-ko について、中川は、yay-ko 「自分に対して」「自分と一緒に」=「ひとりでも同じ関係にあり、yay- は動詞の目的語相当だが、yayko- は副詞的な役割を果たす(中川2024:211)、としている。切替は、十勝方言の yaykosanniyo (自動詞)を、「～が一人でよく考える」(切替1996:285)と記述している。報告者による本別での調査で、話者は yaykosanniyo を「よく考えれ」と和訳した。esanniyo についてもみていく。e- について中川は、「～について、～で以て、～(場所)で」と記述している(中川2024:193)。本別で採録した例文は、「なんでも、なにごとでも解決できるような nep ene yakkay esanniyo easkay kur kakkemat kay okay pe tap an na. それみんな神様に授けられたんだと。」というもので、話者は esanniyo を「解決する」と和訳している。

(241) 「アイヌ語講義原稿」に「願 ク、ヤエ、ニンコロ、」とある。本別、帯広での記録がない。

(242) 「アイヌ語講義原稿」に「入用 クコン、ルスイ、」とある。音素交替により r+r → nr となることから、kor rusuy が続けて発音されると konrusuy になる。…がほしい、…をほしがる。ku- 主格人称接辞1人称単数が接頭し ku-konrusuy. 私は…がほしい(本別)。

(243) 「アイヌ語講義原稿」に「不用 クコレトランネ、」とある。田村は、etoranne を次のように記述している。【他動詞】①「…がめんどう(だからい)だ、…がきらいだ、…がいやだ。②[助動詞的用法](動詞句の後に置かれて)…したくない(田村1996:134)。中川は、「9.3.3 他動詞の助動詞的用法」の「②可能・不可能」で etoranne 「～する気がしない」能力はあっても、やる気がおきない、気が進まないのでできないことを表す(中川2024:316)と記述している。本別で、動詞句の後に etoranne が置かれて、助動詞的に働く例文を採録している。tanto toonkur monrayke etoranne. (あの人、今日は仕事しつがらない)。帯広で、調査項目「借しむ」の例文「借しくて人にやれない。」を taánpé anááne kuéyar etoranne. (帯広:257)のように、etoranne が動詞句の後に置かれて助動詞的な用法として用いられる例が確認される。クコレトランネ、ku- 主格人称接辞1人称単数、kor …を持つ、所有する、etoranne…したくない、…するのに気が進まない。ここでは目的語が書いていないため、私は…が欲しくない、不要だ。

(244) 「アイヌ語講義原稿」に「起ル オブニ」とあり、その下に「クンナノ オブニ 朝起」とある。kunnano 朝(本別2006:198)、opúni(単数)起きる(本別2006:39)。kúnnano opunpa-an tek inkar-an akus issirikuran etap taskor yupke ru an. (opunpa は opuni の複数形)話者はこれを「朝見たらすごい霜降ったあとあるな」という意味と説明した。

(245) 「アイヌ語講義原稿」に「かむ」の記録はない。kuy. …をかむ(咀嚼)(本別2006:89)

(246) 「アイヌ語講義原稿」に「冷 ヤムム(止若村)冷水ノ意」とある。また、別のページに「冷水、ヤムム」とある。ただし、この「水」という字は上書きされており、「水」にも「氷」にも読める。yam. 冷たい(本別)。

(247) 「十勝地名考」に「止若、ヤムワカ、ヤムワッカ、(ヤムム)冷也、(ワッカ)水也、冷水也」とある。

(248) 「アイヌ語講義原稿」に「有難イ ヤイライケレ」とある。「ヤイライキリ」と書いて、「キリ」を消して「ケレ」と書き、「ヤイライケレ」と読める。また、別のページに「謝ス ヤイライケ」とあり、謝スの上に「ヤレキリ」と書いてある。iyayraykere. ありがとう(本別2006:242)。田村によると、[iyayraykere は i-yayirayke-re 人・感謝する・させる]、[iyayiraykere の y の後の i が落ちた形]である(田村1996:258)。

(249) 「アイヌ語講義原稿」に「蜘蛛、ヤ・オシケツプ」(「ヤ」網、「オシケツプ」編ム)とある。帯広で、くも(蜘蛛)は yá'oskep. (服部編1964:194)。早口で yátep (帯広2005:382)。本別では yaatepkamuy (本別2006:162)である。

(250) 「アイヌ語講義原稿」に「蟬 ヤキ」とある。yaki. せみ(本別2006:161)。

(251) 「アイヌ語講義原稿」に「妻 マチ」とある。mat, 妻, maci. …の妻(本別2006:54)。

(252) 「アイヌ語講義原稿」に「獣類」に「牝犬、マツネ・シタ、(妻トナルベキ)」とある。また、「四足動物」に「牝犬 マツネ・シタ マツネ 妻ニナルベキ」とある。『アイヌ語方言辞典』の調査項目「めす(雌)」は mátné (帯広、服部編1964:180), mátné sita. (帯広2005:374)と報告されている。sitá. 犬(本別2006:155)。

(253) 説明に「妻となるべき犬」とあることから、「牝(おす)」ではなく「牝(めす)」の書き誤りであろう。

(254) 「アイヌ語講義原稿」に「痒 マヤイケ、」とある。mayáike. かゆい(本別2006:36)。

(255) 「アイヌ語講義原稿」に「冬 マタ、」とある。matá. 冬(本別2006:198)。

(256) 「アイヌ語講義原稿」に「遊ぶ マ」とある。ma. 泳ぐ(本別2006:153)。

(257) 「アイヌ語講義原稿」に「開く、明くる」は記録されていない。maká. …をあ(開)ける。apusta maka. 戸をあける(本別2006:95)。

サ ク

(258) 「アイヌ語講義原稿」に「タンホコ マカヨ マカ 明ケル ヨ 物」とある。makayo. ふきのとう(本別)。「たんほこ」はふきのとうのことだろうか。

(259) 「アイヌ語講義原稿」に「血 ケム。」とある。kem. 血(本別2006:35)。kem etuk ru an. 血が出ているよ。

(260) 「アイヌ語講義原稿」に「靴」の記録はない。ker. はきもの(履物)(本別2006:83)。cepker 魚皮製のはきもの。帯広では、調査項目「6. くつ、ker は、あきあじの皮でつくる。ヤナギの皮、ブドウツルの皮とか(でつくる)。sitúker は木の皮で(つくる)夏の靴」と報告されている。ker kar wa us. kukéri kuús. (帯広2005:27)。

(261) 「アイヌ語講義原稿」に「ケナシ」の記録はない。「十勝地名考」に「蓋派、ケナシバ、(ケナシ)林也(バ)頭也 林ノ上方也、」とある。広野氏は、調査項目「41. 林」のアイヌ語として kenás と答え、木原(きわら)、広い、どんな木でも、面積広い、と説明している(帯広2005:271)。本別では、kenas とはヤチダモ、赤ダモから生えた雑木がいっぱい生えているところ、谷地っぽいところ、水気があって、川ぶちをさす(本別2006:174)。

林の上の方也。  
 けららん<sup>(262)</sup> = 味好ま。  
 けうとも<sup>(263)</sup> = 心持、意志。  
 (ふ)  
 ふみひ<sup>(264)</sup> = 物の音。  
 ふま<sup>(265)</sup> = 祖母。  
 ふんき<sup>(266)</sup> = 高台。  
 ふまこ<sup>(267)</sup> = 古ま。昔。「ふしこべつ<sup>(268)</sup>」伏古別、  
 地名又古川也。  
 (こ)  
 こたん<sup>(269)</sup> = 部落。「かむいこゑむ」神居古潭地名、  
 神の住む部落<sup>(270)</sup>。  
 こつかへ<sup>(271)</sup> = 膝。

こたんころかむい<sup>(272)</sup>。 = 梟。部落として持つべき  
 鳥、  
 こつちやけ<sup>(273)</sup> = 前部。  
 ころこに<sup>(274)</sup> = 落、「ころぼつくる」落の下に居る人。  
 こい<sup>(275)</sup> = 波。  
 こいふむ<sup>(276)</sup> = 波の音。「ふむ」音也。  
 こつかいら<sup>(277)</sup> = 正座せよ。  
 こまね<sup>(278)</sup> = 軽し。  
 こいるまか<sup>(279)</sup> = 呵る。  
 こねか<sup>(280)</sup> = 砕く  
 こむけ<sup>(281)</sup> = 折進て曲る  
 ここむけ<sup>(282)</sup> = 倚りかゝる、もた進る  
 こむま<sup>(283)</sup> = かしま木  
 こむまたい<sup>(284)</sup> = かしま木原  
 こむまべ<sup>(285)</sup> = かしまの若木

- (262) 「アイヌ語講義原稿」に「ウマイ、ケラアン」とある。kéraan. おいしい (本別 2006 : 91)。  
 (263) 「アイヌ語講義原稿」に「心持、意志」のアイヌ語はない。kéwtum. 心、性格、kéwtumu. ... の心、... の性格、... の性質 (本別 2006 : 143)。例文として、「susu という ni はとつても心の優しい kewtumu pirka ni (木) ne. 」を記録している。話者による説明は「柳という木は心が優しい木」なので、inaw をつくるのに柳が使われるという (本別)。  
 (264) 「アイヌ語講義原稿」に「音 フミヒ」とある。humí, humíhi. ... の音 (本別 2006 : 218)。  
 (265) 「アイヌ語講義原稿」に「老婆 フジ 親戚ノ 老女 ルックネマツ」とある。「ルック」、また、「ルックネ」をくくって「老」と書いてある。帯広で、調査項目「13. おばあ (婆) さん」は、húci; rúknemat (服部編 1964 : 36) と報告されている。「アイヌ語講義原稿」に「ルックネ」と表記されており、山縣氏がアイヌ語を学んだ地域で rukne のように発音されていた可能性がある。田村による帯広での調査で、広野氏は発音について質問され、「rúpne でない。rúkne. 」(帯広 : 103) と答えている。本別で、おばあさん、祖母は huci. (本別 : 49) であり、両親をあらわす rupneutari が報告されており (ibid. : 50)、rukne でなく rupne と発音される。  
 (266) 「アイヌ語講義原稿」に「高台」の記録はない。帯広での調査項目「12. 丘、小山」に ráw húnki と報告されており (服部編 1964 : 213)、広野氏の説明では「小山。自然と高くなっているところ」であるという (帯広 2005 : 270)。本別での調査記録はない。  
 (267) 「アイヌ語講義原稿」に「旧 フシコ 伏古別」とある。húsko. 古い (本別 2006 : 195)。  
 (268) 「十勝地名考」に「伏古、フシコ フシコ、古キ也、(フシコベツ) ハ古河也」とある。  
 (269) 同じページの「梟」を参照のこと。kotán. 村、部落 (本別 2006 : 57)。  
 (270) 旭川、神居古潭地名「かむいこゑむ」であろう。  
 (271) 「アイヌ語講義原稿」に「膝、コッカバケ」とある。kokkapake. ひざ (膝頭) (本別)。  
 (272) 「アイヌ語講義原稿」に「鳥類」に「梟、コタン・コロ、カモイ、(部落トシテ持つべき)」とある。また、アイヌ語講義原稿「鳥」に「梟 コタン、コロカモイ」とあり、「國ニ持つカモイ」と和訳されている。「國ニ」の上に「村」と書いてあるのを消してある。國ニ持つツヘキ」の3文字を消し、「國ニ持つカモイ」と読める。kotánkorkamuy. ふくろう (本別 2006 : 157)。  
 (273) 「アイヌ語講義原稿」に「前 コッチヤケ」とある。本別の例で、切替は「kótcake (位置名詞) (kótca の長形) ~の手前」(切替 1996 : 218) と記述している。また、本別の口承文芸で、sirhontom wano ekurok nis i-kotcake ta hoski oyupu wa... という例を報告者が採録している。話者は「i-kotcake ta は、自分より先という意味」と説明した。また、本別で採録した例文、ponno en-kotcake ta rok yan. 和訳 (報告者による) は、前の方に座りなさい。帯広、調査項目「29. 前」に kótcake (静止物の) ; 'etók (移動物の) と報告されている (服部編 1964 : 237)。  
 (274) 「アイヌ語講義原稿」に「フキ コロコニ」とある。知里によると、北海道各地において kor-ko-ni は [kor (フキの葉) kor (もつ) ni (木) ] 葉柄をさす語である (知里『植物編』1976 : 17)。本別で伝承されていたコロポックルの tuytak が報告されており、そこでは kor pok un kur フキ (の葉) の下にいる人、と説明していた。フキの茎を korkoni と呼んでいた (本別)。帯広でも kórkoni ふき (帯広 : 282, 349) と報告されている。  
 (275) 「アイヌ語講義原稿」に「波 コイ、或 カイベ」とある。帯広での調査項目「49. 波」は kóy (服部編 1964 : 219) である。本別でも kóy である。カイベは、帯広 (2005) でも、本別でも確認されない。  
 (276) 「アイヌ語講義原稿」に「波音 コイフム、フム 音」とある。hum. 音、humí ... の音 (本別 2006 : 218)。  
 (277) 「アイヌ語講義原稿」に「正座セヨ、コッカイア、」とある。杉村キナラブック氏 (1888 年、深川生まれ) の伝承に、「あぐらをかいて坐る = 男の正座。キロウシレア キワ、片方立てひざをして坐る = 女の正座コッカエア」とある。男女で「正座」の違いがあるという (中川・大塚 1990 : 45)。帯広での調査項目「190. たてひざする」は kókka'e'a (服部編 1964 : 23) と報告されている。  
 (278) 「アイヌ語講義原稿」に「軽キ コシネ」とある。kósne. 軽い (本別 2006 : 211)。  
 (279) 「アイヌ語講義原稿」に「呵ル コイルシカ」とある。koiruska. ... に怒る、... に腹をたてる (本別)。ranmano ene e-hawki kus an-e-koyruska と母親かだれか (が) 怒る。和訳すると、おまえさんは、そんなことばかり言うから叱られるんだよ (本別)。帯広での調査項目「当たり前前」の「いうこと聞かないだからおこられるの当たり前だ」を、広野氏は somó iták nu no nékon ene yákkay ikí kus 'akoyruska yákkay pirka wa. とアイヌ語にしている (帯広 2005 : 307)。  
 (280) 「アイヌ語講義原稿」に「砕く」の記録はない。kóneka. 広野氏は「粉々にする」と説明している (帯広 2005 : 221)。本別で kóneka は「粉をねる」ことをいう。  
 (281) 「アイヌ語講義原稿」に「曲ル レウケ」とある。帯広の例で、「曲る」をさすアイヌ語は kómke, réwke である (帯広 2005 : 101)。kómke と réwke の違いについて広野氏による説明が報告されている。kómke は「曲る。意外に曲がること。めちゃくちゃに」と説明し、ni (木) が曲ることは kómke というが、ru (道路、道) が曲ることは kómke とは言わない。réwke は、「曲る。人間じゃがむことも。自然に曲ること」で、ni (木) も ru (道路、道) も réwke といえる、というものである。本別では ru rewke. ikkewe rewke. の例が記録されている。  
 (282) 「アイヌ語講義原稿」に「もたれる」の記録なし。本別 (2006)、帯広 (2005) に採録なし。  
 (283) 「アイヌ語講義原稿」に「かしわ」の記録なし。本別、帯広ともに komni は「かしわ (木)」(本別 2006 : 167)、(帯広 2005 : 281) である。  
 (284) 「アイヌ語講義原稿」に「かしわ」、「林」の記録なし。林は tay, susu-tay. (柳林) という例を採録している (本別)。  
 (285) 「アイヌ語講義原稿」に「かしわ」の記録なし。「こむまべ」は、本別 (2006)、帯広 (2005) ともに記録がない。

(12) <sup>(286)</sup>	いんこゑたままいん <sup>(294)</sup> = 早く行て来連、
いらまん <sup>(287)</sup> = 覚ゆる。	いころべ <sup>(295)</sup> = 汝の所持品。
いらまや <sup>(288)</sup> = 覚たか	いころべちい <sup>(296)</sup> = 汝の物を失ふな。
いんこゑ <sup>(289)</sup> = 早く。	いとらんねらんべ <sup>(297)</sup> = 不好、いや。
いんこゑいっく <sup>(290)</sup> = 早く来連。	いゑるゑい <sup>(298)</sup> = 食ふたい。
いんがら <sup>(291)</sup> = 見ろ 命令	いゑこちやん <sup>(299)</sup> = 食ふたくふい。
= 見る	いべるゑい <sup>(300)</sup> = 空腹
いすりか <sup>(292)</sup> = 下。いすりかゝま = 下よ置け。	いめる <sup>(301)</sup> = 電光 或いふみるい <sup>(302)</sup>
いりかゑ <sup>(293)</sup> = 上。いりかゑゝま = 上よ置く。	いそつ <sup>(303)</sup> = 外 或いそい <sup>(304)</sup>

- (286) (12) には、主格および目的格人称接辞 2 人称単数 e- が接頭した形が含まれる。(12) のページが記録されている 1 枚前に「いんそんわまん」と「いちしつぬからん」も 2 例が記録されている。手稿のため、重ねた際に順番が変わったか、あるいは、付け足した情報が不明であるが、それらも (12) の記録に合わせて整理する。
- (287) 「アイヌ語講義原稿」に「覚た ぐ、エラムアン」とある。別のページに「了解シタ エラムアン」とある。「エラムアン」の下に「ヨワー」と書いてある。「ワー」の右に「ヨ」と書いてある。「エラムアン」「ワー」で「了解シタ」「ヨ」をあらわしているのかもしれない。また、「ワー」の右に「?ナー」と書いてある。これは「エラムアン ナー」となるのか、「エラムアン」の右の行の「能ク聞ケ ビリカンイヌ」に続くのか不明である。「単語集」に、「いらまん」、「講義原稿」に「ぐ、エラムアン」の表記から、eraman, eram'an, eramuan の可能性がある。帯広では、調査項目「7. わかる〔理解する〕」に'erámu'an と報告されている(服部編 1964: 161)。また、erám'an も記録されている。なお、広野氏からの聞き取りをした語彙集で、eram'an と eramu'an のように m と a の間に u があるか疑問があると田村のメモにある(帯広 2005: 248)。「アイヌ語方言辞典」で、'eram (')an, (八雲、名寄) と表記されており、本別でも時は eraman, または eram'an と聞こえる。意味は... がわかる、知っている、覚える(本別)。
- (288) 「覚たか」と書いてある。本別では、覚えましたか/わかりましたかと聞くときは、e-eraman ya? である。aynu itak ponno pokay e-eraman ya? (あなたは少しでもアイヌ語を覚えましたか)(本別)。
- (289) 「アイヌ語講義原稿」に「早」は 2 語記録されている。ひとつは「早く エンコタ」と書いてある。ふたつ目は「ヒカン」である。本別で、enkota. (副詞) 早く。nokanno ku-hunpa wa ku-suye cik enkota ci. 和訳すると、小さくきざんで煮ると、早く火が通る。(かたい肉についての説明で)(本別)。帯広「pikán 速く走る(ジーゼルカーを見て)(帯広 2005: 97)。また、調査項目「18. 速い」で、'epikan ru. ずいぶん速いねえ。足の速いこと。車、馬、飛行機でも(帯広 2005: 173) とある。
- (290) 「アイヌ語講義原稿」に「早く来レ エンコタエック」とある。動詞に主格の人称接辞のつかない形が命令形である(知里 1974: 152)。enkota ek. 早く来なさい(本別)。
- (291) 「アイヌ語講義原稿」に「見る、見ろ」の記録はない。inkar は「...を見る」という意味であり、場面によっては「...見なさい、ご覧なさい」と命令形にもなることを記録してあると思われる。teen inkar. (こっちを見なさい)(本別)。
- (292) 「アイヌ語講義原稿」に「下二置ケ、エスリカ、ウンアマ」とある。初めに「エスリカ、アマ」と書き、「アマ」を線で消し、「ウンアマ」と続けている。全体で「エスリカ、ウンアマ」と読める。また、「ウン」をまとめて、「へ」と書いてある。帯広での調査項目「23. 下りる」で itékke toánta emésuy, esirkaun rap yan / ran. という例文が記録されている。広野氏は、esirkaun 以降を「下さりなさい」(下き、は北海道方言で下に、という意味)と和訳している。また、esirkaun を「高いところから下さりること。本当は地の上さること」(帯広 2005: 240)と説明している。中川は esirkaun を【副詞】地面の上に。地上に;< e-「～の頭」sirka「地面」un「～についている」と記述している(中川 1995: 84)。ama. ... を置く(単数)(本別)。
- (293) 「アイヌ語講義原稿」に「上二置ケ、エリカシ、アマ」とある。erikasi. [e- rik-asi 頭を・上のほう・立てる] 上へ、上のほうへ。帯広、調査項目「22. 上げる」上へ」に erikasi amá (帯広 2005: 239) と報告されている。本別でも、erikasi are. という例文が記録されている。上に置きなさい。are は... を置く(複数)(本別)。
- (294) 「アイヌ語講義原稿」に「早く行てコイ エンコタオママエンエック」とある。「単語集」の「いんこゑたままいん」に「早く行て来連」とあり、文末の「いん」がわからない。本別では、早く行て来なさい enkota oman wa ek. 早く行きなさい enkota oman となるとところである。なお、「講義原稿」でも「早く行てコイ」を「エンコタオママエンエック」と記録されている。
- (295) 「アイヌ語単語集」(い)に「いころべ=汝の所持品」とある。e- 主格人称接辞 2 人称単数、e-kor pe. あなたの持ち物、所持品(本別)。
- (296) 「アイヌ語講義原稿」に「失フ <sup>汝物イラス</sup> (エコ ロベ) オチエ」と記されている。「いころべちい」は「汝の物を失ふな。」とある。一方、「講義原稿」、<sup>汝物イラス</sup> 「失フ」のアイヌ語は「(エコ ロベ) オチエ」である。(エコロベ)の右側にある説明「汝物 イラス」がなにを指すのか不明である。オチエは、帯広での調査項目「11. なくす(失う)」に 'ociwe [他], turáynu [他] (見当たらない) と報告されている(服部編 1964: 151)。広野氏の記述によると、e-kor pe ociwe は、あなたの物を失う、なくす、となる。
- (297) 「アイヌ語講義原稿」に「イヤダ エトランネ」とある。「エトランネ」の語頭の「エ」は初めに「イ」と書いて「エ」と書き直してある。「ラ」と「ネ」の間に小さく「ン」と書いてある。「エトランネ」の下に「アンベ」と書き、それを線で消し、さらに「エトランネ」と書き直してある。「単語集」で「いとらんねらんべ」、「講義原稿」では「エトランネ」と記述が異なっている。帯広で調査項目「14. 嫌う」に、ta'an mónrayke anak ku'étoranne. という例文が報告されている(帯広 2005: 350)。
- (298) 「アイヌ語講義原稿」に「好 エ・エルシュイ」とある。e- 主格人称接辞 2 人称単数、erusuy. ... が好き。ringo akkari mikan kurerusuy. 私は、りんごよりみかんが好き(本別)。
- (299) 「アイヌ語講義原稿」に「不好 エ、エコチヤン」とある。e- 主格人称接辞 2 人称単数、e... を食べる、kocan ... をいやがる(本別)。e-e kocan. あなたは... を食べたくない。
- (300) 「アイヌ語講義原稿」に「空腹 我ク、エベルシュイ」とある。その下に「空腹? シエン、エイベルシュイ」とある。ku-iperusuy. 私はおなかがすいている、空腹である。sien e-iperusuy? あなたはおなかがすいていないですか(本別)。「アイヌ語講義原稿」に「恥シクナイカ」に「シイイン、エヤイカツエン」とあり、その下に「エヤイカツエン(ハズカシ)」「シイイン、(ナキカ)」とある。sien と somo は、帯広、本別で記録されているもの、違いについてはよくわかっていない。今後の課題としたい。
- (301) 「アイヌ語講義原稿」に「電、イメル」とある。「アイヌ語単語集」(い)にも「いめる 電光」とある。帯広での調査の項目「47. いなびかり」'iméru. 'iméru 'át. いなびかりが光る(服部編 1964: 228) と報告されている。本別も同じく 'iméru 'át. いなびかりが光る、と記録がある。
- (302) いふみるい。帯広、本別ともに記録なし。
- (303) 「アイヌ語講義原稿」に「外 エソン」とある。見出し語「えそつ」は不明である。eson. (副詞) 外へ(本別)。eson paye wa sinot yan. (複数) 子どもたちに向かって) 外に行つて遊びなさい(本別)。
- (304) 「アイヌ語講義原稿」に記録はない。soy (位置名詞)、そと(外)。soy ta, soy peka 外で、外に。本別で sita anak soy peka a-resu (犬というものは外で飼う) するためにある」という例文を記録している。

いほうまれ <sup>(305)</sup> = 拾ふ	いほやま <sup>(316)</sup> = 無え
いばふきり <sup>(306)</sup> = 擲ける	いほむん <sup>(317)</sup> = 鼠、忍びて食ふの意、
いちこれらん <sup>(307)</sup> = 品物を與ふる	いべえろ <sup>(318)</sup> = 縞鼠、縦てえほの意、
いんねれい <sup>(308)</sup> = 食物を與ふる	いそくさき <sup>(319)</sup> = 豚木鳥、斑文いろの方、
いんこれ <sup>(309)</sup> = 頼む、	いぢいざこらん <sup>(320)</sup> = 教ゆる、
いらまえゆ <sup>(310)</sup> = 願望	いもく <sup>(321)</sup> = みゝず
いらむつはへ <sup>(311)</sup> = 驚く。	いここんへ <sup>(322)</sup> = 毛蟲 物よからほるの意
いてえゆえゆ <sup>(312)</sup> = 天を望む	いとたんね <sup>(323)</sup> = 蚊、鼻長の意
いかり <sup>(313)</sup> = もろふ、	いらいらい <sup>(324)</sup> = ぬかか、食よ来て死するの意
いそーぼ <sup>(314)</sup> = 兔	いとう <sup>(325)</sup> = 鼻、江戸の海中に突出して鼻の如きと
いほやまん <sup>(315)</sup> = かまうそ	云ふ意、伊豆、全意

- (305) 「アイヌ語講義原稿」に「拾フ エ、ウマレ、」とある。eumare. ... を拾う (本別)。
- (306) 「アイヌ語講義原稿」に「擲レ」は「エ、ヤブケレ」また「エ、ヤブキリ」と読める。初めに「エ、ヤツケレ」と書き、「ッ」を線で消し「ヤブ」にしている。「ケレ」の右に「キリ」と書き入れ、全体として「エ、ヤブケレ」「エ、ヤブキリ」と読める。見出し語「擲レ」は「擲ル」と書き、「ル」を消し「擲レ」としている。eyapkir. ... を投げる。 suma eyapkir kor terke terke kan pet ka peka omanan ahinne hacir, kan sinot usa an. 和訳すると、石を投げるとボンボン川の上をとんでいって落ちる、という遊びもあった (本別)。
- (307) 「アイヌ語講義原稿」には記録なし。「いぢこれらん」の「これ」は、... に ... を与える、あげる、という意味の複他動詞 kore であると思われる。他動詞は、主語の人称と目的格の人称の両方に呼応して人称変化する。これを「主格目的格人称変化」とよび、その人称形を造る接辞を「主格目的格人称接辞」とよぶ (田村 1997: 19)。この人称変化は方言差が大きいことで知られている (中川 2024: 170)。本別で taanpe eci-kore-an kus pirkan sikkama ani. という文を採録している。話者による和訳は、「これおまえにやるから、大事にあづかえよ」である。eci-kore-an. 私 (たち) があなた (たち) に (... を) あげる。
- (308) 「アイヌ語講義原稿」には記録なし。en- 目的格人称接辞 1 人称単数、私に。ere ... に ... を食べさせる。en-ere. 私に (食べものを) 食べさせる (本別)。えんねれ ennere のような発音であったか。他にも、えんねれいの「れい」のような位置にある re を rei と書いてある例がある。
- (309) 「アイヌ語講義原稿」に「頼む」の記録なし。kore (複他動詞) は、... に ... を与える、あげる、という意味である。kore に en- 目的格人称接辞 1 人称単数が接頭し en-kore. amam ponno en-kore. (私に) お米を少しくください。また、toonpe uk wa en-kore. (私に) あれを取ってください (本別) のように、私に ... をください、... をしてくださいとなる。
- (310) 「アイヌ語講義原稿」に「願望」の記録なし。帯広で、調査項目「15. 愛する」に haná ku'éramasu. とある。広野氏による和訳は「花欲しい」である (帯広: 251)。田村による帯広での調査では eramasu が用いられ、eramasuy の採録はない。報告者による本別での調査では inkian pe e-eramasuy? あんたはどれが欲しいですかと eramasuy が使われ、eramasu は確認されていない。山縣資料に記録されている語形と帯広伏古で採録された形が同じである。
- (311) 「アイヌ語講義原稿」に「驚く」の記録なし。帯広で、調査項目「11. 驚く」に、ekúskonna hawéhe ruy tek ku'éramutüy. hawéhe ruy tek に「大きな声がしたので」と広野氏による和訳がある。ku'éramutüy は、私は驚いた、となる。
- (312) 「アイヌ語講義原稿」に「上向きする」の記録なし。パチラー (1926: 137) に、Etesu エテス, Eteshu エテシュ. 「上向スル。 v.i. To turn up.」という記述がある。
- (313) 「アイヌ語講義原稿」に「もらう」の記録なし。ekari. ... をもら (貰) う。ku-e easkay pakno ku-ekari. 私は食べられるだけもらう (本別)。帯広の例で、調査項目「2. もらう」e-mici orowa ekari. 広野氏による和訳は「父さんにもらいなさい」である (帯広 2005: 192)。
- (314) 「アイヌ語講義原稿」「獣類」に「兎、エソーポ、」とある。また「四足動物」にも「兎エソーポ」とある。isópo. ウサギ (本別)。
- (315) 「アイヌ語講義原稿」「獣類」に「水獺、エシヤマン、」とある。また、「四足動物」にも「水獺 エシヤマン、」とある。エサマン esaman. かろうそ (本別)。知里の記述「s と sh も亦同じ音韻で後者は前者の少しく口蓋化した程度のものに過ぎない」(知里 1993[1974]: 8) により、エ「サ」マンもエ「シャ」マンもどちらで発音してもよい。
- (316) 「アイヌ語講義原稿」に「無し」の記録なし。isam. ない、なくなる。nep kay isam. なにもない (本別)。
- (317) 「アイヌ語講義原稿」「獣類」に「鼠 エ、ルムン、(忍ヒテ食フ)」とある。また、「四足動物」に「鼠 エルムン、エ、食 ル・ムン 忍ブ」とある。erumun. ねずみ (本別)。
- (318) 「アイヌ語講義原稿」「獣類」に「縞鼠、エベ・シロ、(縦縞)」とある。また「四足動物」に「シマ鼠、エベ・シロ エベ 縦 シロ、シマ」とある。吉田巖 (2005: 30) に「えべしるお epeshiru-o (毛) (伏) 木鼠、「えべしるうお epeshiruwo (毛) 木鼠」とあり、十勝の毛根と伏古では木鼠をさすという報告がある。松浦武二郎の『後方羊蹄日誌』に、「しまねつみ松前方言 夷言ルウチロヌフ 東部 カセクルクル 西部 エヘシルヲ トカチ 等場所よ依て名異る也」とある。本別ではしまねつみみ kasekurkur とよんだ。
- (319) 「アイヌ語講義原稿」「鳥類」に「豚木鳥、エソクソキ、(斑紋アルモノ)」とある。また、「鳥」に「豚木鳥 エソクソキ 斑文アル方」とある。「単語集」では「いそくさき」、「講義原稿」では、「エソクソキ」である。「豚」木鳥と表記してあるが、「豚」木鳥であろう。esoksoki. アカゲラ (コアカゲラ) (内田・沢井 2002: 1026-1027)。
- (320) 「アイヌ語講義原稿」に「教ユル エチエザ、ココアン」とある。「いぢいぢ」のふたつめの「いぢ」は、ちの右下に小さく書いてある。ecakoko ... に ... を教える (本別)。aynu itak eci-ecakoko-an nankor na. 沢井氏は「アイヌ語教えてやるからな」と和訳した。この文脈では、私はあんなに ... を教える、である。
- (321) 「アイヌ語講義原稿」「蟲類」に「ミゝズ エモク。」とある。見出し語を書く位置が空白となっており、「ミゝズ」はルビのように右はじに書いてある。imok のうち、木や根をほると白い虫が出てくる。それを ni-imok という (本別)。toy-imok は針につけて餌にする (みみず) (本別)。
- (322) 「アイヌ語講義原稿」「蟲類」に「毛蟲 エ・ココンパ。(凡ツノ物ニカラマル)」とある。'ikokonpa. ケムシ (帯広 2005: 175)。
- (323) 「アイヌ語講義原稿」「蟲類」に「蚊、エト・タンネ。(鼻長)」とある。「い」の項目にも「いとたんね 蚊 鼻長の義」とある。etutanne. 蚊 (本別)。etutanne を「い」と「え」の見出し語で立てている。
- (324) 「アイヌ語講義原稿」「蟲類」に「ヌカカ エライライ。(食ニ来テ死スル)」とある。ヌカカ (ヌカカ科) エライライ。体調 1〜2 ミリ程度の極く小さなハエの類 (井上 2006: 98) erayray. ヌカカ。目に見えないくらい小さな虫で、血を吸う (本別)。
- (325) 「アイヌ語講義原稿」に「鼻 エトウー。(江戸城ノ地海中ニ突出シ鼻ノ如シ)」とある。また、アイヌ語単語集「い」の項に「いとウ 鼻、又魚名 江戸、伊豆」とある。etu を「え」と「い」の見出し語で立てている。etu. 鼻 (本別 2006: 22)。

いほき <sup>(326)</sup> = 齒	いぼね <sup>(335)</sup> = 出産
いほきひ <sup>(327)</sup> = 其髻にて狭き意	いこっくか <sup>(336)</sup> = 悔る
いとけむく <sup>(328)</sup> = 鼻汁	いねいきい <sup>(337)</sup> = 誹る
いか <sup>(329)</sup> = 血族の老人	いこつか <sup>(338)</sup> = 愚
いゑ <sup>(330)</sup> = 日ふ、話す、	いたつきいはいか <sup>(339)</sup> = 唾、話ふ出来きぬの意
いらむぼけん <sup>(331)</sup> = 悲 <sup>え</sup>	いりくる <sup>(340)</sup> = 兄弟、いりくるゑりねくらむくる = 友人、兄弟の様 <sup>え</sup> 思ふ人、
いねうさら <sup>(332)</sup> = 樂 <sup>え</sup>	い <sup>(341)</sup> = 食する
いねふゑ <sup>(333)</sup> = 待 <sup>て</sup>	いはい <sup>(342)</sup> = 食物
いちとららん <sup>(334)</sup> = 同伴する	

(326) 「アイヌ語講義原稿」に「齒、エマキ。」とある。imaki. ... の齒 (本別 2006 : 23)。

(327) 「アイヌ語講義原稿」に「髻、エレキヒ。ソノヒゲ」とある。また、同じページの別の行に、「レキ。」とある。ただし、「レキ」の見出し語となる部分は空白である。なお、「レキ」の部分は書き直しされており、「エレキ」と書き、エを消してある。消したエの右に文字が書いてあり、「□ □タ」と読める。rek は概念形「ひげ」をいい、reki, rekihi は所属形で「... のひげ」、「彼のひげ」を表す。「エレキヒ」は e-rekihi 「あなたのひげ」であろうか。「そのひげ」「狭き意」とあるのは、概念形と所属形の違いを示しているのだろう。

(328) 「アイヌ語講義原稿」に「鼻汁 エトウケムクシ。」とある。「鼻汁」と書き、「鼻」と「汁」のあいだ、あるいは、「汁」の右上に「血」を書き足している。なお、「血」は、「アイヌ語講義原稿」に「血 ケム」とある。調査項目「35. 鼻血」は、帯広で 'etúkem (服部編 1964 : 5) .etúkemkus. kuétukemkus. と報告されている (帯広 2005 : 3)。なお、鼻汁は、帯広で etúpe と etúwokka 両方いう (帯広 2005 : 3) と報告されている。本別で ku-omkekar kotom an kus ku-etu or wa wakka ran. 和訳は、私は風邪ひいたみたいで、鼻水が出る、となる。「アイヌ語講義原稿」の見出し語「エトウケムクシ」は、鼻汁ではなく、(彼は) 鼻血が出る、となる。

(329) 「アイヌ語講義原稿」に「老人 エカシ 親類ノ 老人 チヤチヤ」とある。本別で、ékasi. おじいさん、祖父、年配の男性 (澤井 2001 : 25-26) をいう。帯広で、調査項目「19. 祖父」じいさま e:kasi (帯広 2005 : 9)、「12. じいさん」ékasi. 孫のある人。若くても。孫がなくても 80 才にもなれば」と説明がある (帯広 2005 : 135)。

(330) 「アイヌ語講義原稿」に「云フ エエ」とある。ye. ... を言う。pirkan a-ye wa a-nure. 話者による和訳は「よく言い聞かせる」である (本別)。エエで ye を表しているか、あるいは、e-ye の可能性もある。

(331) 「アイヌ語講義原稿」に「悲シキ エラムボケン」とある。本別で、eranpokiwen. ... をかわいそうに思う (本別 : 141)。『アイヌ語方言辞典』「41. 憐れむ」をひくと、'eranpokiwen (帯広) と報告されている。また、幌別方言で 'eránpoken (服部編 1964 : 166) が報告されている。

(332) 「アイヌ語講義原稿」に「樂シキ エネウサラ」とある。帯広の調査項目「20. おもしろい [興味のある]」に néwsar [自] 《人を喜ばせる》と報告されている (服部編 1964 : 163)。帯広の広野氏によると、newsar は「やさしく おもしろい話すること」であり、éneñewsar (en-enewsar) を「おれの相手して おもしろい話していった」と説明している (帯広 2005 : 123)。また、uwénewsar は、「お互いにうれしい話する」と記録されている (帯広 : 123)。本別では、enewsar は、... と一緒にお話して楽しむ、喜ぶことをいう。「自分の kamuy enewsar」というアイヌ語を話者は「自分の神様を喜ばせる」と説明した。'ueneewsar は ... とお話をして楽しむ、喜ぶことである。また、yaynewsarka は、たった 1 人でいて、さびしくて歌をうたったり、ku-yaynewsarka は、話者によると、「自分で自分を慰める」であるという。

(333) 「アイヌ語講義原稿」に「待テ エネフエ」とある。報告者による本別での調査で、この語の記録はない。また、田村が帯広で行った記録でも記録がない。なお、「アイヌ語講義原稿」待テに「イルカ・イネチウカ」とある。eciwka を参照のこと。

(334) 「アイヌ語講義原稿」に「同伴スル エチトウラアン」とある。tura ... と一緒に行く、来る (本別)。eci-tura-an. 私 (達) はあなた (達) と一緒に行く。人称接辞については前書きを参照のこと。

(335) 「アイヌ語講義原稿」に「出産 エホネ」とある。帯広で「巢」のアイヌ語に tamágo pérke wa cikáppo epóne aw an. という文が記録されており、話者が「ひなになった」と和訳している (帯広 2005 : 386)。本別では記録がない。

(336) 「アイヌ語講義原稿」に「侮ル エコックカレ」とある。en-ikokkare. 私をばかにする (本別 2006 : 141)。

(337) 「アイヌ語講義原稿」に「誹ル エネ、キイ」とある。「エネイ、キイ」に「ソウスル 物」と書いてあり、切替 (1996 : 185) に「ene iki hi ~ がそうすること」とある。つまり、「誹る」は、「エネイキイ (そうすること)」と読める。

(338) 「アイヌ語講義原稿」に「愚 エコッカ」とある。ikokka. ばか (馬鹿) である、頭が悪い (本別 2006 : 226)。

(339) 「アイヌ語講義原稿」に「啞 エタキエ、アイカブ アイカブ 出来ナイ」とある。itak eaykap. (本別)。また、numan ku-monrayke kaska tek tanto ku-sinki wa ku-itak eaykap. 昨日は仕事がつくて、今日は疲れてしゃべることができない、と、一時的に話ができないことという。おしは、somóytak である (本別 2006 : 61)。

(340) 「アイヌ語講義原稿」に「友人 エリクル、シリネ、クラムクル」とある。帯広で、調査項目「31. きょうだい [兄弟姉妹]」に、'irutar, sinépe (服部編 1964 : 42) と報告されている。広野氏の説明では、「sinépe 兄弟。普通の言葉。一人だけ」をいい、irkur は「いい言葉」(帯広 2005 : 148) と報告されている。irutar. きょうだい (本別 2006 : 52)。沙流方言の田村による記述に「...sir ne ... シンネ (= sirine シリネ) まるで... のように (外見について言う) (田村 1996 : 645) とある。irkur sir ne ku-ramu kur は、(外見が) まるできょうだいのように私が思う人、であろう。「講義原稿」に「兄弟・様・思・人」と意味が記録されている。

(341) 「アイヌ語講義原稿」に「食 エ」とある。e. ... を食べる (本別 2006 : 88)。

(342) 「アイヌ語講義原稿」に「飯 エイペ」とある。「i i」が山縣資料では「ei エイ」に、「re レ」が「rei レイ」に、「e エ」が「ei エイ」と記録されている可能性がある。ipe は食べもの、食事 (名詞)、食事する (自動詞) (本別)。いはい e-ipe は、あなたが食事するという意味になる。

いかくわいき <sup>(343)</sup> = 世話する	いそんむまん <sup>(356)</sup> = 外へ出よ
いふう <sup>(344)</sup> = 御幣の一本、伊那郡いふうを樹志処	いちしつぬからん <sup>(357)</sup> = 助ける
いんねれい <sup>(345)</sup> = 食物を與ふ	
いかり <sup>(346)</sup> = もらふ	(て)
いんま <sup>(347)</sup> = 私	てけへ <sup>(358)</sup> = 手
いうんけらいて <sup>(348)</sup> = 頂戴した	てせ <sup>(359)</sup> = 編む、『てせう』天塩、「う」多く出す処、
いねうんけらいて <sup>(349)</sup> = 呉れよ	てゑ <sup>(360)</sup> = 太古、
いね <sup>(350)</sup> = 我	てままよ <sup>(361)</sup> = 桑の木、
いふ <sup>(351)</sup> = オ前達	てっことろ <sup>(362)</sup> = 掌、
いぼつぼき <sup>(352)</sup> = 頭ヲ下て禮する、	てりんね <sup>(363)</sup> = 泥
いやに <sup>(353)</sup> = 貴様	てま <sup>(364)</sup> = 魚を捕ふる柵、
いれねいこんらん <sup>(354)</sup> = 汝の名何何と云ふか	てまか <sup>(365)</sup> = すだまの編糸、(か)の糸
いのんのいたつく <sup>(355)</sup> = 祈祷	てべか <sup>(366)</sup> = 此処より、

- (343) 「アイヌ語講義原稿」に「世話スル エカ、ク オイキ 助ケル」とある。「第三類の動詞」(知里1974)の形式と考えられる。知里によると、第三類の動詞に於いては主格の人称接辞は全部接中し、目的格の人称接辞のみ接頭する(知里1974:84)。第三類の動詞 ka oiki に主格人称接辞(1人称単数) ku- は接中し、目的格人称接辞(2人称単数) e- を接頭させる。本別で採録した例、etak taane peka hokke, e-ka ku-oyki na と(帯広の) huci (が) 言った(話者が体調不良のときに帯広に行き、tusu huci になんらかの手当をしてもらったという)。佐藤の記述に、千歳方言の「第三類の動詞」の中に、「A. 位置名詞を含むもの」として、「ka oyki, ka-si oyki ~を世話する」とある(佐藤2001:62)。本別の例文は、さあ、ここに横になりなさい、私があなのお世話をしますよ、手当をしますよ(本別)となる。
- (344) 「アイヌ語講義原稿」に「イノウ」の記録なし。「幣束 ヌサ」とある。「いふう」は「御幣の一本」であり、(ぬ)の「ぬま」には「御幣 復[ママ]」と記録されている。「ぬま」を参照のこと。御幣は本数によって名称が変わるのだろうか。吉田巖が帯広伏古居住の古川辰五郎(コサンケアン、明治元年生まれ)から聞き取ったイノウについての記録がある(吉田1952:59。引用ページは吉田1984)。「削懸(イナウ-本文ではルビ)イノウを立てればヌサという。ヌサは立てない間、イノウという。」という内容である。続けて「ポロイノウ、又、イノウネトパは正式のヌサ」と書いてある。つまり、1本1本の御幣はイノウと呼ぶが、複数の御幣はヌサと呼ぶということになるのだろうか。本別では、inaw イノウは、木の御幣をさし、数によって名称が変化するとは聞いていない。なお、ヌサは外にある祭壇で、イノウが複数立てられ、また、儀式やお祈りの際には、新たにそこに複数イノウを立てるといふ。
- (345) 「アイヌ語講義原稿」に「食物を與ふ」の記録なし。en- 目的格人称接辞 1人称単数、私に/私を。ere …に…を食べさせる。en-ere.(彼が)私に(食べ物)を食べさせる(本別)。ere の re は rei とする例が他にも確認される。
- (346) (え)に「もろふ、」とある。注(313)を参照のこと。
- (347) 「アイヌ語講義原稿」に記録なし。「エンシ」とある。不明である。
- (348) 「アイヌ語講義原稿」に「頂戴した」の記録なし。帯広での調査項目「2. もらう」に例文が記録されており、ku'ëunkeray a p. 話者による和訳は「もらったものだよ」である(帯広2005:191)。本別では eunkeray …をもらう(他動詞)、例文 ikor e-eunkeray cik en-sikkamare ani. おまえさんがおかねをもらったら私に預けなさいね、という例文を採録している(本別)。eunkeray-te の例は、『アイヌ語方言辞典』調査項目「3. 贈る」に、幌別の'e'ünkerayte という語の記録がある(服部編1964:80)。また、『アイヌ語方言辞典』調査項目「これをあげる」に、名寄で tânpe ci'e'ünkerayte 'ân とある(服部編1964:309)。eunkeray 「もらう」に使役をあらわす -te … させる、が接尾し、eunkerayte は、もらう、もらった、「頂戴した」となる。
- (349) 「アイヌ語講義原稿」に「くれよ」の記録はなし。en- 目的格人称接辞 1人称単数、私を/に。en-eunkerayte. 私に・くれた。
- (350) 「アイヌ語講義原稿」に「我」をさす複数の記録があるが、「えね」は確認されない。1行前の「いねうんけらいて くれよ」において、目的格人称接辞 en- と eunkerayte が ene- えねと続けて発音され、ene を「我」と判断した可能性がある。
- (351) 「オ前達」とある。不明である。
- (352) 「アイヌ語講義原稿」に記録なし。本別でも帯広でも確認されていない。沙流方言に、hepokiki (自) [he-poki-ki 頭を・下げる… している(重複)]頭を下げている(田村1996:184)と記述されており、このような形であろうか。
- (353) eani. 人称代名詞 2人称単数、君、あんた、おまえさん(本別2006:231)。
- (354) 「アイヌ語講義原稿」に名前をたずねる記録なし。e- 人称接辞 2人称単数。re. 名。nekon an. どのような、どんな。e-re nekon an? 名前をたずねる場合、帯広の例(知らない人にたずねる) nékon aréhe an? (帯広2005:116)と報告されている。本別では e-rehe nekon rean? nekon e-rehe rean? である。
- (355) 「アイヌ語講義原稿」に「祈る」の記録なし。inónnoytak. 神様に祈りを捧げる(本別2006:145)。
- (356) 「アイヌ語講義原稿」に「外 エソン」とある。esón omán. … がちょっと外に行く(本別2006:67)、また、外に出る、外に出なさい。sita mek akus eson oman wa inkar. という例文を採録している。犬が吠えているから外に出てみなさい(本別)。帯広の調査項目「37. な」で、itékke esón omán. また、somó esón kuóman. という例文が記録されている(帯広2005:96)。
- (357) 「アイヌ語講義原稿」に「助ける」の記録なし。日本語の見出し語には、誰が誰をという情報が記されていないが、アイヌ語で eci-siknuka-an. とあることから、私(たち)があな(たち)の命を救う、であろう。以下は本別の例である。siknu-ka. 生きる・させる、…を生かす、…を生かしておく、…の命を救う。主格と目的格の組み合わせについては、前書きを参照のこと。十勝方言で、1人称主格と2人称目的格の組み合わせは eci-an である。eci-siknuka-an. 私(たち)があな(たち)を生かす、私(たち)があな(たち)の命を救う。
- (358) 「アイヌ語講義原稿」に「手、テケへ。」とある。「へ」に濁点のようにみえる点がひとつについている。tekehe. …の手(全体)(本別2006:27)。
- (359) 「アイヌ語講義原稿」に「編む」のアイヌ語の記録なし。tesé. …を編む(本別2006:101)。kina a-ritenka wa a-tese. キナを柔らかくして編む。
- (360) 「アイヌ語講義原稿」に「太古」のアイヌ語の記録なし。本別では昔 te'eta. (本別2006:195)と発音される。
- (361) 「アイヌ語講義原稿」に「桑の木」のアイヌ語の記録なし。tesmani. クワの木。曲げて折れないので、tesma (かんじき)を作るのに使用した(本別町教育委員会1989:86)。
- (362) 「アイヌ語講義原稿」に「掌、テッコトロ」とある。tekkotor. てのひら。tekkotoro. … のてのひら(本別2006:28)。
- (363) 「アイヌ語講義原稿」に「泥 テリンネ、」とある。泥は、本別で terinnetoy または toy (本別:172)である。帯広で toy と報告されている(帯広2005:274)。
- (364) 「アイヌ語講義原稿」に「魚を捕ふる柵」の記録なし。tes an-asi wa cep a-uk. (夏になると柳で編んだ)くいを(川に)たてて魚をとる(本別)。
- (365) 「アイヌ語講義原稿」に「すだまの編糸」の記録はない。tes くい、さく。ka 糸(本別)。
- (366) 「アイヌ語講義原稿」に記録はない。te peka ここから。te peka nen kay inkar cik (ここからだれかが覗いたら)いやだからカーテンきちっとしめる、という例文を記録している(本別)。

てきむだ<sup>(367)</sup> = 此処の山、吾の山ノ意  
 てびまた<sup>(368)</sup> = 此処の濱、全上、  
 てゑころらん<sup>(369)</sup> = 魚を捕ふる柵の番兵、= 二人  
 已上、

(あ)  
 あよ<sup>(370)</sup> = 持つ。  
 あべ<sup>(371)</sup> = 火  
 あべふち<sup>(372)</sup> = 火の神 女性  
 あべか<sup>(373)</sup> = ふけゑものを受ける  
 あべくる<sup>(374)</sup> = らたれ、あべくるらん<sup>(375)</sup> = らた  
 りまゑよ、  
 あのかい<sup>(376)</sup> = 貴殿  
 あんべねわ<sup>(377)</sup> = 眞実、然り  
 あへろっぺ<sup>(378)</sup> = すだせ、戸のかまりよする物、  
 あぶつき<sup>(379)</sup> = すだせ

あやぼ<sup>(380)</sup> = 恐ゑ  
 あきい<sup>(381)</sup> = 弟  
 あんごいき<sup>(382)</sup> = 二人よて共謀すること  
 あーねいねきふ、いたつぶい□□に、ほうらん<sup>(383)</sup> = 眞  
 実ノことを語るののだがな、  
 あまり<sup>(384)</sup> = 新  
 らぶゑた<sup>(385)</sup> = 戸  
 らふゑたゑ<sup>(386)</sup> = 戸を閉よ、  
 らぶゑたまか<sup>(387)</sup>、戸を明けよ、  
 らぶくすゑん<sup>(388)</sup> = 汝の関する処よ非ず、これで好  
 ゑ或らくせん = フーム  
 らぶりひ<sup>(389)</sup> = 我等持前、  
 らりきき<sup>(390)</sup> = 奮発せよ  
 らちゆから<sup>(391)</sup> = 穢れる  
 らはろっく<sup>(392)</sup> = 食ゑ様、たゞがり<sup>(393)</sup>  
 らむ<sup>(394)</sup> = 居た

- (367) 「アイヌ語講義原稿」に記録はない。山縣資料において、te he te kim ta, te pis ta にのみあらわれており、他の資料や事例と合わせて詳しい分析が必要である。なお、「吾の山ノ意」は小さな文字で書いてある。
- (368) 「アイヌ語講義原稿」に記録はなし。te pis ta. te は、上記を参照のこと。pis ta 浜に、浜で。「全上」は小さな文字で書いてある。
- (369) 「アイヌ語講義原稿」に記録なし。旭川方言で téskor (自動詞) tes (テシ) kor (を持つ) テシ漁をする (川村・太田 2005 : 217)。本別で teskor の記録なし。
- (370) 「アイヌ語講義原稿」に「持テ、アニ」とある。ani. …を持つ (本別)。
- (371) 「アイヌ語講義原稿」に「火」のアイヌ語なし。apé. 火 (本別 2006 : 98)。
- (372) 「アイヌ語講義原稿」に「火の神」のアイヌ語なし。本別では火の神様を apeucihuci とよぶ。
- (373) 「アイヌ語講義原稿」に「うける」の記録はない。帯広の調査項目「うけとる」に、ta'ánpe kuéyapkir kus péka. 話者による和訳は「投げるから受けなさいよ」(帯広 : 192)。a-peka であろうか。
- (374) 「アイヌ語講義原稿」に「火にあたる」のアイヌ語なし。apekur. (彼は) 火にあたる、火にあたりなさい (本別)。
- (375) apekur に、自動詞主格人称接辞 1 人称複数 -an を接尾させて、apekur-an. 火にあたる、火にあたろう。
- (376) 「アイヌ語講義原稿」に「汝 アノカイ」とある。anokay. 人称代名詞。あなた。昔は妻が夫に対して使った (本別 2006 : 231)。帯広で「あなた」に対するアイヌ語として toonkur, taankur, anokay が記録され、話者は「主だった人に使うことば。夫とかよそからいらしたお客さんとか、女同士でも」と説明している。また、anokay は「昔、自分の夫に向かっていった言葉」だと広野氏による説明がある (帯広 2005 : 6)。
- (377) 「アイヌ語講義原稿」に「然り アンベネワ」とある。帯広の調査項目「10. ほんとう」のアイヌ語として、例文 súnke ka somó, ánpene ne wa. また、súnke ka somó, sónono ánpene ne wa. が報告されている (帯広 2005 : 182)。本別では sonno anpe ne. という例文を記録している。
- (378) 「アイヌ語講義原稿」に「簾戸 アバロッペ」、その下に「アブツケ (スタレ)」とある。apa-or-ot-pe 「戸口の所にあるもの」(金田一 1973[1961] : 11)、apaorotpe. 家の戸口に下げること、戸のかわり、のれん、カーテンのようなもので、本別では kimun (ヨシ) でつくる (内田祐一氏の教示による)。
- (379) 「アイヌ語講義原稿」に「簾戸 アバロッペ」、その下に「アブツケ、(スタレ)」とある。aputki. 用途によって、すだれ、ござ、敷物などと和訳される。素材はヨシである (本別)。
- (380) 「アイヌ語講義原稿」に「恐ろしい」のアイヌ語なし。ayapo. 間投詞。「おお」「えっ」「あらー」「いやいや」など。ayapo ene wa. 主に、意外なこと、驚いた場面で使われる (本別)。
- (381) 「アイヌ語講義原稿」に「弟 クアキ」とある。「あきい」とある。aki, akihi. 弟。ku-aki. わたしの弟 (本別 2006 : 52)。
- (382) 「アイヌ語講義原稿」に「共謀する」のアイヌ語はない。バチラー (1926 : 35) に、「Ankoiki, アンコイキ、打タル。Same as akoiki, "to be beaten"; also "a battle," "a fight."」とある。英語での説明を読む限り、「共謀する」という意味ではないようである。an-koyki は a-koyki と同じである、と書かれている。十勝では akoyki となるが、ここでは、koyki に an- が接頭している例と考えられる。
- (383) 2 文字分判読できない。あるいは、文字を消してあるのかもしれない。不明である。
- (384) 「アイヌ語講義原稿」に「新 アシリ」とある。asir. 新しい (本別 2006 : 196)。
- (385) 「アイヌ語講義原稿」に「戸ヲ閉ヂヨ」、「戸ヲ開ケヨ」のアイヌ語として「アプシタ」とある。apusta. 戸 (本別 2006 : 95)。
- (386) 「アイヌ語講義原稿」に「戸ヲ閉ヂヨ、アプシタ、シー アシ」とある。「アプシタ、シ」の「シ」から線を引き「アシ」と書いてある。apusta asi. 戸を立てる、戸を立てなさい、戸をしめる、戸をしめなさい (本別)。
- (387) 「アイヌ語講義原稿」に「戸ヲ開ケヨ、アプシタ、マカ」とある。maka. …を開ける、ひらく (本別 2006 : 95)。apusta maka. 戸を開ける、開けなさい (本別)。
- (388) 「アイヌ語講義原稿」に「フーム、シテモヨシ アプクスエン」とある。「シテモヨシ」は小さな文字で書いてある。
- (389) 「アイヌ語講義原稿」に「我等持前」の記録はない。purihi. …のやりかた、規則、意志 (本別 2006 : 59)、aynu puri. アイヌ (民族) のやりかた。a- 包括的人称接辞 1 人称複数、私たちが/の。a-purihi. 「我等持前」という意味になるかどうか不明である。
- (390) 「アイヌ語講義原稿」に「奮発せよ」のアイヌ語なし。arikiki. 努力する、精を出す (本別 2006 : 134)。
- (391) 「アイヌ語講義原稿」に「穢ル アチュカラ 或ハ エチヤケル」とある。「穢ル」の上方、欄外に「不潔」とある。acikara. 話者によると、「汚い」という意味、また、「びっくりにした瞬間に言う」(本別)。acikara, nep tap hura yupke um an a. 話者によると、「赤ちゃんとか、ご飯を食べるような子どものおしめがくさいときに言う」と説明した。和訳すると、うわー、なんだこのにおいくさいな。icakkere は汚いという意味である。(ぞうきんを洗ったあとの汚水についての聞き取りで) icakkere wakka anak eson kor oman wa kuta. 汚れた水は外に持って行って捨てなさい (本別)。
- (392) 「アイヌ語講義原稿」に「食ゑ様、たゞがり」のアイヌ語はない。a- 包括的人称接辞 1 人称複数、e …を食べる、rok …しましょう、…しましょうか。a-e rok 食べましょう、食べよう (本別)。
- (393) このあと 2 行分アイヌ語の記録があるが、線で消してある (あとうされ 裸躰、あぬう 聞く)。
- (394) 「アイヌ語講義原稿」に「居た」の記録はない。「らむ」は an. …がある、いる (単数形) であろう (本別)。

らべはとんべ <sup>(395)</sup> = 火取蟲 火を借る物の意	らっちうんくる <sup>(408)</sup> = 客人
らね・やはとへれ <sup>(396)</sup> = 我らに危険のもの、	らのるすべ <sup>(409)</sup> = 吾等の事
らとい <sup>(397)</sup> = 海	らねぎむねから <sup>(410)</sup> = 吾等の尋るもの= 獵まつき
らとうゑ <sup>(398)</sup> = 木皮にて造る衣	らね・やいさんべ・こいき <sup>(411)</sup> = 吾等の腹を立つこと
らゑ <sup>(399)</sup> = 立てる 立つ	
らまちこれ <sup>(400)</sup> = 娘をくま	らんがふんべ <sup>(412)</sup> = 有るでふいか
らりそんのくやいぬ <sup>(401)</sup> = 決心	らるか <sup>(413)</sup> = いたい
らゑへ <sup>(402)</sup> = 聾	らま <sup>(414)</sup> = 置く
らりきらゑ <sup>(403)</sup> = 我来た	らるわんべ <sup>(415)</sup> = 七
らぬねむつから <sup>(404)</sup> = 交換	らゑるめ <sup>(416)</sup> = まずい 不味
らぬねから <sup>(405)</sup> = くまげづる	らづさ <sup>(417)</sup> = 裸躰
らね <sup>(406)</sup> = 細	らぬの <sup>(418)</sup> = 聞ゆる
らんべいゑふらん <sup>(407)</sup> = 実か	らふむ <sup>(419)</sup> = 内へ入れ

- (395) 「アイヌ語講義原稿」「蟲類」に「火取蟲、アベ・エトンベ。(アベ) 火「エトン」借る(ベ)物」とある。apeetunpe. が(蛾)(本別)。
- (396) 危険をさす語は他にも記録されており、「アイヌ語講義原稿」に「危険 イヤイキプテ、」とある。本別の例で、(ごみ) a-satke wa eikostek poronno an cik an-eyaytupare kus (ごみ) 乾かして、たくさんあったら危険だから、いつ燃えるかわからんから... (後略) という文を採録している。an-eyaytupare kus 話者は「危険だから」と和訳している。iyaykipte. 危ない(本別)。
- (397) 「アイヌ語講義原稿」に「海 アツイ、」とある。atuy. 海(本別 2006: 176)。「あとい」「アツイ」の2種類の表記をしている。
- (398) 「アイヌ語講義原稿」に「衣」のアイヌ語なし。attus. オヒョウの樹皮から取った繊維を織ってつくる着物(本別町教育委員会 1989: 95-96)。
- (399) 「アイヌ語講義原稿」に「止マレ アシ」とある。また、同じページに「樹テル アシ」とある。asi. ...を立てる(他動詞)。atcikiri asi. (彼は)片足を立てる。as. 立つ(自動詞)。as ani. 立ちなさい(本別)。
- (400) 「アイヌ語講義原稿」に「結婚 アマチ・コレ、呉レル、エ、ンチ、マチコレ」とある。「アマチ、コレ」の「コレ」の右横に「クレ」と書いてある。「アマチ、クレ」と読める。「アマチ、コレ」「アマチ、クレ」と、2通りの音を確認したことを示しているか。また、エ・ンチの「ン」の右横に「私」と書いてある。金田一(1973: 34)によると、「婚姻(uhekotpa)は男からいえば嫁取り、(machi-kor)、女からいえば婿取り(hoku-kor)、両方からいえば相婚(ukor)である」。本別では、「だれだれが matkor aw an (妻をめとる)」。沙流方言で matkore (他動詞) ... に妻を与える、とある(田村 1996: 380)。
- (401) 「アイヌ語講義原稿」に「決心 アリ・ソソノ・クヤイヌ、」とある。ari ... と(思う、考える)、sonno 本当に、ku- 主格人称接辞1人称単数、yaynu 思う。ari sonno ku-yaynu. ... と本当に私は思う、考える、のような意味になる(本別)。
- (402) 「アイヌ語講義原稿」に「聾 アシバ」とある。aspa. 耳が不自由である、聞こえない(本別)。「アシバ」のように発音されていた可能性がある。本別では「アスパ」と発音される。
- (403) 「アイヌ語講義原稿」に「我来た」のアイヌ語はなし。arki (自動詞) ... が来る、やって来る(複数形)(本別 2006: 67)。自動詞 arki に -as 主格人称接辞1人称複数、除外形(相手を含まない私たち)が接尾し、arki-as. となる。わたしたちが来る、来た、という意味なる。なお、「我来た」は、ek (単数形)に主格人称接辞1人称単数形が接頭し、ku-ek となる。
- (404) 「アイヌ語講義原稿」に「交換 汝ト我ト バクル アヌエ、オカラ」とある。「アヌエ」の右横に「汝ト我ト」、「オカラ」の右横に「バクル」と書いてある。uehokkar. ... を交換する、ばくる(本別 2006: 70)。uehokkar は、アクセントが第2音節éにあり、不定人称接辞主格 an- が接頭し an-uehokkar となる(切替 1996; 澤井 2005)。帯広で、調査項目「19. 変える、とりかえる」'ehokkar (他) «他のとりかえる»と報告されている(服部編 1964: 152)。「アイヌ語単語集」で、「らぬねむつから」、「講義原稿」で「アヌエ・オカラ」と表記されていることから、\*an-ueokkar あるいは \*an-ueokar のような形であったかもしれない。
- (405) 「アイヌ語講義原稿」に「くまげづる」のアイヌ語はなし。a- 不定人称主格人称接辞、nuykar (髪)をとかす。a-nuykar. (本別 2006: 19)。
- (406) 「アイヌ語講義原稿」に「細 アネ」とある。áne. 細い(本別 2006: 209)。
- (407) 「アイヌ語講義原稿」に「実 アンベ」とある。anpe etap an. (それは)ほんとうだ。まことだ。anpe ほんとうのこと(本別)。切替は etap (副助詞)を(強調)とした(切替 1996: 189)。
- (408) 「アイヌ語講義原稿」に「客 アッチ、ウン、クル」とある。帯広での調査項目「68. お客」のアイヌ語として、'átce 'un kur は«よその人»(近い)と報告されている(服部編 1964: 47)。
- (409) 「アイヌ語講義原稿」に「我らの事」は記録なし。an-oruspe ... の話、噂、こと、我らのこと、私たちのこと、であろうか。
- (410) 不明である。
- (411) 「アイヌ語講義原稿」に「吾等の腹を立つこと」の記録はない。知里(1975: 624)に sampe-koyki [心臓を・いじめる](クッシャロ)怒らせる、とアイヌ語索引に短い記述がある。
- (412) 「アイヌ語講義原稿」に「あるでないか」の記録はない。不明である。
- (413) 「アイヌ語講義原稿」に「痛 アルカ、」とある。arka. 痛い(本別 2006: 36)。
- (414) 「アイヌ語講義原稿」に「上二置ケ、エリカシ、アマ」とある。ama. ... を置く(本別 2006: 122)。
- (415) 「アイヌ語講義原稿」に「七」のアイヌ語はなし。arwanpe. 7個(本別 2006: 203)。
- (416) 「アイヌ語講義原稿」に調査項目「マズイ」と書き、「マズイ」を線で消してある。その下に「アエルメ 食フコト」とある。さらにその下に(マズイ、エン)と書いてある。
- (417) 「アイヌ語講義原稿」に「裸躰 アトウツサ」と書き、「ツ」を丸で囲みトウと書いてある。全体として「アトウサ」と読ませる工夫であろう。atusa. はだかである(本別 2006: 84)。
- (418) 「アイヌ語講義原稿」に「聞ユル アヌ」とある。「アヌ」の下に1文字書き、それを消してある。a-nu no. 「聞ゆる」とある。静内方言の -no について、奥田は「(接尾辞)動詞に接尾して、その動作がはなはだしいことを表す」と記述している(奥田 1999: 89)。nu ... を聞く(他動詞)。本別で、eikostek menoko kamuy nomi cikanak eikostek kamuy nu: no: wa an-eyaytupare p ne という文を採録している。nu no を、話者は「聞きすぎる」と説明した。女性が神にお祈りをする、と神様は聞きすぎるので(差しさわりがある)、という意味のようである。
- (419) 「アイヌ語講義原稿」に「家ニ入レ チセ・オレン・アファン」とある。元は「チセ・オロオン・アファン」と書いたようである。ロを消してレと書いてある。ロの下のおも線で消してあるのか判断がつかないが、ここでは仮に「チセ・オレン・アファン」としておく。「アファン」の「アフ」あたりに「入レ」と書いてある。cise or en ahun. (彼は)家に入る、家に入りなさい(本別)。

- らうまに<sup>(420)</sup> = せんの木  
 らこ<sup>(421)</sup> = 爪  
 らこたんね<sup>(422)</sup> = 足長くも  
 らいかつぶ<sup>(423)</sup> = 出来ぬ
- (さ)  
 さろ<sup>(424)</sup> = らま。葦也。「さろべつ」猿別地名又河の名ふりらまの生せる河。「さる」沙留地名。  
 さぼ<sup>(425)</sup> = 長上。女性也。「さぼろ」地名、姉を河中よ入る。  
 さく<sup>(426)</sup> = 夏。  
 さうれ<sup>(427)</sup> = 怠る。  
 さんべたつくね<sup>(428)</sup> = 短気。「さんべ」性質。心。  
 さるうん<sup>(429)</sup> = 鶴。「さる」よま原、「おるうん」よ居る。
- さつほ<sup>(430)</sup> = 柴 又さくほ  
 さつ<sup>(431)</sup> = かまく さつふい  
 さんけ<sup>(432)</sup> = 出せ  
 さん<sup>(433)</sup> = 下る 又物干まだな<sup>(434)</sup> 相模  
 さころべ<sup>(435)</sup> = 祭文 さころべき 祭文語り、  
 さい<sup>(436)</sup> = 姉 長女 血属ノ  
 さつてき<sup>(437)</sup> = 乾かす、やせさする、
- (き)  
 きさら<sup>(438)</sup> = 耳。  
 き<sup>(439)</sup> = 虱  
 きむろ<sup>(440)</sup> = 山の方。  
 きもせれ<sup>(441)</sup> = 胡坐。  
 きんむかむい<sup>(442)</sup> = 熊。深山より来る神。  
 きら<sup>(443)</sup> = 逃くる。

- (420) 「アイヌ語講義原稿」に「センノキ」のアイヌ語はない。ayusni. 語尾に長音記号がついている。帯広の広野氏により、ayúsní 木の名前、昔たぐさんあった、とげのはえた木の名前(帯広 2005: 230, 282)と報告があるが、和名は不明である。
- (421) 「アイヌ語講義原稿」に「爪、アミヒ。」とある。ami, amihi. …の爪(本別 2006: 29)。
- (422) 「アイヌ語講義原稿」に「蜘蛛 ヤ・オシケツ」とある。帯広で amítanne は、足の長いクモ(帯広 2005: 157)。
- (423) 「アイヌ語講義原稿」に「啞 エタキエ、アイカブ」と記録されている。「できない」は本別、帯広ともに 'e'áykak である(本別 2006: 133)、(帯広、服部編 1964: 156)。'aykap はへた(下手)だということ(本別 2006: 133)、(帯広、服部編 1964: 157)。
- (424) アイヌ語講義原稿に「らま」「葦」のアイヌ語なし。sar はヨシ原をさす。sarki はアシ、ヨシをいう(本別)。
- (425) 「アイヌ語講義原稿」に「長上」とある。長上の下に、「男」「女」と並べて書いてある。「男」の下に「ユ」、女の下に「サボ」とある。また、同じページに「姉 クユボ」、「兄 クコサボ」とある。これは、姉と兄の日本語が入れ替わっている。本別の話者からの聞き取りでは、sapo は姉である(本別 2006: 52)。
- (426) 「アイヌ語講義原稿」に「夏 サク、」とある。sak. 夏(本別 2006: 198)。
- (427) 「アイヌ語講義原稿」に「怠ル サウレ」とある。sawre. なま(怠)ける(本別 2006: 101)。
- (428) 「アイヌ語講義原稿」に「短気 サンベ、タックネ」とある。sanpetakne. 気が短い、短気である(本別)。
- (429) 「アイヌ語講義原稿」に「鶴、サロ・ルウン・カモイ、(ヨシ原ニオル) サロ(ヨシ) オルウン(ニ、オル)」とある。また、「鳥」に「鶴 サロ、ルウン、カモイサロ ヨシ オルウン」、「オルウン」の左側に「ニ居ル」とある。帯広で「鶴」は sarórun と報告されている(服部編 1964: 189)。本別では、常に sarorunkamuy と -kamuy がつけて呼んでいた。
- (430) 「アイヌ語講義原稿」に「柴」のアイヌ語はない。sakma 家の壁のヨシを押さえる横木(本別)。
- (431) 「十勝地名考」に「幸震 シャチナイ、(サツ) 乾ク也、(ナイ)、河或澤也、時々乾ク河」とある。「アイヌ語単語集」には記録がない。sat. 乾く、乾いている(本別 2006: 121)。
- (432) 「アイヌ語講義原稿」に「出す、出せ」のアイヌ語はない。sanke. …を出す(本別 2006: 193)。
- (433) 「アイヌ語講義原稿」に「下る」のアイヌ語はない。san. (川下へ) 行く、下る(単数形)(本別)。移動を表す語について、切替(1998b)に詳しい報告がある。
- (434) 「アイヌ語講義原稿」に「物干しだな」のアイヌ語はない。san. isatke san. 肉や魚を干すための棚(本別)。
- (435) 「アイヌ語講義原稿」に「祭文」のアイヌ語はない。sákorpe. 節をつけて語る英雄叙事詩(本別)。帯広では「男がやる。tuytak さいうような文句 節つけていうこと」と報告されている。ku-sákorpeki. (帯広 2005: 189) という例文が記載されている。
- (436) 「さい 姉 長女」の下に「血属ノ」と小さく書いてある。「アイヌ語講義原稿」に「姉 クユボ」「長上 女 サボ」とある。「姉」をさすアイヌ語について知里は、「日常会話の言語で人称形語幹(従って第3人称形)を saha とする地方と sapo とする地方がある」と記述している(知里 1993[1975]: 人間篇504)。田村すゞ子による帯広での調査で、広野氏は、姉を ku-kor sapo, e-kor sapo といい、ku-sapo, ku-saha, e-sapo, e-saha とは言わないことが報告されている(帯広 2005: 140)。報告者による本別での調査でも、姉を saha とは言わないと報告されている(澤井 2001: 33)。「単語集」では「さい」、「アイヌ語講義原稿」では「サボ」とあり、また、吉田巖の記録にも、「さいは saha 大姉」「さぼ sapo 姉」と記録されていることから、十勝地方でこのふたつの語が用いられ、使い分けられていた可能性がある。
- (437) 「アイヌ語講義原稿」に記録はない。「やせさする」とは「やせさせる」ことであろうか。現在知られている十勝方言では、「…を乾かす」は satke. a-satke. (本別 2006: 121)、「やせる、やせている」は, sattek. (本別 2006: 36)。
- (438) 「アイヌ語講義原稿」に「耳、キサラ。」とある。kisar 耳, kisara. …の耳(本別 2006: 23)。
- (439) 「アイヌ語講義原稿」に「蟲類」に「蚤、キ。」とある。ki. 髪の毛につくシラミ、頭ジラミ(本別 2006: 161)。
- (440) 「アイヌ語講義原稿」に「西 キムオロ、山ノ方」とある。帯広の広野氏が「山奥」に対して kim'or と答えた例がある(田村 2005: 322)。本別でも、山奥は kim'or という。
- (441) 「アイヌ語講義原稿」に「胡坐せヨ、モナ・アンー」とある。「モナ・アー」と書いて「ア」と「ー」の間に「ン」を入れたようにも見える。「モナ・アンー」をひとくくりにして「坐せ」と書いてある。また、「モナ・アンー」の下に「キモセレ」と書いてある。「あくら」は、帯広で kirosores と記録されている(服部 1964: 23)が、田村と報告者の共編の報告書では kiróserere と記録されている(帯広: 56)。今回、資料を再度確認したところ、kiróserere と記述されている。また、帯広で、「あくら」に「cikir kar yan. 足を組め」と報告されている(帯広: 56)。本別でも cikirkar という。
- (442) 「アイヌ語講義原稿」に「獣類」に「熊 キムン、カモイ、(深山幽谷ノ神)」とある。また、「四足動物」に「熊 キムン、カモイ キムン、山中」とある。「きんむ」は kimun (山にいる)であろう。kimunkamuy. 熊(本別 2006: 155)。
- (443) 「アイヌ語講義原稿」に「逃ケヨ キラ」とある。kira. 逃げる(本別 2006: 74)。

(㊦)

㊦う<sup>(444)</sup> = 温泉。「㊦うとう」涌洞地名又沼の名。冷泉の湧き出る沼。

㊦ぼ<sup>(445)</sup> = 長上男性の。

(め)

めらん<sup>(446)</sup> = 寒え。

めのこ<sup>(447)</sup> = 女子。人の妻とふりえ。

(み)

みち<sup>(448)</sup> = 父親。

み<sup>(449)</sup> = きま布の

みの<sup>(450)</sup>

みふ<sup>(451)</sup> = 笑ふ

みむ<sup>(452)</sup> = 細よさく

(い)<sup>(453)</sup>

ゑ<sup>(454)</sup> = 大便。

ゑゑ<sup>(455)</sup> = 犬。「ゑたころべ」河名、犬の持つ物の意。

ゑるゑ<sup>(456)</sup> = 天候の前兆

ゑるゑちり<sup>(457)</sup> = 紅色の豚木鳥。晴れ雨の前兆を教ゆる鳥の意

ゑりぼぶけ<sup>(458)</sup> = 天気ノ温ふること。

ゑのつ<sup>(459)</sup> = 遊ぶ。

ゑいいん・やいかつゑん<sup>(460)</sup> = 耻えくふきか。「ゑいいん」、無きかの意。

ゑゆんけ<sup>(461)</sup> = 虚言。

ゑいいん<sup>(462)</sup> = 無きか

ゑよや<sup>(463)</sup> = 蜂。庶野地名。

ゑきひ<sup>(464)</sup> = 目。

(444) 「アイヌ語講義原稿」に「温泉 ユウ」とある。帯広で yú oró aün kus payé'an. 話者により、「温泉行こう」と和訳されている(帯広2005:345)。

(445) 「アイヌ語講義原稿」に「長上」のアイヌ語が2語記録されている。「長上」の下、右側に「男 ユ」、左側に「女 サボ」と書いてある。「男 ユ」は、他の箇所にも記録されている「兄」をさす「ユボ」を示す可能性がある。yupo, yupi ... の兄(本別2006:52)。

(446) 「アイヌ語講義原稿」に「寒 メ、アン」とある。méan. 外が寒い、気温が低い。人が寒く感じるのは méun(本別2006:181)である。

(447) 「アイヌ語講義原稿」に「女 メノコ」とある。別のページに「女兒 メノコ」とある。menoko. 女性(本別2006:47)。ku-kor menoko は男性が自分の妻をさして言う。pon menoko 13, 14 才くらいの子(本別)。帯広での調査項目「3. 女」に menóko と報告されている(服部編1964:34)。

(448) 「アイヌ語講義原稿」に「父 ミチ」とある。mici, micthi. おとうさん、父(本別2006:50)。帯広、調査項目「12. 父」に mici, micthi と報告されている(服部編1964:39)。

(449) 「アイヌ語講義原稿」に「きま布の」のアイヌ語の記録はない。不明である。

(450) 対応する日本語は書いていない。

(451) 「アイヌ語講義原稿」に「わらふ」のアイヌ語はない。mina. 笑う(本別2006:37)。

(452) 「十勝地名考」「芽室」の語源として、「(ミム) サク、オロオ 入レシ処」とある。「裂く」は、帯広で sosó と報告されている(服部編1964:136)。本別では pétpa, sóspa と報告されている(本別2006:119)。「む」をやや小さく書いている。

(453) 「い」には、si- の音に加えて、su-, so-, が記録されている。

(454) 「アイヌ語講義原稿」に「大便、シ」とある。大便は si または、onneasin(本別2006:31)である。

(455) 「アイヌ語講義原稿」「獣類」に「犬、シタ、(シタコロベ) 十勝、浦幌ノ字(犬ノモツモノノ意)」とある。また、「四足動物」に「犬 シタ 持物 シタコロベ」とある。sita. 犬(本別)。sitakorpe 本別ではごぼうをさす。

(456) 「天候の前兆」は、次の行にある鳥の名前と関係があるか。

(457) 「アイヌ語講義原稿」鳥類「豚木鳥」にふたつのアイヌ語名が書いてある。右側に「エソクソキ、(斑文アルモノ)」とある。左側に「シルシ・チリ、」とある。「シルシ・チリ、(紅色ノキツ・キ) シル(晴雨)シ(前兆)ヲ案内スル」とある。また、「鳥」に「豚木鳥」にふたつのアイヌ語が記

録されている。「エソクソキ 斑文アル方」と「シルシ、チリ 紅色ノ方 シリ、シ 晴雨ノ前兆ヲ案内スル」とある。本別で cirutcir あるいは、sirutcir か、鳥について、また、その鳥の言い伝え(ucaskoma)についても聞き取りをしたものの、報告者が図鑑を用いて同定作業をしなかったため和名は不明である。

(458) 「ゑりぼぶけ」と書き、「つ」を消して、「ぶ」とし、「ゑりぼぶけ」と読める。「アイヌ語講義原稿」に「暖、シリ、ポフケ」とある。sirpopke. (気温が)暖かい(本別2006:181)。

(459) 「アイヌ語講義原稿」に「遊ぶ、シノツ、」とある。sinót. 遊ぶ(本別2006:147)。

(460) 「アイヌ語講義原稿」に「耻シクナイカ」が記録されている。「シイイン、エヤイカツエン」あるいは、「シイイン、エ、ヤイカツエン」と読める。「ヤイ」のすぐ上に「、」があり、その上「シイ」以下が書き加えられているため、「シイイン、エ」の「エ」をどこに入れてあるか判断がむずかしい。なお、「単語集」のほうは、「ゑいいん・やいかつゑん」であり、「エ」は入っていない。「シイインエヤイカツエン」の下に「エヤイカツエン(ハズカシ)」「シイイン、(ナキカ)」とある。また、別のページに「空腹? シエン、エイベルシュイ」とある。「シイイン」ではなく「シエン」と書いてある。切替(1998:345)に、「4.1 否定の副詞」として、si'en の記述がみえる。「反語的否定の副詞 si'en の例は次のとおりである。」とし、「Ney ta kay si'en ta'an 'osinkop ne hi 'an e'okte kun i 'an ya? (251) もしやどこかにこの輪になっているところを引っかけるところがないかな。」とある。帯広、調査項目「83. めったに」'ukómano 'ék ka si'en ki «あまり来ない»(服部編1964:256)。また、帯広、調査項目「34. 残す」「私に残さないで食べちゃったの」ku'ép eási ka si'en (somó) ki no 'e'e wa eókere a ru he? と、si'en と somó は同じ位置で使われている。報告者による本別での調査で sien の例が確認されるもの、somó の使用例が圧倒的に多く、si'en と somó の違いについてははっきりしない。帯広での調査項目「28. はずかしがる」に、to'ón ekáci yáykatuwen wa átce 'un 'utár okáy kor somó ék. という文が報告されている(帯広2005:255)。本別でも yáykatuwen である。

(461) 「アイヌ語講義原稿」に「虚言 シュンケ」とある。sunke. 嘘、嘘をつく(本別2006:63)。

(462) 同じページの「ゑいいん、やいかつゑん」を参照のこと。

(463) 「アイヌ語講義原稿」「虫類」に「蜂、シヨヤ。(日高十勝ノ境ニ「鹿野」ト云フ処アリ 又塩屋ト云フ名アリ可考、)とある。soya. 蜂(本別2006:160)。

(464) 「アイヌ語講義原稿」に「目、シキヒ。」とある。sikhi. ... の目(本別2006:20)。

ゑきひわ・わつか<sup>(465)</sup> = 涙。目よりの水。  
 ゑつとけゑ<sup>(466)</sup> = ひぢ  
 ゑもい<sup>(467)</sup> = 動く  
 ゑり<sup>(468)</sup> = 国。「ゑりべゑ」後志国。縦の国。狭長ふるを云ふ。「べゑ」の縦也<sup>(469)</sup>。  
 ゑりゑもい<sup>(470)</sup> = 地震。世界が動く。  
 ゑりぴりか<sup>(471)</sup> = 晴天。或ゑりぴか  
 ゑりべけり<sup>(472)</sup> = 晝、ひる  
 ゑりめまん<sup>(473)</sup> = 涼ゑ  
 ゑくふめのこ<sup>(474)</sup> = 妙齢の女子。娘。  
 ゑくぶくる<sup>(475)</sup> = 青年の男児。  
 ゑかり<sup>(476)</sup> = 丸形。「ゑかり」然或ハ士狩地名「ゑかりべつ」ハ丸形の沼より流出する河。

す  
 ゑう<sup>(477)</sup> = 鍋。「ゑうわろわ」土幌地名。鍋を水中ハ投入する。  
 ゑぶい<sup>(478)</sup> = 後門。  
 ゑよ<sup>(479)</sup> = 休む。「ゑよらん」休すめ。「くゑよ」私休む。  
 ゑきがく<sup>(480)</sup> = 盲。目無し。  
 ゑゆぶや<sup>(481)</sup> = 煙。  
 ゑのつ<sup>(482)</sup> = 戯る。  
 ゑう<sup>(483)</sup> = 苦味  
 ゑうきふ<sup>(484)</sup> = 苦き艸  
 ゑねーぶ<sup>(485)</sup> = 一  
 ゑま<sup>(486)</sup> = 石  
 ゑかんふつき<sup>(487)</sup> = □  
 ゑりべけりちっくかむい<sup>(488)</sup> = 太陽

- (465) 「アイヌ語講義原稿」に「落涙ヲ シキヒワ・ワッカ、オヘツケ」とある。また、「涙、ラーシ (ナク)。」とある。「ゑきひわ・わつか」は、「アイヌ語講義原稿」の「落涙ヲ シキヒワ・ワッカ、オヘツケ」から、動詞オヘツケ (こぼれる) を除いた形、「シキヒワ ワッカ」を示しているであろう。「涙。目よりの水」と記録されている。なお、本別で、wakka を使う例文がある。ku-siki wa wakka ran. 私の目から涙が落ちる。涙は、帯広で núpe, (-he) と報告されている (服部編 1964: 5)。本別でも núpe (本別: 22) である。
- (466) 「アイヌ語講義原稿」に「ヒジ シットケエ」とある。調査項目に漢字を書いておらず、ルビのような小さな文字で「ヒジ」と書いてある。sittokewe. ... のひじ (肘) (本別 2006: 28)。
- (467) 「アイヌ語講義原稿」に「地震、シリ・シモイ」とあり、「モイ」に「動」と書いてある。「アイヌ語講義原稿」の「風」などが記録されているページの欄外に、「動くモノ モイモイケ」とある。帯広、本別で、動くことは móymoyke (服部編 1964: 131)、(本別 2006: 116) である。
- (468) 「アイヌ語講義原稿」の「風」などが記録されているページに地名のメモ書きが書いてあり、「アバシリ 見ツケタ国」とある。同じページに、「シリ」「国ノ」「世ノ中」とある。sir. 土地。a-kor sir 自分たちの土地 (本別)。
- (469) 「アイヌ語講義原稿」に「縦 ベシ」とある。帯広での調査項目で「たて esóro」(帯広: 324) と報告されている。本別で esóro は話者によると「長いほう」である。
- (470) 「アイヌ語講義原稿」に「地震、シリ・シモイ」とあり、「モイ」に「動」と書いてある。「ゑもい」参照のこと。地震をさす語は、帯広で sirsum (服部編 1964: 212)、本別で sissumi が報告されている (本別 2006: 173)。浅井は、「シリスム 地震」と報告している (浅井 1993: 341)。
- (471) 「アイヌ語講義原稿」に「晴、シリヒリカ」とある。「ゑりぴか」は不明である。sirpirka. 天気が良い (本別 2006: 181)。
- (472) 「アイヌ語講義原稿」に「晝 シリベケリ」とある。sirpeker. 昼間、夜明け (本別 2006: 199)。帯広、sirpeker. ひるま [夜に対する・明るい間] (服部編 1964: 253)。
- (473) 「アイヌ語講義原稿」に「涼ゑ」のアイヌ語はない。sirmeman. 涼しい (天気) (本別 2006: 181)。
- (474) 「アイヌ語講義原稿」に「娘 シクプメノコ、」とある。帯広での調査項目「9. 乙女」に、sikúpmenoko とあり、広野氏の説明では「20 才前後から。30、40 才位まで 娘」(帯広 2005: 134) である。本別では、sikup 若い、20 歳代前後、働き盛りのこと。また、15、16 ~ 17、18 まで。menoko は女性をさす。
- (475) 「アイヌ語講義原稿」に「青年 シクプクル、」とある。帯広での調査項目「8. 青年」に sikúpkur とあり、広野氏の説明では「20 才前後から。30、40 才位まで 男」と報告されている (帯広 2005: 134)。本別でも、青年は sikupkur といい、「20 歳代前後、働き盛りのこと」また、「15、16 ~ 17、18 まで」という。
- (476) 「アイヌ語講義原稿」に地名のメモ書きのページあり、「士狩 シカリ 丸イ」とある。また、「十勝地名考」に「然別、シカリベツ、又士狩、(シカリ) 丸形也 丸形ノ沼ヨリ流出セル河」とある。本別では、sikari は「まるくなる」。帯広での調査項目「2. まるい」に sikári. cup sikári と報告されている。話者は「三日月から大きくなる」と説明している (帯広 2005: 284)。
- (477) 「ゑう」の「ゑ」と書いてある。また、「ゑう」の上部に「す部」「△」と書いてある。su は「す」に含まれることを意味しているか、あるいは「す」に移動させるための△記号かとも思われる。なお、山縣資料には「す」のページは確認されない。「十勝地名考」「土幌」に「鍋」のアイヌ語が記録されている。「土幌、シホロ、スウオロオ、(シウ) 鍋也 (オロオ) 投入也」とある。先に「シウオロオ」と書き、「シ」を消して「ス」と書いたようにみえる。摩擦音のうち s について、知里は「尚 s と sh も亦同じ音韻で後者は前者の少しく口蓋化した程度のものにすぎない」(知里 1974: 8) と記述している。「す」が「ゑう」「シウ」のように発音されたことを記録した可能性がある。本別の古い音声資料を聞くと、清川ネウサルモンは鍋 su を「しゅ」と発音していた。su. 鍋 (本別 2006: 106)。
- (478) 「アイヌ語講義原稿」に地名の下書きのページがあり、そこに「沼尻 ブイ 尻」「シブイ 尻ノ穴」とある。本別で sipuye ... の肛門 (本別 2006: 31)、sipuy の記録はない。帯広では osórupuy, -e (服部編 1964: 15) である。
- (479) 「アイヌ語講義原稿」に「休ム 復 シニアン、単 クシニ、」とある。「シニアン」の右上に「復」とあり、「クシニ」の右上に「単」と書いてある。単数と複数であらわすことを表記したものであろう。sini. 休む (本別 2006: 42)。sini-an. 私たちが休む。-an は不定人称接辞。ku- 主格人称接辞 1 人称単数 ku-sini. 私が休む、休憩する。
- (480) 「アイヌ語講義原稿」に「盲 シキガク ガク 無」とある。siknak. 盲である、目が見えない (本別 2006: 21)。
- (481) 「アイヌ語講義原稿」に「煙」のアイヌ語はない。supuya. 煙 (本別 2006: 99)。
- (482) 「アイヌ語講義原稿」に「遊ぶ、シノッ、」とある。sinot. 遊ぶ (本別 2006: 147)。
- (483) 「アイヌ語講義原稿」に「苦味」のアイヌ語はない。帯広で siw. なが (苦) い (服部編 1964: 98)。本別で siwnin である。
- (484) 「アイヌ語講義原稿」に「苦き艸」のアイヌ語はない。苦いは、帯広で siw. (服部編 1964: 98)。本別で siwnin である。草 (食用、薬草など) は kina である。
- (485) 「アイヌ語講義原稿」に数をあらわすアイヌ語の記録はない。「ゑねーぶ」と長音記号を用いている。sinép. ひとつ、1 個 (本別 2006: 203)。
- (486) 「アイヌ語講義原稿」に「石 スマ」とある。suma. 石 (本別 2006: 171)。
- (487) 日本語の漢字 1 文字分解読ができない。「玖」の可能性はあるか。「まるい (円、球) 'o'ar sikánratki. (本別 2006: 214)、帯広の調査項目「17. まんまるの」に 'o'ar sikánratki. (服部編 1964: 275)。
- (488) 「アイヌ語講義原稿」に「日 チュプカムイ、」「日 旭 シリベケリ チュプカムイ」のように書いてある。「チュプカムイ」の右上に小さな文字で「旭 シリベケリ」と書き足したように読める。「アイヌ語講義原稿」では「チュプ、」「単語集」で「ちっく」と表記されている。sirpekercupkamuy. 太陽 (本別 2006: 179)。

まゆんく<sup>(489)</sup> = トド枅

まべ<sup>(490)</sup> = 鮭

まゑやも<sup>(491)</sup> = 和人

まよもいぬるへ<sup>(492)</sup> = 聴いか

まろてれけ<sup>(493)</sup> = 踏

まつかま<sup>(494)</sup> = 取扱ふ

まりいいくろつゑ<sup>(495)</sup> = 暗夜

まんけつぷ<sup>(496)</sup> = 萩

まうにん<sup>(497)</sup> =

まりくんね<sup>(498)</sup> = 夜

(ゑ)<sup>(499)</sup>

(ひ)

ぴりか<sup>(500)</sup> = 善也美也。

ぴんねまた<sup>(501)</sup> = 牡犬、「ぴんね」獣類の牡の総称。

ぴんねらう<sup>(502)</sup> = 三寸位より成長せざる短角の鹿。

ぴりかにいぬ<sup>(503)</sup> = 明し聞け。

ぴりかねぶかき<sup>(504)</sup> = 一心し勉めよ。気を引き立ててせよ。

ぴかん<sup>(505)</sup> = 急行

ぴんうま<sup>(506)</sup> = 烏貝の多くらる処。美蔓地名<sup>(507)</sup>。

ぴんい<sup>(508)</sup> = 烏貝の通る一定の路。美生地名。

びろろ<sup>(509)</sup> = 足場の好き処。「びろろ」廣尾地名也「ろろ」は足場也。

ぴりからん<sup>(510)</sup> = 又「ぴりかん」左様ふら。

ぴりかたまん<sup>(511)</sup> = 気を附て御出で。

ぴりわ<sup>(512)</sup> = 拭ふ。

(489) 「アイヌ語講義原稿」に「トド松」のアイヌ語はない。帯広での「松の木」の聞き取りで、広野氏は、húp のうち大きいものを súnku とよぶと答えている(帯広2005:281)。本別で hup はトド松をいう(本別町教育委員会1989:88)。

(490) 「アイヌ語講義原稿」に「鮭」のアイヌ語はない。siipe. 鮭(本別)。

(491) 「アイヌ語講義原稿」に「和人」のアイヌ語はない。sisam. (アイヌを含まない) 和人(本別2006:57)。

(492) 「アイヌ語講義原稿」には「聴いヌ、」とある。和訳に「聴いか」とあるが、「聴いたか」であろうか。somo…しない。inu 聞く。ru he…したのか(切替1996:253)。somo inu ru he? (彼は聞かなかったのかい? あるいは、somo e-nu ru he? あなたは聞かなかったのかい。nu…を聞く。

(493) 「アイヌ語講義原稿」に「踏」のアイヌ語の記録はない。久保寺(2020:814)に「shir-oterke プチ踏ム フミツケル」とある。「踏む」は帯広で'otérke〔他〕と報告されている(服部編1964:134)。本別でも'otérkeである

(494) 「アイヌ語講義原稿」に「取扱う」の記録はない。沢井トメノ氏は sikkama を「あづかる」「あづかう」と説明した。taanpe eci-kore-an na, pirkana sikkama ani. という文を、「(大切なものを)これ、おまえにやるから、大事にあづかえよ」と和訳した。本別では、家、山、洞窟などの場所、品物、動物や人間を sikkama するという例文を採録している。「あづかる」以外にも、守る、治める、動物には扱う、養うなど、文脈によりいろいろに和訳していた。

(495) 「アイヌ語講義原稿」に「暗夜」のアイヌ語はない。sir-ekurok. まっくら、暗闇(本別2006:181)。

(496) 「アイヌ語講義原稿」に「ハキ シンケツプ」とある。目黒による調査で、sinkep は、エゾヤマザクラの茎(本別町教育委員会編1989:83)である。

(497) 対応する日本語の記録がない。「アイヌ語講義原稿」に「紅 シユニン、」とある。

(498) 「アイヌ語講義原稿」に「夜 クンネ」とある。kunne 夜、sir-kunne は、日が暮れる、暗い、暗くなる(本別2006:181)。

(499) 「ゑ」のページにはアイヌ語の記録はない。

(500) 「アイヌ語講義原稿」に「美 ビリカ」「善 ビリカ」「全快 ビリカ」「健全 ビリカ」とある。pirka. 美しい、よい(本別2006:221,45)。

(501) 「アイヌ語講義原稿」「獣類」に「牡犬、ピンネ・シタ、獣類ノ総テノ牡ヲ「ピンネ」ト云フ」とある。また、「四足動物」に「牡犬 ピンネ、シタ ピンネ 四足ノ男ノ総称」とある。pinne おす(雄)の、sita 犬(本別2006:155)。

(502) 「アイヌ語講義原稿」「獣類」に「短角鹿、ピンネラウ、(三寸位ノ角ノモノ)」とある。また、「四足動物」に「ピンネラウ □モセス大クモナラズ三寸位ノ角アルシカ」とある。pinneraw は、若く元気な雄鹿(本別町教育委員会編1989:53)をいう。

(503) 「アイヌ語講義原稿」に「能ク聞ケ ビリカンイヌ、」とある。pirkan と pirkano の使い分けは不明である。報告者の本別での調査では、丁寧な言い回し、あいさつの言葉、年下の者から年上の人に話しかける場合には pirkano が主に用いられる。また、全体的に pirkano のほうが pirkan より多く記録されている。帯広では pirkana mokor ani という文のあとで、「pirkano も pirkan もどっちでもいい」と広野氏による説明がある(帯広2005:125)。pirkan よく、inu 聞く、よく聞きなさい(本別)。

(504) 「アイヌ語講義原稿」に「一心し勉強セヨ <sup>気ヲ引き立テヨ</sup> ビリカ・ネ フカキ 或(アリキキ)。」とある。pirkano ではなく、pirka と記録されている。奥田は、静内方言における pirka について、1項動詞としての用法に加えて、pirka i-epunkine yan. 「私をよく見守ってください」のように独立の副詞としても用いられる(奥田1999:107)と記述している。ここの pirka も静内方言と同様に副詞として用いられている可能性がある。「ねぶかき」は、なに・か・する、だろうか。nep kay ki nankor haw etap okay. 話者による和訳は、「(お隣が) なにか、やるんだらうかなー」であった。arikiki は、精を出す、がんばる。pirkano arikiki ani. しっかりやりなさい、怠けないでがんばれ(本別)。

(505) 「急行」と書いた文字が薄く読める。消したあとが薄く見えているのだろうか。「アイヌ語講義原稿」に「早」があり単語がふたつ書いてある。左側に「ヒカン」、右側に「早く エンコタ」とある。報告者による本別での調査では、pikan は1例しかない。話者は、「はやいということに pikan は使わない、tunas という」と説明した。帯広での調査項目「18. 速い」に、'epikan ru. 「ずいぶんはやいねえ。足のはやいこと、車、馬、飛行機でも」(帯広:173)とある。'enkota は、はやく(本別)。帯広でも、'enkota ek. 広野氏により「はやくおいでよ」と和訳されている(帯広2005:173)。

(506) 「十勝地名考」「美生、ビバイロ、(ビバ) 黒キ大貝、(ロ) 通路也」とある。帯広では貝を sey(服部編1964:194)と呼ぶ。本別でも sey という。報告者が本別で調査をした際、話者は pipa という語は知らないと話していた。帯広の上野サダ氏は黒くて大きな貝をビバと呼んだ(内田祐一氏の教示による)。

(507) 「十勝地名考」に「美蔓、ビバウシ、(ウシ) 多クアル場処也 貝ノ多キ処也、」とある。

(508) 「十勝地名考」に「美生、ビバイロ、(ビバ) 黒キ大貝、(ロ) 通路也」とある。

(509) 「十勝地名考」に「廣尾、ヒロワ、(ピ) 「ヒリカ」 好き也、(ロロ) 足場也、濱ヨリ高台ニ登ルニ足端ノ好き意、」とある。

(510) 「アイヌ語講義原稿」に「左様ナラ、ピリカン、(ピリカン)」とある。pirka は副詞の働きをしていると考えられる。奥田による静内方言の例(奥田1999:107)として、注(504)を参照のこと。「さようなら」にあたるあいさつは、お互いが別れる際に、残る人が出かける人に対してかける言葉と、出かける人が残る人にかかる言葉は同じものではない。本別の例で、去る人が残る人に向かって pirkano okay (単数形は an) yan や pirkano yayetupare wa an ani. などと言う。お大事に、気をつけてお過ごしください、などという意味である。「ぴりかん」は pirka an を続けて発音し、このように聞こえたということであろうか。

(511) 「アイヌ語講義原稿」に「気ヲ附テオ出デ、ピリカオマン、」とある。pirkano ではなく、pirka と記録されており、pirka は副詞の働きをしている(奥田1999:107)例といえる。oman は、…が行く(単数)である(本別2006:67)。pirkano oman ani. (出かける人に向けて) 気をつけて行きなさいよ、行ってくださいよ。

(512) 「アイヌ語講義原稿」に「拭へ、(ピリハ、)」とある。本別(2006:115)の例で、pirpa. …をふ(拭)く。e-etu pirpa! あんた、鼻を拭きなさい。

ぴりかんうらい<sup>(513)</sup> = 能く洗ふ。

せい<sup>(528)</sup> = から せいうまびら<sup>(529)</sup>

(も)

も<sup>(514)</sup> = 滞る也逃げざる也集まる也留る也。

もいわ<sup>(515)</sup> = 風防の山或ハ獣類の群の留る山、の意、  
茂岩地名或ハ藻岩と書く。

もつけふ<sup>(516)</sup> = 林也。全上の意。風防林也。

もゆつく<sup>(517)</sup> = 狸。

もまんべ<sup>(518)</sup> = 牝鹿。人の気を嗅ぐも逃さるもの。

も<sup>(519)</sup> = 蠅。目覚<sup>ゑ</sup>の意。

もろ<sup>(520)</sup> = 蛆。う<sup>ゑ</sup>。蠅より生<sup>ゑ</sup>たる物。

もい<sup>(521)</sup> = 湾形を成せる処。茂寄地名。

もいちやりう<sup>(522)</sup> = 湾の入口の処。

もふらん<sup>(523)</sup> = 坐せよ。

もんらいけ<sup>(524)</sup> = 働く。

もうべつ<sup>(525)</sup> = 緩き流。紋別或紋 地名。

もむ<sup>(526)</sup> = 流るゝ。

(せ)

せいせつけ<sup>(527)</sup> = 暑<sup>ゑ</sup>

「アイヌ語講義原稿」<sup>(530)</sup>

獣類 チ、コエキップ<sup>(531)</sup> (我々ノ捕獲スヘキモノ、)

水牛、 レブン、カモイ、(大洋ノ神)天鹽ノ禮文島

狼、 ホル・ケウ、(叢ニテモノヲ殺ス)

狐、 チ、ロンノップ、(我々ノ殺シタモノ)

兎、 エソーポ、

犬、 シタ、(シタコロベ)十勝浦幌ノ字(犬ノモツ  
モノノ意)

牝犬、 マツネ・シタ、(妻トナルベキ)

牡犬、 ピンネ・シタ、 獣類ノ総テノ牡ヲ「ピンネ」  
ト云フ

小犬、 ポー・シタ、

熊、 キムン・カモイ<sup>(532)</sup>、(深山幽谷ノ神)

水獺、 エシヤマン<sup>(533)</sup>、

海豹、 ツカラ<sup>(534)</sup>、

黄鼠、 ホイヌ、

木鼠、 ニ・ウエオ、(木ヨリ木ニ蜚ビ移ル)

- (513) 「アイヌ語講義原稿」に「洗フ、ピリカンウライ、」とある。「ピリカ」と「ウライ」のあいだに、「ン」が小さく書いてある。pirkan よく、uraye …を洗う(本別2006:121)。
- (514) 「十勝地名考」「モケナシ、」に「(モ) 留マル也滞ル也」とある。帯広での調査項目「10. 止る」に、niham ka mo wa okáy. 広野氏による和訳は、「木の葉が動かなくなった(じっとしている)。」である。また、別の例文で、mo wa an. mo wa okáy. 広野氏は、「人間にでも。寝ても座っても、黙っている人は～」と説明している(帯広2005:168-169)。
- (515) 「十勝地名考」に「茂岩、モイワ、(モ) 留也滞也(イワ) 小キ山也、山ノ為ニ風或ハ獣類ノ滞リ留マル処」とある。
- (516) 「十勝地名考」に「モケナシ、」の記録がある。「モケナシ、(モ) 留マル也滞ル也、林ノ為ニ風等ノ滞リ殺ケル処? 或ハ或獣類ノ群リ留マル意?」とある。「もつけなし」、「もつ」と書いてある理由は不明である。kenas. 林(本別2006:174)。帯広での調査項目「16. 林」に kenás《“木原”》と報告されている(服部編1964:214)。
- (517) 「アイヌ語講義原稿」「獣類」に「狸、モ・ユック、(逃ケザル鹿)」とある。「四足動物」に「狸 モユック、モ、ニケザル ユック 鹿」とある。moyuk. 狸(本別2006:156)。
- (518) 「アイヌ語講義原稿」「獣類」に「牝鹿 モ・マン・ベ、(人ノ気ヲカガモ逃ケサルモノ)」とある。また、「四足動物」に「牝鹿、モマンベ、モ、ニゲサル マウ、香氣、ベ モノ」とある。mománpe. メンのシカ(帯広2005:376)。
- (519) 「アイヌ語講義原稿」「蟲類」に「ハイ モシ。(目覚マシ)」とある。同音異義語の例、mos. ハエ(蠅)(本別2006:161)。mos(自動詞)目がさめる(本別)。
- (520) 「アイヌ語講義原稿」に「ウジ モソシベ。(「ハイ」ヨリ生シタルモノ)」とある。漢字で蠅と書いてあることから、「ハイ」は「ハエ」をさすと思われる。mosospe. ウジ(本別2006:161)。
- (521) 「十勝地名考」に「茂寄、モヨリ、モイオロ、(モイ) 湾曲セル、(オロ) 処也、陸地ノ湾曲シ海水ノ入レル処即港湾也、」とある。
- (522) 「十勝地名考」に記録はない。
- (523) 「アイヌ語講義原稿」に「胡坐セヨ、モナ、アンー、」と読める。「モナ・アー」と書いて、「ア」と「ー」の間に「ン」を入れたように見える。「モナ・アンー」の全体をまとめて「座セ」と書いてある。本別で、mona'a. 話者は「ちゃんと膝をぐつとそろけて座ること」と説明した。mona(y) an. 座りなさい。帯広で、調査項目「19. すわる」mon'a. 広野氏による説明は「べたっと座ること」(帯広2005:56)、また、いすにかけることも món'a. (帯広:36) という。
- (524) 「アイヌ語講義原稿」に「働く モンライケ」とある。monrayke. 働く、仕事(本別)。
- (525) 「アイヌ語講義原稿」に「緩流 モーベツ」とある。
- (526) 「アイヌ語講義原稿」に「流るゝ モム」とある。mom. 流れる(本別2006:124)。
- (527) 「アイヌ語講義原稿」に「暑 セイセック、」とある。また、別のページに「暑 セセッキ 火ノ」と書いてある。sések. 暑い(本別2006:181)。
- (528) 「アイヌ語講義原稿」に「から」のアイヌ語の記録はない。「から」ではあることに注意。sey. 川の貝、沼の貝、海の貝(本別2006:162)。
- (529) 地名。地名研究者の山田秀三は、著書『北海道の地名』で、セイがつく地名のひとつ「セヨピラ(雨竜川の秩父別町と多度志境の大崖の名)を、セイ・オ・ピラ(sei-o-pira 貝殻・多くある・崖)と解釈し、セイについて、「方々の内陸の川崖に海の貝殻が出る処がある。それが目につくのでこの地名になったのであろう」と記した(山田1994:81)。
- (530) 「獣類」や「鳥類」のようなまとまりのある区切り以外では、ページの区切りを示すために1行あけて翻刻した。
- (531) 「アイヌ語単語集」にこの語は記録されていない。cikóykip. けもの(帯広、本別)。
- (532) 「アイヌ語単語集」「き」に「きんむかむい」とあるが、ここでは「キムン・カムイ」である。また、「四足動物」で「キムン・カモイ」である。
- (533) 「アイヌ語単語集」には「か」の項目がないため、「かわうそ」のアイヌ語の記録はない。「四足動物」にも「エシヤマン、」とある。esaman. かわうそ(本別)。
- (534) 「アイヌ語単語集」の「つ」にも「と」にもこの語の記録はない。「ツ」の右下に小さく「ウ」のような字が書いてあるが消してある。「四足動物」には「海豹 ツウカラ」と書いてある。本別と帯広は内陸部にあるため、沢井氏、広野氏は、海の生物の名前は詳しくないという。

鼠、 エ・ルムン、(忍ヒテ食フ)  
 狸、 モ・ユック、(逃ケザル鹿)  
 鹿、 ユック、  
 牝鹿、 モ・マン・ベ、(人ノ気ヲカグモ逃ケサルモノ)  
 牡鹿、 アプカー<sup>(535)</sup>、  
 小鹿、 ポナプカー、  
 新角鹿、 タンバ・ユック、(今年ノ鹿)  
 短角鹿、 ピンネラウ、(三寸位ノ角ノモノ)  
 縞鼠、 エベ・シロ、(縦縞)  
 鳥類 チカップ、  
 雀、 アمام・エ・チカップ<sup>(536)</sup>、(穀類ヲ食スル鳥)  
 鳥、 パスクロ、(炭色ノモノ)  
 鳩、 クキシュエ、(鳴声)  
 シギ、 リヤ、チビヤク、(越年スル「シギ」(ヤチジキ))  
 鶴、 サロ・ルウン・カモイ、(ヨシ原ニオル) サロ (ヨシ) オルウン (ニ、オル)  
 白鳥、 レタッチリ、(白色ノ鳥) (レタリ (白))  
 豚〔ママ〕木鳥、 エソクソキ、(斑文アルモノ) シルシ・チリ、(紅色ノキツトキ) シル (晴雨) シ (前兆) ヲ案内スル、  
 梟、 コタン・コロ、カモイ、(部落トシテ持ツベキ)  
 鶯、 ポウボキチウ、(鳴声)  
 杜鵑、 ベベケリ・チウ、(鳴声)  
 雲雀、 トメンピロ、  
 カモ<sup>(537)</sup>、 ウ・ヨルン、チカップ、(河中ニオル鳥)  
 鶯、 カバッチリ<sup>(538)</sup>、(羽根ヲカブセル鳥)  
 鷹、 チカップ、コキキップ、(小鳥ヲ捕フル)  
 厂、 クキトック<sup>(539)</sup>、  
 新 アシリ 旧 フシコ 伏古別  
 フタスル プタ、エウシ<sup>(540)</sup>  
 戸ヲ閉ヂヨ、 アブシタ、シ ーアシ  
 戸ヲ開ケヨ、 アブシタ、マカ  
 上ニ置ケ、 エリカシ、アマ

下ニ置ケ、 エスリカ、ウシアマ  
 遊ブ、 シノツ、<sup>我々聞</sup>  
 聞 ヌ、ヌ アヌウ  
 拾フ エ、ウマレ、  
 痛 アルカ、  
 痒 マヤイケ、  
 喜バシ ヌチヤツ、テック<sup>(541)</sup>、  
 皆ナ悉 オビッタ、  
 能ク聞ケ ビリカンイヌ <sup>?</sup>ナー  
 了解シタ エラマアン <sup>ヨ</sup>ワー  
 暑 セイセック、  
 暖 シリポプケ  
 寒 メ、アン  
 冷 ヤンム (止若村) 冷水ノ意  
 内 オロ  
 外 エソソ  
 簾戸 アバロツペ アブツケ、(スダレ)  
 其処ニ坐レ トオンタ、ア  
 此処ニ坐レ タァンタ、ア  
 其処ニ置ケ トオンタ<sup>(542)</sup>、アマ、  
 教ユル エチェザ、ココアン<sup>入レ</sup>  
 家ニ入レ チセ・オレン・アフン  
 擲レ<sup>(543)</sup> エ、ヤプケレ エ、ヤプキリ<sup>(544)</sup>  
 曲ル レウケ (曲レ) レエ<sup>(545)</sup>  
 直ク<sup>(546)</sup> オウベカ <sup>氣ヲ引キ立テヨ</sup>  
 一心ニ勉強セヨ ビリカ・ネフカキ 或 (アリキキ)。  
 早ク来レ エンコタエック  
 早ク行テコイ エンコタオママエンエック  
 為ヨ イタッキイ  
 為スナ イデッケキ<sup>(547)</sup>  
 耻シクナイカ シイインエ、ヤイカッエン<sup>(548)</sup> エヤイ  
 カツエン、(ハズカシ) シイイン、(ナキカ)  
 失フ (エコロ<sup>泣物</sup>ベ) オチエ  
 イヤダ エトランネ<sup>(549)</sup> エトランネ

(535) 「アイヌ語単語集」に「ほなぶかあ」で録されている。「ほ」を参照のこと。  
 (536) 「アイヌ語単語集」にこの語の記録はない。すずめ、amam-e-cikap. amam-e-poncikap. である (本別)。  
 (537) 「カモ」という見出し語の上に漢字で「鴨」と書いてある。「アイヌ語単語集」に(か)の項目がないため、この語の記録はない。  
 (538) 「アイヌ語単語集」に(わ)の項目がないため、この語の記録はない。  
 (539) 「アイヌ語単語集」にこの語の記録はない。  
 (540) 「アイヌ語単語集」にこの語の記録はない。  
 (541) ヌチヤツのあとに「クツテ」と書きそれを線で消し、その下に「テック」と書いてある。全体で「ヌチヤツ、テック」と読める。  
 (542) トオンとタの間に「」が打たれている。タを「ダ」と書こうとしたか、あるいは、トオンとタの間の区切りの意味か不明である。  
 (543) 「擲ル」の「ル」を消し、「レ」と書き、「擲レ」としている。  
 (544) 「エ・ヤプケレ」と書き、ッを消してある。「ケレ」の右に「キリ」と書き、全体として「エ・ヤプケレ」「エ・ヤプキリ」と読める。  
 (545) 「アイヌ語単語集」にこの語の記録はない。  
 (546) 「アイヌ語単語集」にこの語の記録はない。「直ク」の下に対応するアイヌ語「イイカン」と書き、それを消して、「オウベカ」と書いてある。  
 (547) 「イダッケ」と書き、線で消し「イデッケキ」と書いてある。  
 (548) 「シイネ・ヤイカッエン」と書き、「ネ」を消し、「ネ」の右に「インエ」と書き「シイインエ」とし、全体で「シイインエ、ヤイカッエン」と読める。  
 (549) 「イトランネ」と書き、「イ」を消し「エ」と書いてある。その下に「アンベ」と書きそれを線で消してある。

云フテ聞カセル	クエツキヌ <sup>(550)</sup>	右	オシモムサムン <sup>(561)</sup>
何ヲ云フノカ	ネプタブエエハウアナ <sup>(551)</sup>	早	早ク エンコタ
	ハウアナ		ヒカン
	ノ タ		
天皇 <sup>(552)</sup>	チマイレ・カモイ	男	オツカイ
眠ル <sup>(553)</sup>	エ、シュイバ <sup>(554)</sup>	女	メノコ
ネル	モコロ <sup>(555)</sup>	父	ミチ
待テ	イルカ・イネチウカ	母	ハボ
啼	ラアーレセイ	兄	クコサボ <sup>(562)</sup>
フーム、シテモヨシ	アブクスエン	弟	クアキ
最重神、	ソソノ、バアセ、カムイ <sup>(556)</sup>	姉	クユボ <sup>(563)</sup>
	真実 尊	妹	クツレシ
高	リイ	叔父	クコロアチヤ
低	ラム	叔母	クコンナルベ
天上	リコオロ	従兄弟	クユボ <sup>(564)</sup>
地下	ラオロ	従弟 <sup>(565)</sup>	
遠	トイマ	上流 <sup>(566)</sup>	ベンケ
近	ハンケ	下流 <sup>(567)</sup>	パンケ
大	ボロ	長上	男 ユ <sup>(568)</sup>
	オンネ		女 サボ
小	ポン	汝	アノカイ
深	オオ	妻	マチ
浅	オハック	私	クアニ
好	エ・エルシュイ	子供	ポー
不好	エ・エコチヤン	実	アンベ
美	ビリカ	虚言	シュンケ
醜	カッエン <sup>(557)</sup>	長	タンネ
善	ビリカ	短	タックネ
悪	エン <sup>(558)</sup>		
緩	ラツツダラ	音	フミヒ
急	タンカシノ <sup>(559)</sup>	持ツ	ダアンベク、ワニ
前	コッチヤケ	知ラヌ	ウワ (ドントノー)
后	オシマケ	穢ル	アチュカラ或ハ エチヤケレ <sup>(569)</sup>
左	オハラキサムン <sup>(560)</sup>		

- (550) 「ヲマニワニ」あるいは「ヲマエウエ」と書き、全体を線で消している。その下に「クエツキヌ」と記入している。
- (551) 「ネプタブエエハウアナ」の下に、右側に「ハウアナ」と書いてあり、ハウの左に「ノ」、「アナ」の左に「タ」と書いてある。
- (552) 「天皇」という文字の上に、「最尊神」と書いて線で消してある。
- (553) 「アイヌ語単語集」にこの語の記録はない。
- (554) 「クエ・シュイバ」と書き、クエをカッコに入れ、その右側に「エ・」と書いてある。「エ、シュイバ」と読める。あるいは、「クエ、シュイバ」の「クエ、」を「エ、」にして、「クエ、シュイバ」と「エ、シュイバ」と書いた可能性がある。
- (555) 「アイヌ語単語集」にこの語の記録はない。見出し語「ネル」はルビのように小さい文字で書いてある。
- (556) 「アイヌ語単語集」にこの語の記録はない。ソソノの左側に「真実」と書き、バアセの左側に「尊」と書いてある。この次のページから原稿用紙を上下二段に使っている。
- (557) 「アイヌ語単語集」にこの語の記録はない。
- (558) 「アイヌ語単語集」にこの語の記録はない。
- (559) 「アイヌ語単語集」にこの語の記録はない。
- (560) 「左」の下に「オシモムサムン」と書き、「左」と「右」を入れかえるための線を引いてある。「左」は「オハラキサムン」。
- (561) 「右」の下に「オハラキサムン」と書き、「左」と「右」を入れかえるための線を引いてある。「右」は「オシモムサムン」。
- (562) 「兄」の右下に小さな△印がつけてある。
- (563) 「姉」の右下に小さな△印がつけてある。
- (564) 「従兄弟」「クササボ」と書き、ササを線で消し、ユに置き換え「クユボ」と読める。「従兄弟」と「従弟」を括弧でまとめ、「アトマワシ」と記入してある。
- (565) アイヌ語は書かれていない。「従兄弟」と「従弟」を括弧でまとめ、「アトマワシ」と記入してある。
- (566) 「上方」の「方」を消して「流」に書き直し「上流」と読める。
- (567) 「下方」の「方」を消して「流」に書き直し「下流」と読める。
- (568) 「長上」の下に「女 サボ」と書いてある。その右側に「男 ユ」と書いてある。「サボ」と並べて書いてあることから、「ユボ」の可能性はある。
- (569) 「アイヌ語単語集」にこの語の記録はない。「穢ル」の上の欄外に「不潔」と書いてある。

アマイ  
甘イ ルウルコル<sup>(570)</sup> (ウマイ、ケラアン  
マズイ<sup>(571)</sup> アエルメ 食フコト (マスイ、エン)  
空腹<sup>我</sup> ク、エベルシュイ 空腹? シエン、エイベル  
シュイ  
満腹 グ、ホニシキ  
トウ<sup>(572)</sup>  
裸躰 ア (ヅ) サ  
有難イ ヤイライケレ<sup>(573)</sup>  
切レル トイ<sup>(574)</sup>  
折ル カイ<sup>(575)</sup>  
黙レ ツシテ  
聞ユル アヌ  
教ユル<sup>(576)</sup>  
辛 ツアヤラカラ  
危嶮 イヤイキプテ、  
持テ、 アニ  
破ル ソソ<sup>(577)</sup>  
  
蟲類 キキリ<sup>(578)</sup>。  
蛇、 タンネ、オコッコ。(長キ怪物)  
蜘蛛、 ヤ・オシケツ。 (「ヤ」網、「オシケツ」  
編ム)  
蜻蛉、 ハンク、プカエチウ。  
蝶、 バ・レウレウ。(「バ」頭「レウレウ」羽根打シ  
テテ止マル意) 艸花ノ頭ニトマルノ意  
蜂、 ショヤ。(日高十勝ノ境ニ「鹿野」ト云フ処アリ  
又塩屋ト云フ名アリ可考、)  
蟻、 カムイ、エトナツ<sup>(579)</sup>。(「カムイ」熊ノコト  
黒色ノ蟻、「エトナ」刺スコト)  
フレ・エトナツ<sup>(580)</sup>。(「フレ」赤色)  
ノミ<sup>(581)</sup> タイキ。(当縁郡ニ大樹駅アリ「タイキコタン」  
ハノミノ多ク居ル処ト云フコト、)

虱、 キ。  
毛虱、 ウル・キ<sup>(582)</sup>。(「ウル」皮ノ衣、)  
ミヅ<sup>(583)</sup> エモク。  
蛙、 オオアチ。 鳴声  
トールンベ。(沼ニ居ル物)  
ヲタマジヤクシ<sup>(584)</sup> イカイシュプネ。(「イカイ」尖ラ  
サル平ナル物)  
夔レ尺、 イ・テメ・キキリ。(「テメ」量ルコト  
「イ」総テノモノ、「キキリ」蟲)  
火取蟲、 アベ・エトンベ。 ((アベ) 火 「エトン」  
借ル (ベ) 物)  
毛蟲、 エ・ココンバ。(凡テノ物ニカラマル)  
蚊、 エト・タンネ。(鼻長)  
ブユ、 イ・ピロレ。(「イ」キズ「ピロレ」ツケル)  
ヌカカ。 エライライ。(食ニ来テ死スル)  
蚎、 ラブチュプケ。(「ラブ」羽根「チュプケ」縮メル)  
マムシ<sup>(585)</sup> ドッコニ。(「ドッコ」ハレル)  
ホタル、 トムトム・キキリ (光ル光ル虫)  
  
ハイ<sup>(586)</sup> モシ。(目覚マシ)  
ウジ<sup>(587)</sup> モソシベ。(「ハイ」ヨリ生シタルモノ)  
鈴虫<sup>(588)</sup>、  
キリクス<sup>(589)</sup>、  
ハタオリ、 バツタキ  
蟬 ヤキ  
  
手、 テケヘ。  
爪、 アミヒ。  
鼻、 エトウー。(江戸城ノ地中海中ニ突出シ鼻ノ如シ)  
齒、 エマキ。  
ヒケ  
レキ<sup>(590)</sup>。  
髪、 広 オトツ。 オトツピ 狭

(570) 「アイヌ語単語集」に「る」のページなし。  
(571) 「マズイ」を線で消してある。  
(572) 「ツ」を丸で囲み、その右側に「トウ」と書いてある。  
(573) 「ヤイライキリ」の「キリ」を線で消して「ケレ」と書いてある。  
(574) 「アイヌ語単語集」に記録なし。  
(575) 「アイヌ語単語集」に「か」のページなし。  
(576) 対応するアイヌ語は書かれていない。  
(577) 「アイヌ語単語集」に「そ」のページなし。  
(578) 「アイヌ語単語集」に記録なし。  
(579) 「アイヌ語単語集」の「か」に記録なし。  
(580) 「アイヌ語単語集」にこの語の記録はない。  
(581) 「アイヌ語単語集」にこの語の記録はない。見出し語の欄にルビのように小さく「ノミ」と書いてある。  
(582) 「アイヌ語単語集」にこの語の記録はない。  
(583) 見出し語の欄にルビのように小さく「ミヅ」と書いてある。  
(584) 見出し語の欄にルビのように小さく「ヲタマジヤクシ」と書いてある。  
(585) 見出し語の欄にルビのように小さく「マムシ」と書いてある。  
(586) 見出し語の欄にルビのように小さく「ハイ」と書いてある。  
(587) 見出し語の欄にルビのように小さく「ウジ」と書いてある。  
(588) 対応するアイヌ語は書かれていない。  
(589) 対応するアイヌ語は書かれていない。  
(590) 調査項目が空欄である。「レキ」と書き、右側に「ヒケ」と書いてある。また、「レキ」の上に「エ」と書き、それを線で消して「レキ」としている。また、「ヒケ」の上に三文字書いてあるが線で消してある。

髻、	エレキヒ。ソノヒゲ	東	バナオロ <sup>(600)</sup> 、下ノ方
脚、	ウッチカマ <sup>(591)</sup>	西	キムオロ、山ノ方
股、	オメアニ <sup>(592)</sup> 。	南	コエボコオロ <sup>(601)</sup> 、コエボコ 海岸ノ下ノ方
臍、	ハンカブイ。	北	コエガ、オロ <sup>(602)</sup> 、海岸ノ上ノ方
ヒジ <sup>(593)</sup>	シットケエ	春	パイカラ、(パイ)年 (カラ)作ル
骨、	ポ子。	夏	サク、
血、	ケム。	秋	チュク、
涙、	ラーシ。 <small>ナクコト</small>	冬	マタ、
頭、	バケ	風、	レラ。
唾	ノン	雪、	ウバツス。
オトカへ <sup>(594)</sup>	ノチキリリ	雷、	カンナ・カムイ <sup>(603)</sup>
モヽノツケネ <sup>(595)</sup>	オンクリスツ	虹	ライヨ、チ <sup>(604)</sup> ライヨ 大ナル 通常テナイ
落涙ヲ	シキヒワ・ワッカ、オヘツケ <small>コボレル</small>		カモ
足、	チキリ。	寒、	メアン
目、	シキヒ。	暖、	<small>世ノ</small> シリ・ポ <small>ヌクイ</small> フケ、
口、	チヤロホ。	月、	クンネチュプ 明星 チュプカムイ <sup>(605)</sup>
耳、	キサラ。	地震、	<small>動</small> シリ・シモイ
眉、	ランヌマ <sup>(596)</sup> 。	冷氷 <sup>(606)</sup> 、	ヤンム
頰 <sup>(597)</sup> 、	オナンズ	雲	ニス
指、	アシケベチ	霧	ウラリ
膝、	コッカバケ。	雨、	ルヤンベ。
腹、	ホニ。	氷、	コンル <sup>(607)</sup>
胸、	ペンラムフ <small>胸骨</small> ニンケエ・へ。	雷、	イメル <sup>(608)</sup>
肩、	クーケエ。	光、	ヌベキ <sup>(609)</sup>
掌、	テッコトロ	晴、	シリヒリカ
鼻汁 <sup>(598)</sup>	鼻血、エトウーケムクシ。	星、	ノチウ
大便、	シ。	日、	旭 シリペケリ チュプカムイ <sup>(610)</sup>
臀	オシヨロ 忍路高島等地名	水、	ワッカ <sup>(611)</sup>
小便	オクイマ	湯、	ウセイ
霜、	タスコロ、		
雹 <sup>(599)</sup>			

(591) 「アイヌ語単語集」にこの語の記録はない。

(592) 「オンクリシュ」と書いて、「ンクリシュ」を線で消して「オ」の下に「メアニ」と書き、「オメアニ」と読める。

(593) 項目の欄にルビのように小さく「ヒジ」と書いてある。

(594) 項目の欄にルビのように小さく「オトカへ」と書いてある。

(595) 項目の欄にルビのように小さく「モヽノツケネ」と書いてある。

(596) 「ラ」と「ヌ」の間に「ン」を書き足しているように見える。

(597) 「アイヌ語単語集」にこの語の記録はない。「エナックリ。」という文字を線で消して「オナンズ」と書いてある。

(598) 「鼻」と「汁」の間に「血」と書いてある。

(599) 対応するアイヌ語は書かれていない。

(600) 「アイヌ語単語集」にこの語の記録はない。

(601) 「アイヌ語単語集」にこの語の記録はない。

(602) 「アイヌ語単語集」にこの語の記録はない。

(603) 「アイヌ語単語集」にこの語の記録はない。

(604) 「ライ」の次の「」文字を消して「ライヨ、チ」と書いてある。

(605) どこを先に書いて、最終的に単語の形はどうなっているのか判断がむずかしい。まず、見出し語「月、」と書き、真下に「シリペケリ」と書き、これを線で消して、「チュプカムイ」としている。「月、」の右下、「クンネ」と書き、「クンネ」を枠外の「チュプ」と線でつないでいる。「シリペケリ」の右に「明星」と書いてある。「クンネ」の下に「明星」と書いてある。

(606) 「氷」あるいは「水」に見える。

(607) 「アイヌ語単語集」にこの語の記録はない。

(608) 「エメル」と書き、エを消して「イメル」と書いてある。

(609) 「アイヌ語単語集」にこの語の記録はない。

(610) 「アイヌ語単語集」にこの語の記録はない。「日、チュプカムイ」の右側に「旭 シリペケリ」と書いてある。

(611) 「アイヌ語単語集」にこの語の記録はない。

暑	セセッキ 火ノ	真直ニナツタ <sup>(622)</sup> 、	イーカアン、(イカン別村)
動クモノ	モイモイケ <sup>(612)</sup>	イカン <sup>(623)</sup>	
山、	ヌブリ、	跡ヲ遂テ行ク、	ウルエカリ <sup>(624)</sup> 、(売買村)
川岸	ベツチャ、	「ウレイ」跡、	「カリ」シトウ、)
濱	ルルサンム <sup>(613)</sup> 、	思案シテ見ヨ、	サンニヨ、ワ、インガリ <sup>(625)</sup> 、
温泉	ユウ	相談、	ウコ、サンニヨ、
海	アツイ、	議論、	ウコ、チャランケ、
波	コイ、或 カイベ <sup>(614)</sup>	何デスカ、	ネフタタ、
波音	コイフム <sup>(615)</sup> 、フム 音	胡坐セヨ、	モナ、アンー <sup>(626)</sup> 、キモセレ
砂原	リテン、オタ、	リテン 柔カ	坐セ <sup>(627)</sup>
石	スマ	正座セヨ、	コツカイアー
泥	テリンネ、	拭へ、	ピリバ、
土	トイ、	洗フ、	ピリカンウライ <sup>(628)</sup> 、
白	レタル、		
黒	クンネ、	云フ	エエ
赤	フウレ <sup>(616)</sup> 、	告クル	イオシ、エエ
紅	シユニン <sup>(617)</sup> 、	静ニセヨ	ツウシテキワアン
青	フウキナネ <sup>(618)</sup> 、	騒ゲ	エチアエ・エンルイカヤン <sup>(629)</sup>
黄 <sup>(619)</sup>		逃ケヨ	キラ
紫 <sup>(620)</sup>		止マレ	アシ
老婆	フジ 親類ノ 老女 <sup>老</sup> ルツクネマツ	後へ向ケ	シオシマケ、エン シキル <sup>(630)</sup>
老人	エカシ 親類ノ 老人 <sup>年頃</sup> チャチャ	一向	
娘	シクプメノコ、	能ク聞ケ	ピリカンイヌ
青年	シクプクル、	悲シキ	エラムボケン
男児	オツカイ、	恐シキ	クシトマ
女児	メノコ <sup>(621)</sup>	楽シキ	エネウサラ
ムカ	鷓河	了解シタ <sup>(631)</sup>	
今日ハ、	イシ・オロレイ、	覚タ	ク、エラムアン
左様ナラ、	ピリカアン、(ピリカン)	忘レル	ク、オイラ <sup>(632)</sup>
気ヲ附テオ出デ、	ピリカオマン、	思出ス	ク、エスカルウン <sup>(633)</sup>
		逐フ	ク、ノスバ <sup>(634)</sup>

(612) 調査項目の上方、欄外に書いてある。この記述のあとは、地名のメモが書いてある。  
(613) 「アイヌ語単語集」に「る」のページがない。  
(614) 「アイヌ語単語集」に「か」のページなし。  
(615) 「アイヌ語単語集」にこの語の記録はない。  
(616) 「アイヌ語単語集」「ふ」にこの語の記録はない。  
(617) 「アイヌ語単語集」「し」にこの語の記録はない。  
(618) 「アイヌ語単語集」「ふ」にこの語の記録はない。  
(619) 対応するアイヌ語が書いていない。  
(620) 対応するアイヌ語が書いていない。  
(621) この次のページから、地名のメモ書きがある。メモを整理して「十勝地名考」を書いたと思われる。  
(622) 欄外に「物、人ニアラス」と書いてある。「真直ニ行ケ」と書いたのを「行ケ」を線で消し「ナツタ」と書いてある。  
(623) ここに「イカン」を表すと思われる図が描いてある。  
(624) 「ウレイカリ」と書き、「ウレイ」を丸で囲んで「エ」と書いてある。また、「ウレイ」の上に「ウル」と書き、全体で「ウルエカリ」と読める。  
(625) 「アイヌ語単語集」の「さ」の項にこの語の記録はない。  
(626) 「モナ、アー、」と書いて、「ア」と「ー」の間に「ン」を書いたように見える。  
(627) 「モナ、アンー、」をひとくくりにして線を伸ばし「坐セ」と書いてある。  
(628) 「ピリカ」と「ウライ、」のあいだに小さい「ン」が書いてある。  
(629) 「アイヌ語単語集」に記録はない。  
(630) 「アイヌ語単語集」の「し」にこの語の記録はない。「シオシマケ」までをひとくくりにして「後」と書いてある。「シキル」から線を引き「向」と書いてある。  
(631) 対応するアイヌ語は書いていない。  
(632) 「アイヌ語単語集」「お」「く」には記録なし。  
(633) 「アイヌ語単語集」「え」「く」には記録なし。  
(634) 「アイヌ語単語集」「の」「く」には記録なし。

蜚ブ	ク、ホユブ <sup>(635)</sup>	クレ <sup>(648)</sup>	
隠ル	ク、シヌイナック <sup>(636)</sup>	結婚	アマチ、コレ、 呉レル、エ、 <sup>私</sup> シチ、 マチコレ
見出ス	ク、バ	休ム	復 シニアン、 単 クシニ、
并ブ	ウテキサムウン	働ク	モンライケ
離レル	ウカトウエマ <sup>(637)</sup>	怠ル	サウレ
重ナル	ウカオ	呵ル	コイルシカ
轉ガス	カラカセカ <sup>(638)</sup> 、	賞ル	オトウワシ
倒レル	ハツリ	侮ル	エコックカレ
樹テル	アシ	誹ル	<sup>ソウスル 物</sup> エネ イ、キイ
横	トモツエ	賢	ラム、アン、 又ハ ラマチコロ
縦	ベシ	愚	エコツカ ハイタ (足ラヌ) クル <sup>(649)</sup>
右 <sup>(639)</sup>		和睦	ウヤイコチャ、 ココアン
左 <sup>(640)</sup>		絶交	ウトモイアン
待テ	<sup>我 マテ</sup> エネフエ	決心	アリ・ソソノ・クヤイヌ、
東 <sup>(641)</sup>		安心	ク、ヤエシオロ
西、 <sup>(642)</sup>		不安心	ク、タライバ、
南、 <sup>(643)</sup>		仲裁	ハウツルン
北 <sup>(644)</sup>		ケンクワ <sup>(650)</sup>	ウコエケ
地 <sup>(645)</sup>		不具	オシルシ
天 <sup>(646)</sup>		盲	シキガク ガク 無
晝	シリベケリ	聾	アシバ
夜	クンネ	啞	エタキエ、 アイカブ アイカブ 出来ナイ
朝	クンナノ クライ ツ、キ	チンバ	オニチ
夕	オヌマン		
同伴スル	エチトウラアン	交換	<sup>汝ト我ト</sup> アヌエ、 <sup>バクル</sup> オカラ
病氣	イウニン <sup>(647)</sup> (イ) 汝トカ物昧 (ウニン) ササル	勝ツ	ク、エイカウヌ <sup>(651)</sup>
重キ	パセ	負ル	ク、イラポクカリ <sup>(652)</sup>
軽キ	コシネ	渡ル	トモツエ
全快	ビリカ	泳グ	マ
死ス	ライ	流ル	モム
出産	エホネ	洪水	<sup>山カラクル</sup> オキン <sup>モノ アル</sup> ベ、 アン
		荒川	チエユプケ <sup>(653)</sup>
		大川 <sup>(654)</sup>	

(635) 「アイヌ語単語集」「ほ」「お」(十勝方言では hoyupu または oyupu)、「く」に記録なし。  
(636) 「アイヌ語単語集」「し」「く」に記録なし。  
(637) 「ウカトウエマ」としたが、「エ」の部分が上書きされており、「エ」あるいは「エ」の判断がつかない。  
(638) 「アイヌ語単語集」に「か」の項目がないため、この語の記録はない。  
(639) 「右」と書いて線で文字を消してある。  
(640) 「左」と書いて線で文字を消してある。  
(641) 「東」と書いて線で消して、調査項目「待テ」としている。東にあたるアイヌ語の記載なし。  
(642) アイヌ語の記載なし。  
(643) アイヌ語の記載なし。  
(644) アイヌ語の記載なし。  
(645) アイヌ語の記載なし。  
(646) アイヌ語の記載なし。  
(647) 「アイヌ語単語集」「い」には記載なし。  
(648) 「アマチ・コレ」と書き、「コレ」の右側に「クレ」と書いてある。「アマチ・コレ」の下に「呉レル、」とある。  
(649) 「ハイタ」以下は薄い文字で記録されている。文字が黒色ではなく、青い色に見える  
(650) けんかという漢字を途中まで書き、その右側にカタカナで「ケンクワ」と見出し語を書いている。  
(651) 「アイヌ語単語集」「く」「え」にこの語の記載なし。  
(652) 「アイヌ語単語集」「く」「い」にこの語の記載なし。  
(653) 「アイヌ語単語集」「ち」「ゆ」に記録なし。  
(654) 対応するアイヌ語を書いていない。

緩川 モーベツ  
 仲善シ ウコ、アン、ラマチテアン  
カラ ヨイモノ  
 友人 エクリル、シリネ、クラムクル  
兄弟 様 思 人  
 気カ合フ クラム、オシマ、  
我 思 様  
 短気 サンベ・タックネ  
氣  
 落附ク ラムシロマ<sup>(655)</sup>  
重  
 柔和 チヤシマ  
 食 エ  
 飯 エイベ  
アム  
 喫 ク、イ  
 タク スエ<sup>(656)</sup>  
 燃ヤス ウファイカ<sup>(657)</sup>  
 消ユル ウス  
 人 クル

太 ルエ<sup>(658)</sup>  
 細 アネ  
汝ノ処 助 ケル  
 世話スル エカ、ク、オイキ 助ケル  
 宿泊スル レウス  
 起ル オブニ クンナノ オブニ 朝起  
 用向 ク、ヤエ、サンニヨ  
 何卒 ネコナボカイ、  
 願 ク、ヤエ、ニンコロ、  
 入用 クコン、ルスイ、  
 不用 クコレトランネ、  
道 理  
 此ノ通り タアンベ、ネブコン  
 間遠 ヤイコツカレ  
 健全 ビリカ  
 然リ アンベネワ  
カラ  
 夫ヨリ オロワ

謝ス<sup>(659)</sup> ヤイライケ ヤーレキリ  
 客 アッチ、ウン、クル<sup>(660)</sup>  
外 ノ 人  
 主人 チセコロ、クル<sup>(661)</sup>  
 神ト同シキ人 カムイネアン、クル<sup>(662)</sup>  
様  
 濁酒<sup>(663)</sup> チカラ サケ  
我 造  
 幣束 ヌサ  
 供儀 カムイ ノミ<sup>(664)</sup>  
□□ 供ル  
 フキ コロコニ  
 ワラビ ツワ  
 ゼンマイ<sup>(665)</sup>  
 コトミ ソロマ<sup>(666)</sup>、ソ □□ ロマ オクモノ  
 ウド チマキナ、我ノ マヤ□艸<sup>(667)</sup> キナ艸  
魚  
 アヤメ ウチェベウコテ ツナグ  
 オミナベシ<sup>(668)</sup>  
 キキヤウ ムツク シンドク<sup>(669)</sup>  
木  
 ツツジ ニイカレップ<sup>(670)</sup> 丸クナルモノ  
 ハキ シンケップ  
 タンホコ マカヨ マカ明ケル<sup>(671)</sup> ヨ物  
サツ  
 ヨメナ<sup>(671)</sup>  
 ナズナ<sup>(672)</sup>  
 ユリ バララ  
 クリン草<sup>(673)</sup>  
 フクシュ艸 ツライムン エトノ ムン草  
 ミツバ<sup>(674)</sup>  
 ヨモキ ノヤ  
 ナナツバ<sup>(675)</sup>  
 イタドリ<sup>(676)</sup>  
 オバコ<sup>(677)</sup>  
 トラノヲ<sup>(678)</sup>

(655) 「シロマ」に線を引き、「重」と書いてある。  
 (656) 「アイヌ語単語集」に「す」の項目がないため、この語の記録がない。  
 (657) 「アイヌ語単語集」「う」にこの語の記録なし。「ウ」の下の字に上書きをしており、「ク」のようにも「フ」のようにも読める。ここではウファイカとしておく。  
 (658) 「アイヌ語単語集」に「る」のページなし。  
 (659) 「謝ス」の上、欄外に「ヤーレキリ」と書いてある。  
 (660) 「アッチ、オン、クル」と書き、「オ」を消し「ウ」と書いてある。  
 (661) 「チセウン、クル」と書き、「ウン」を消し「コロ」とし、「チセコロ、クル」と読める。  
 (662) 「アイヌ語単語集」に「か」のページがないため、この語の記録はない。「ネアン」をひとくりにして、「様」と書いてある。  
 (663) 「酒」と書き、「酒」という字の上、欄外に「濁」を書き、「濁酒」と見出し語を立てている。  
 (664) 「アイヌ語単語集」に「か」のページがないため、この語の記録はない。  
 (665) 対応するアイヌ語の記録はない。  
 (666) 「アイヌ語単語集」に「そ」のページがないため、この語の記録はない。「ソ」に対する日本語は「シク」のように読める。「レリ」「レク」のようでもある。「ロマ」を「オクモノ」。  
 (667) 「リ」のように読める。また他の箇所の「ク」と似ていることから、「ク」かもしれない。「チ」を「我ノ」、「マ」を「ヤク」、艸と書いた可能性がある。  
 (668) 対応するアイヌ語は書いていない。  
 (669) 「アイヌ語単語集」「む」にこの語の記録なし。「ムツク」をひとまとめにしてある。  
 (670) 「カレップ」をひとまとめにして、その下に「丸クナルモノ」と書いてある。  
 (671) 対応するアイヌ語名なし。  
 (672) 対応するアイヌ語名なし。  
 (673) 対応するアイヌ語名なし。  
 (674) 対応するアイヌ語名なし。  
 (675) 対応するアイヌ語名なし。  
 (676) 対応するアイヌ語名なし。  
 (677) 対応するアイヌ語名なし。  
 (678) 対応するアイヌ語名なし。

スマレ<sup>(679)</sup>

キ シロ

ワ タ

オッタ ニ

エン ヘ

コトムアン ソウダ

ナンコロ デアロフ

ネ カ<sup>(680)</sup>

四足動物

我チー

チ、コエキツプ<sup>(681)</sup> 吾人□捕獲スヘキ物

コイ<sup>(682)</sup> キツプ  
ケモノ 物

水牛<sup>沖</sup> レブン、カモイ<sup>(683)</sup>

狼<sup>フキ ワラ線 亡者</sup> ホル、ケウ、カモイ フキ原ニテノ凡テ  
ノモノヲ殺ロス者

狐<sup>我 コロス タ□</sup> チ、ロン ノ ップ、カモイ

兎 エソーポ、

犬 シタ シタコロベ<sup>(684)</sup>

牝犬 マツネ、シタ マツネ 妻ニナルベキ

牡犬 ピンネ、シタ ピンネ 四足ノ男ノ総称

小犬 ポー、シタ

熊 キムン、カモイ<sup>(685)</sup> キムン、山中

水獺 エシヤマン、

膾肭臍<sup>(686)</sup>

海豹 ツウカラ、

黄鼠<sup>チン</sup> ホイヌ

木鼠 ニウエオ、ニ□ 木ウエオ 蜚ウツル

鼠 エルムン、エ、食 ル・ムン 忍ブ

狸 モユック、モ、ニケザル ャック 鹿

鹿 ャック、

牝鹿 モマンベ、モ、ニゲサル マウ、香氣、  
ベ モノ

牡鹿 アプカー、

ポナプカー、小ナル アプカー

<sup>今年</sup> タンバ、ユック コトシノシカ 角新シキ小キ

モノ

ピンネラウ □モセス大クモナラズ 三寸位ノ  
角アルシカ

シマ鼠、 エベ・シロ エベ縦 シロ、シマ

鳥 チ、カツブ

雀、<sup>穀物食</sup> アマムエチカツブ

鳥、 パスクロ<sup>(687)</sup> パス 炭 クル 物

ハト クキシユエ<sup>(688)</sup> ナキコイ

シギ リヤ、チビヤク、 リヤ 越年スル チビヤク  
鳴声

鶴 サロ、ルウン、カモイ サロ ヨシ オルウン  
ニ 居ル

白鳥 レタツチリ レタリ 白色 チリ 鳥

豚木鳥<sup>(689)</sup> エソクソキ 斑文アル方

シルシ、チリ 紅色ノ方 シル、シ

<sup>シル</sup> 晴雨ノ前兆ヲ案内スル

梟 コタン、コロカモイ 國ニ持ツカモイ<sup>(690)</sup>

鶯<sup>生殖器 ツク</sup> ポウポキチウ 鳴声

杜鵑 ペベケリ、チウ 鳴声

拙老婆<sup>(691)</sup>

雲雀 トメンビロ

カモ ウヲルウン、チカツブ<sup>河中</sup> ウ<sup>ニオル</sup> ヲルウン

鶯 カバツチリ、羽根ヲカブセル。チリ。トリ

鷹 チカツブ・コキシツプ、捕フル

(679) 対応するアイヌ語名なし。

(680) このページの次は地名のメモ書きであり、今回は翻刻の対象とはしていない。

(681) 「アイヌ語単語集」にこの語の記録はない。「講義原稿」「獣類」にも「チ、コエキツプ」とある。「チ、コエキツプ」と書き、「ケ」を消して「キ」と書き、全体で「チ、コエキツプ」と読める。

(682) 原文は縦書きで、「チ、コエ」の「コエ」の左側に「コイ」、「ケモノ」と書いている。また、「チ、コエキツプ」の「キツプ」の左側に「キツプ」「物」と書いてある。

(683) 「レブン」の「レ」の上から線を引き、「沖」と書いてある。

(684) シタコロベとある。「コロ」に「持」、「ベ」に「物」と書いてある。

(685) 別の箇所、クマ「キンムカムイ」と記録されている。

(686) 対応するアイヌ語は書いていない。

(687) 3文字目を消して「ロ」と書き、「パスクロ」としている。

(688) 2文字目を消してキと書き、「クキシユエ」としている。

(689) 「豚木鳥」をさしていると思われる。「豚」は「啄」であろう。

(690) 「國ニ持ツヘキツカモイ」と書き、「持」以降3文字分消してあるように見える。「國ニ持ツカモイ」であろうか。

(691) 対応するアイヌ語は書いていない。

鳶 ヤドツタ<sup>(692)</sup>、  
 厂 クキトック、  
 ホトトギス<sup>(693)</sup>

十勝地名考<sup>(694)</sup>、

廣尾、 ヒロワ、  
 ピロロ、 (ピ)「ヒリカ」 好キ也、(ロロ) 足場也、  
 濱ヨリ高台ニ登ルニ足端ノ好キ意、  
 當縁、 トウブイ或ハトウベリト通称ス、  
 トープイ、(トー) 沼也、(プイ) 尻也、沼尻也、  
 茂寄、 モヨリ、

モイオロ、(モイ) 湾曲セル、(オロ) 処也、陸地  
 ノ湾曲シ海水ノ入レル処即港湾也、

歴舟、ベルフネ、<sup>(695)</sup>

[ ]

(ナイ) 澤也、山澤ヨリ水ノ滴リテ太ク流ル、意  
 大樹、 タイキ、  
 (タイキ) ノミ也 「タイキコタン」ト称シノミノ多  
 キ村落也、

イタラタラキ、

(イ) 上部、(タラタラキ) 凸凹也、丘陵ノ凸凹セ  
 ル処ノ意

幸震、 シヤチナイ、

(サツ) 乾ク也、(ナイ) 河或澤也、時々乾ク河、  
 鶴抜、 ヌエヌンキ、

ムイネフンキ、(ムイ) 木製ニシテ湾形ニクリシモ  
 ノニテ (ミ) ノ代用ヲナセルモノ、

(ネ) 如キ也 (フンキ) 高台ノヤ、低キモノ、

(ムイ) ノ如ク凹メル高台也 神話アリ

戸葛、 トツタ、

トオツタ、(トオツ) 日中也 (タ) ニ也

日中ニ変事アリシ意、

賣買、 ウレカレップ

ウレイカリッパ (ウレイ) 足跡也 (カリッパ)

慕フ也 或物ノ跡ヲ慕フテ行也、

帯廣、 オビヒロ、

オベリベリッ (オベリベ) 意中ノ情婦也

(リッ) 慕也 情婦ヲ慕フテ回り遇シ処

荊苞、 バラトウ、 [ ]

伏古、 フシコ、  
 フシコ、古キ也 (フシコベツ) ハ 古河也、  
 然別、シカリベツ、又土狩、

(シカリ) 丸形也 丸形ノ沼ヨリ流出セル河  
 美生、 ビバイロ、

(ビバ) 黒キ大ル貝、(ロ) 通路也

美蔓、 ビバウシ、

(ウシ) 多クアル場処也 貝ノ多キ処也、

音更、 オトフケ、

(オ) ニ也 河ノ曲リ多キ意 (トフケ) 曲也、

虫類、 チウルイ、

チウルエ、(チウ) 流也 (ルエ) 太キ也

太キ流也

旅来、 タビコライ、

(タブコ) 土ヲ盛テ凸キ処、(ライ) 死也、墓地也

蓋派、 ケナシバ、

(ケナシ) 林也 (パ) 頭也 林ノ上方也、

長白、

オサウス、山の突き出志た山

大津、

オオツ 深

芽室、

(ミム) サク、オロオ 入レシ処

蝶伏、 チョブシ、

チオブシ (チ) 我也 (オブシ) 破也切り開ク也、

河海ニ注ク処常涛ノ為土破ニテ埋メラレタル処ヲ切  
 リ開クト云フ意

蝶多、 チョタ、

(チ) オタ<sup>(696)</sup>、

我等ノハマ

土幌、 シヒロ、

スウオロオ<sup>(697)</sup>、(シウ) 鍋也 (オロオ)

投入也

傳説他ノ「コタン」ノ土人ノ一群一ノ河岸ニ於テ鍋ヲ  
 以テ食物ヲ焚キツ、談ヲ曰ク、カゝル時猷ノ来襲ニ遇

ハ、鍋ト共ニ吾々ハコノ流ニ授シ死セサルベカラス  
 ト、果シテ敵ノ来襲スル処トナリ共ニ河ニ投セシ処ナ

リ云々

浦幌、 ウラホロ、

オロポロ、(オロ) 内部也、(ポロ) 廣キ也大也、

(692) 「アイヌ語単語集」「や」にも「アイヌ語講義原稿」「鳥類」にもアイヌ語の記録はない。

(693) 枠外に「ホトトギス」と書いてある。アイヌ語は書いていない。

(694) 「十勝地名考」は、「アイヌ語講義原稿」のNo3.の次にとじてある。「アイヌ語講義原稿」を区切らず整理するためここに移動した。

(695) 用紙のねじれにより、次の一行は判読不能である。

(696) 「オ」と「タ」の間に「ヨ」の字が書いてあるが、消してあるようにも見える。「ヨ」の字の右側に1文字分の線が引いてあり、「チオタ」あるいは「チオータ」と書いてあるのか、判読が難しい。

(697) 「シウオロオ」と書き、「シ」の右に「ス」と書いてある。「シ」を消してあるように見える。吉田(1970:30)に「昔、イクカツミ(略奪戦)の行われた遺蹟が地名に結びついたので処々にある」とし、「スオロ(今の土幌)は北見アイヌなどが、不意を討たれて、あわてて器具調度を捨てて逃げ去る時、鍋を川の中に捨て去った処。スは鍋。オロは水に入れたる意である。」と記録されている。

内部ノ廣ク大ナル処、  
 ウップベツ、  
 (ウップ) 白子也 河水混濁シテ魚ノ白子ノ如キ  
 色ヲ呈ス、  
 ウシシベツ、  
 (ウシシ) 爪也 或物ノツメノアリシ河  
 モケナシ、  
 (モ) 留マル也滞ル也、林ノ為ニ風等ノ滞リ殺ケル  
 処? 或ハ或獸類ノ群リ留マル意?  
 ポンケナシ、  
 (ポン) 小也 小サキ林也  
 茂岩、モイワ、  
 (モ) 留也滞也 (イワ) 小キ山也、山ノ為ニ風或ハ  
 獸類ノ滞リ留マル処  
 豊頃、トヨコロ  
 トップヨオカー、(トップヨ) 古代人ノ住ミシ、  
 (オカー) 跡也、古代部落ノアリシ処、  
 唖別、イカンベツ、イーカアン、(イーカ) 曲ルベキ  
 ヲ直線ニ、(アン) 行ク也、  
 新徳、シントク、  
 三足ノ丸形ノ器具也、高台ノ形「シントク」ニ似タリ、  
 ペッポー  
 (ベツ) 河 (ポー) 子也、河ノ子即支流  
 止若、ヤムワカ、  
 ヤムワッカ、(ヤムム) 冷也、(ワッカ) 水也、  
 冷水也、  
 利別、トシベツ  
 (トシ) 縄也 コノ河蛇多シ故ニトシベツト云フ  
 白人 チロット  
 チオットー 我等ノ居ル沼  
 音更 オトフチ<sup>(698)</sup>  
 (オ) ハ下ノ部 (トフケ) 曲ル

## 5 アイヌ語十勝方言について

アイヌ語全体の中での十勝地方のアイヌ語について先行研究をみていくこととする。

### (1) アイヌ語諸方言の概要

アイヌ語研究の第1人者であった田村すゝ子の記述によると、

アイヌ語は、カラフト方言、千島方言、北海道方言に大きく分けられる。北海道方言はさらに北東部と南西部

に大きく分けられ、十勝方言は、北海道北東方言の下位方言<sup>(699)</sup>とされている(田村1997:2)。

アイヌ語の地域による差については、北海道南西部と北東部のアイヌ語は文法上は大きな違いはみられないものの、語彙、音韻、語形成などに多少の差がある(田村1997:1-2)という。

### (2) 十勝方言の調査研究について

昭和30年、服部四郎・知里真志保により、帯広を含む北海道で調査がおこなわれた(服部・知里1960:308)。また、広く道東で民族誌の調査を記録した更科源蔵らによる調査が報告されている。ここでは、特に以下の研究についてとりあげる。

#### (2)-1 吉田巖『北海道あいぬ方言語彙集成』

十勝地方でアイヌ語を調査した人物として、吉田巖(1882-1963)が挙げられる。吉田は、福島県に生まれ、25歳から十勝管内、虻田小、日高国荷負の各土人学校の教員を勤めた。教員として勤務し、膨大な量のアイヌ語アイヌ文化の調査研究をおこなった。採録した資料は、帯広市教育委員会から叢書として発行され、日高、釧路、十勝で採録した語彙6000余からなる『北海道あいぬ語彙集成』が公刊されている(吉田1989、復刻版2005)。『語彙集成』は、明治39年から47年間吉田が直接アイヌから採取した語彙を集めたものである(吉田1989:同書まえがき)。

#### (2)-2 浅井亨による十勝方言の先駆的研究

浅井亨は、上川地方の日常語を中心として『アイヌ語の文法—アイヌ語石狩方言文法の概略—』(1969)を発表している。

浅井は、文法を発表した上川地方のアイヌ語に加えて十勝、白糠の話者からも聞き取り調査をしており、それらの地域に伝承されていた口承文芸の対訳などを多く発表している。

「十勝のアイヌ語」(浅井1993)を執筆するにあたり、十勝の歴史的な時代区分をマクタ(遠い昔)、テエタ(比較的に近い昔)、タネ(この十数年くらいの最近)に区分し、以下のように記述した。

#### 【タネ】

「昨今では、元からの十勝の言葉を話せる人が少なくなってしまい、日常生活においては十勝のアイヌ語がほとんど使用されない状況になってしまった。そのために特定の表現が個人語と呼ばれる個性的なものなのか、元来の十勝川筋の方言なのか決め手がない有様である」(浅井

(698) 「オトフチ」と読める。意味に(トフケ)と書いてあることから、「オトフケ」と書いたのかもしれない。

(699) 田村によれば、北東部というのは、宗谷から西海岸を、天塩、石狩と南下し、東海岸は、北見、根室、それからクナシリ、エトロフなどを含み、太平洋に出て、釧路、十勝、襟裳から静内あたりまでの地域である。残りが西南部である。

1993 : 339-340)。

また、十勝方言と他の方言との類似性について以下のように記述している。

【アイヌ語十勝方言】

(…前略) 十勝の言葉は釧路、上川方面と共通する点が多く共に北海道北東方言を形成し、北海道南西部の方言群と対立するものとみなせる。語彙的には日高地方の南東部ともかなりの共通点が認められるが、十勝方言は釧路地方と極めて近い関係と思われる。また語彙ばかりでなく、語句の構成成分の構造から上川地方の言葉とも共通する点が多い。(後略) (ibid. : 340)

(2) - 3 田村すゞ子による語彙調査

田村すゞ子(当時は東京大学大学院生、旧姓・福田すゞ子)が、基礎語彙調査のために帯広市に広野ハルさんを訪れたのは昭和 31 (1956) 年である。1ヶ月にわたり調査をおこない、その際の調査結果は、1964 年『アイヌ語方言辞典』(服部四郎編) に帯広方言の語彙として報告されている。言語学者による十勝方言の調査結果として早い時期のものであり、かつ貴重な基礎資料となっている。

2005 年、広野ハルさんに調査をおこなった際の手書きノート 6 冊を元に『アイヌ語帯広方言の資料 : 田村すゞ子採録 広野ハルさんの基礎語彙調査資料』が、田村と報告者との共編として刊行された。報告者による索引のデータベースシステム開発により、索引項目の総数は 3,600 語であることが報告されている(沢井 2005 : まえがき)。

(2) - 4 本別町での調査研究

村崎恭子が「第二次基礎語彙調査表(東京大学言語学研究室編 1956 年)」を用いておこなった調査の報告書として、1983『アイヌ語基礎語彙集(東別方言と本別方言)』が刊行された。調査地は、静内東別<sup>(700)</sup>と十勝本別である。本別方言での調査は未完であるものの、初期の調査として貴重な資料である。

切替英雄による調査研究

切替英雄 1996「アイヌ語十勝方言による昔話「島を引いて泳ぐオタスの少年の物語」の辞典と文法(1)」

切替英雄 1998「アイヌ語十勝方言による昔話「島を引いて泳ぐオタスの少年の物語」の辞典と文法(2)」

十勝地方のアイヌ語研究は、切替を中心に行なわれてきた。その中でも tuytak と呼ばれる物語にあらわれる

語や句を(1)で整理、分析をおこなっており、十勝地方のみならず、北海道東部のアイヌ語には欠かせない文法書となっている。特に、不定人称接辞 a-, an- が、後続する単語のアクセントの位置によって使い分けられるという重要な発見を報告している(5(3)-2 主格人称接辞で後述する)。続く(2)でも文法記述をおこなっている(切替 1998)。人称代名詞、人称接辞の整理や、

1 文と節 2 動詞・動詞句 3 名詞・名詞句 4 副詞・副詞句 5 副助詞について記述をまとめている。アイヌ語のアクセントについて、北海道アイヌ語では多くの方言でアクセントの対立があるとされている(田村 1997 : 7)。切替は、十勝方言における声門閉鎖音とアクセントの関係について重要性を指摘し、アクセントのない音節 h- はアイヌ語祖語において声門閉鎖音と交替するという仮説を提示した(切替 2021 : 125-126)。

澤井春美編 2006『アイヌ語十勝方言の基礎語彙集一本別町・沢井トメノのアイヌ語』は、採録した基礎語彙 2052 語について報告している。

また、高橋靖以(2014、2018)は、本別での聞き取り調査で得られた資料を用い文法研究や日常会話の整理をすすめている。

(3) 山縣資料のアイヌ語

山縣資料と現在知られている十勝のアイヌ語との比較をする。

(3) - 1 人称代名詞

山縣資料に記録されている人称代名詞

1 人称単数	くらに (私、自分)
1 人称複数	ちわかい (我等)
2 人称単数	いやに (貴様)
2 人称複数	
3 人称単数	
3 人称複数	
不定人称	あのかい (貴殿)

本別の人称代名詞<sup>(701)</sup>

1 人称単数	kuani
1 人称複数	ciokay / ciutari
2 人称単数	eani
2 人称複数	eciokay / eciutari
3 人称単数	anihi
3 人称複数	okay <sup>(702)</sup>
不定人称	anokay / anutari

(700) 村崎による「はしがき」によると、調査協力者は葛野辰次郎さん(明治 43 年 4 月 10 日東別生まれ)である(村崎 1983 : 5)。

(701) 澤井(2005 : 59)による。

(702) 高橋(2018 : 9)による。

山縣資料に、上記の通り4種の人称代名詞が記録されている。全てが揃っているわけではないが、田村による帯広での調査報告（『アイヌ語方言辞典』服部編 1964；沢井・田村編 2005）、報告者による本別での報告（2006）と異なっていない。

### (3)-2 主格人称接辞

山縣資料

	他動詞	自動詞
1 人称単数	くー <sup>(703)</sup>	
1 人称複数		ーらゑ <sup>(704)</sup>
2 人称単数	えー <sup>(705)</sup>	
2 人称複数	えちー <sup>(706)</sup>	
3 人称		
不定人称	らー <sup>(707)</sup> アー らね・やねとゐれ <sup>(708)</sup>	ーらん <sup>(709)</sup>

主格人称接辞（澤井 2005：59）

	他動詞	自動詞
1 人称単数	ku-	
1 人称複数	ci-	-as
2 人称単数	e-	
2 人称複数	eci-	
3 人称単数／複数	0（ゼロ）	
不定人称	a-, an-	-an

アイヌ語の人称接頭辞のうち、不定人称の a- と an- については、これまでに様々な状況で一人称を表すものとして議論が行われてきた。

浅井亨は、十勝方言の特徴として、

「特に目だつのは人称を表現する要素の中で「われわれみんな」という一人称包括複数を意味したり、「吾人」という不定人称を意味し、動詞や名詞などの語頭に接続する形式に「ア」と「アン」の二種類があり、前者は子音で始まる形式につき、後者は母音で始まる形式に接続することである。

と記述している（1993：340-341）。

浅井によるこの指摘をさらに詳しく分析したのが切替（1996：158-160, 167-168）であり、古文獻のアイヌ語資料の分析をすることにより、本別と同じ音韻的条件下で使い分けられてた方言が他にも存在した可能性を指摘した佐藤の研究（2005：42）や、他にアイヌ語の通時的、

共時的アクセントについての重要な議論を深める議論を進展させるものとなっている。

切替は、「ア」と「アン」が使い分けられる現象について以下のように分析している。

'a [人称接語] I 私；私たち（1 人称。数の区別はない。声門閉鎖音以外の子音で始まる他動詞、複他動詞、または、声門閉鎖音で始まる場合でも第1音節がアクセント核をなす他動詞、複他動詞の前に現われ、主語となる。また、同様の音節構造の名詞所屬形の前に現われ、所屬先を示す。これらの、動詞、名詞のアクセント核の一は変わらない。

'an [人称接語]（声門閉鎖音 [ʔ] + 母音で始まり、かつ第1音節がアクセント核でない他動詞・複他動詞・名詞所屬形、またそのような形の他の人称接語の前に現われ主語となるか所屬先を示す。そのさい、これらの語頭の声門閉鎖音がなくなり、'a の -n と声門閉鎖音を失った母音とで音節を作る。これらの他動詞などのアクセントの位置は変わらない。例：'an + 'aní → 'a | na | ní）

不定人称接辞 a- と an- は相補分布しており、声門閉鎖音以外の l1 の子音で始まる語、また、声門閉鎖音+アクセント核が第一音節にあつて母音で始まる他動詞、複他動詞、名詞所屬形には a- が接頭する。一方、母音で始まりアクセント核を第二音節に有する語には an- が接頭する（切替 1996；澤井 2005）。

佐藤（1995）の研究で、古文獻や自身による調査結果での方言における人称接辞 'a- と 'an- の分布が整理されている。佐藤は、'a- を用いる地域は、'an- を用いる地域に比べ、はるかに限定されており、概略的に言って、'a- を使用する地域は北海道の南西部といつてよい（佐藤 1995：29-30）と報告している。静内方言では、人称接辞として a-, an- が混在して用いられ、その使い分けは見出せない（Refsing 1981：160）と報告されている。

また、田村雅史による白糠方言の研究により、四人称で an- が用いられること、一部 a- が使用されること、a- は、a-ye 「～を言う」で最も観察される形式であり、また、e 「食べる」、o 「～を～に入れる」などの一音節の語や nukar, nise において稀に使用される（田村雅史 2011：82）という分析が報告されている。また、最新の研究においても新しいデータが提示されている（中川

(703) くらむれゑま=気の合ふを。「くらむ」我思う。

(704) りらきらゑ=我来た

(705) えころべ=汝の所持品。

(706) えちとらあん=同伴する。

(707) りぬねから=くゑげづる。a-nuykar, アヌウ 我々聞。a-nu.

(708) りね・やねとゐれ=我らに危険のもの、an-eyaytupare.

(709) といたらん=畑を耕さう

2024 : 168-169)。

「単語集」において a- アは以下の通り 4 例記録されている。

らねろっく a-e rok

らまちこれ a-macikore, a-matkore

らぬの a-nu no

らぬねから a-nuykar

an- アンについては、山縣資料にはアクセントの位置についての情報は含まれていないため、切替の仮説(1996)を検証することは難しい。ただし、a-, an- がなんらかの理由により使い分けられている現象をここで指摘する。

an- の例

an-oruspe らのるすべ

an-eyaytupare らね・やねとへれ

an-ueokkar らぬねろっから<sup>(710)</sup>

なお、an-koyki あんごいきのように、子音の前に an- が接頭している例が 1 例記録されている。

#### 目的格人称接辞

山縣資料の目的格人称接辞

1 人称単数 えねちうか<sup>(711)</sup>

1 人称複数

2 人称単数

3 単／複

不定人称 いおし<sup>(712)</sup>

本別の目的格人称接辞

1 人称単数 en-

1 人称複数 un-

2 人称単数 e-

2 人称複数 eci-

3 単／複 0- (ゼロ)

不定人称 i-

#### 主格・目的格人称接辞

山縣資料

主格 2 人称単複・目的格 2 人称単複

eci-siknuka-an らちしつぬからん 助ける

eci-tura-an, らちとららん 同伴する

eci-kore-an らちこれらん 品物を與ふる

本別

eci-ecakoko-an 私(たち)があなた(たち)に…を教える

eci-kore-an 私(たち)があなた(たち)に…をあげる

「アイヌ語単語集」には、上記に示したものとは別の人称接辞、「えんし 私」「えね 我」「えな オ前達」が記されている。

「アイヌ語講義原稿」に「待テ エネフエ」と記録されている<sup>(713)</sup>。「待テ」という日本語から考えると、ehuye という動詞に、目的格の人称接辞 エン en- が接頭し、en-ehuye 私を待つ、待ってください、という形が予想される。実際の発音は en-ehuye 「エネフエ」だった可能性があり、そこで「エネ」に「我」、「フエ」に「マテ」と理解し、「えね 我」と記録したと思われる。「えんし 私」と「えな オ前達」は不明である。

#### (3) - 3 親族名称について

アイヌ語の親族名称について研究を行なった中川は、以下のように記している。

「方言差が大きく、呼びかけに使える語と使えない語の区別もあり、また所有表現においても概念形構文をとるものと、所属形構文をとるものに分かれ、複雑な様相を呈している」(中川 2024 : 221)

親族名称については、報告者による調査が報告されている(澤井 2001)。山縣資料に記録されている親族名称は、これまでに報告されている十勝方言の参考資料とほぼ同じであるが、一部異なっている記述がみられる。

「アイヌ語単語集」「アイヌ語講義原稿」に記録されている親族名称は以下の通りである。

「アイヌ語単語集(ひらがな表記)」「アイヌ語・日本語」／「アイヌ語講義原稿(カタカナ表記)」「日本語・アイヌ語」／という順で記録されている形を載せる

また、( ) 内は本別で報告された語(澤井 2001)である。

おじいさん<sup>(714)</sup>

おばあさん

ふゑゝ 祖母／老婆 フジ<sup>(715)</sup> 親類ノ／(huci)

(710) 「アイヌ語講義原稿」「交換」を参照のこと。

(711) いるかいねちうか=待て。

(712) いゑまゑゑ=告ぐる。

(713) ただし、現在知られている十勝方言では、ehuye という語は確認されていない。「アイヌ語単語集」「え」の項を参照のこと。

(714) 「アイヌ語講義原稿」に「老人 エカシ 親類ノ」とあるが、親族名称として記録されていない。

(715) 沙流方言の huci の意味として、田村は、「①祖母(「まごばあちゃん」)、先祖の女性。kor huci の祖母。ku=kor huci 私の祖母。huci! おばあちゃん(呼びかけ) ②老婆、年配の女性」と記述している(田村 1996 : 207)。本別でも、このふたつが確認されている。「アイヌ語単語集」の「ふゑゝ 祖母」は、田村のいう①にあたり、「アイヌ語講義原稿」での「フジ」は、田村の記述②にあたると思われる。

おとうさん

みち 父親／父 ミチ／ (mici, acapo)

おかあさん

はぼ 母親／母 ハボ／ (hapo)

おにいさん

くゆぼ 実兄、ゆぼ 長上男性の／兄 クコサボ／  
(yupo, ku-yupo, ku-yupi)

おねえさん

くころさぼ 実姉、さぼ 長上。さへ 姉 長女 血  
族ノ／姉 クユボ／ (ku-kor sapo, sapo, ku-sapo,  
kukossapo)

十勝方言では、姉をあらわす語として sapo サボが報告されている(澤井 2001)。「アイヌ語単語集」には、「さぼ(さぼ)」、「さは」が記録されている。1900年頃の十勝地方で「サハ」も姉をあらわす語として使われていた可能性がある。あるいは、山縣氏が十勝以外の地域で学んだ語である可能性もある。

おとうと

実弟 くらき／弟 クアキ／ (aki, ku-aki, akihi)

いもうと

実妹 くつれゑ／妹 クツレシ／ (turesi, ku-turesi,  
mataki, ku-mataki)

おじ

叔父 くころあちや／叔父 クコロアチャ／ (aca,  
kukoraca)

おば

叔母 くこんふるべ／叔母 クコンナルベ／ (unarpe,  
ku-konnarpe)

いとこ

——／従兄弟 クユボ／ (ku-yupo 年上のみ)

### (3)－4 語頭の h について

知里は、音韻変化のうち、

11. 子音の脱落 (e) h 音の脱落についてまとめており、語頭の h について「この傾向は北部方言に於て特に著しい」:

heper > eper 熊の仔

hesuipa > esuipa 居眠する

と上の例を挙げている(知里 1993[1974]:13)。

他の方言で語頭の /h-/ が、十勝方言で /ʔ/ になることがある。

hemésu : 「(高いところへ) 上がる」 沙流方言 (服部編 1964 : 240)

'emésu : 「(高いところへ) 上がる」 (本別)

山縣資料には下の例が記録されている。

「蜚ブ ク、ホユブ」 (山縣資料)

ku-hóyupu.

/oyúpu / → /ku-hóyupu/ (本別)

人称接辞のうち、語幹のアクセントの位置をかえる人称接辞が oyúpu に接頭すると ku-hóyupu となる。

「ねぶに＝起きる」 (山縣資料)

'opúni

/'opúni / → /kuhópuni/ (本別)

ただし、下の例のように語形が変わらない場合もある。

/'emésu / → /ku-émesu/ (本別)

'opúni は、ku- や e- など、後続する語のアクセントの位置をかえる人称接辞が接頭すると、ku-hópuni, e-hópuni となる。なお、単独で hopúni と発音されることもある。

opuni, hopuni, opunpa, hopunpa など、アクセントのない語頭の h- が規則的に落ちる場合と、落ちない場合についての詳細についてはわかっていない。

### (3)－5 方位方角

山縣資料は十勝地方のアイヌ語が記録されていると仮定して整理、翻刻を進めてきた。資料を整理し、分析をおこなう中で、ここまで十勝地方の特徴を示す事例をいくつか挙げることができた。

ここでは「アイヌ語講義資料」に記録されている方位方角について取り上げる。方位方角をあらわす語は、地域による差異が大きいことが知られている(服部編 1964 : 238-239 等)。

アイヌ語地名研究の第1人者、山田秀三は、方位について以下のように記述している。

我われは方位といえば先ず東西南北を考える。だが北海道の地名は、東西だけで、南北の全くない世界だった(山田 1995 : 288)。

山田は、地名の調査に北海道を広く歩くようになると東・西のつく地名が多くある地方と、全然ない地方があるということに気がつき、全道の東・西の地名を集めたのだという。

北海道のアイヌ語地名の中には、次のような三通りの東・西が出てくる。日本語に訳すのに、一応東・西と書かれてきたのだが、磁石で計ったような東西ではない(山

田 1995 : 275)。

(東)	(西)
1. チュプカ (chup-ka)	チュプポク (chup-pok)
2. メナシ (menash)	シュム (shum)
3. コイカ (koi-ka)	コイポク (koi-pok)

東西をあらわす、上記の3組を挙げている。特に、3のコイカは、ときに「北」と訳され、ときに「南」と訳されることで気になり、東・西のつく地名を拾い集めて分布図をつくったことが紹介されている(山田 1995 : 275-276)。

山田は、古地図を確認し、文献にあたり、自分の足で歩いては、10年以上も加除訂正を続けながら「コイカ・コイポク地名分布図」を作成したという(ibid. : 276)。その調査結果として、「太平洋側だけにしかない地名」であり、「奥地に行くと、どうしてだかコイカ・コイポクの地名がない」、「北海道の内陸から北部は全くの空白であった。コイカ・コイポクは北海道の南の地方だけの地名である」(ibid. : 305)という事実を指摘をした。

この研究は、のちのアイヌ語、地名研究に多く利用されている(切替 : 1998 ; 中川 2021 など)。

さらに、山田は調査の過程において、ある疑問点が明確になり、それは「分布図で見られるように、コイカ・コイポクと呼ばれたのは釧路、十勝、日高、胆振の地方で、つまり太平洋から噴火湾までの海岸地方だけなのであった。これだけ多い地名ではあるが、全く片寄った分布である」。(図1)

さらに、「ただ気にかかることは、この分布図でも分かるように釧路川平野と十勝川平野、日高西部から勇払郡東部の処で、それがとぎれていることであった。きっとそこに研究問題があるに違いない」(ibid. : 305)とコイカ・コイポクの空白地点についての問題を提起している。(山田による「分布図」は、本稿の末尾に掲載している(図1))

北海道のアイヌの方位名称について詳しい研究を発表した切替は、(切替 1998 : 67)「アイヌの生活空間が河川によっていわば構造化されていたこと、すなわち、河川が地理の上での人期の拠所となるだけでなく、生活空間に秩序を与えて生活様式を規制していたものであったことを示したい」(切替 1998 : 67)と研究の意義について記し、方位名称について、特に、「川に規定される方位名称」について詳細な報告をしている(主要な資料は十勝川の支流、利別川流域、本別の沢井トメノ氏から得られた)。

切替によると「アイヌは流域での生活で、6組の副詞をもって方位を示す(ibid. : 70)とし、それは、「川の

流れに従う上下(かみ・しも)の関係」「川と河岸段丘および後背の山地との間に見られる高度差によるもの」とあり、川に対して平行であるか垂直であるかの対立」さらに、「移動にあたっての目標か出発点かの対立」によるとしている。

十勝地方で方位方角をあらわす語と、山縣資料に記録されている方角のアイヌ語を比較することで、どの地域で使われていたのかを知る手がかりが得られる可能性があるのではないか。

山縣資料に記録されている方角は以下の4つである。

- 「東 バナオロ、下ノ方」
- 「西 キムオロ、山ノ方」
- 「南 コエボコオロ コエボコ 海岸ノ下ノ方」
- 「北 コエガ・オロ 海岸ノ上ノ方」

方角をあらわす語として、帯広の例をみしてみる。

『アイヌ語方言辞典』(帯広)(服部編 1964 : 238-239)

「東」'epási《川下の方へ》; 'opási《川下の方から》

(川が西から東へ流れているため)

「西」'epéray《川上の方へ》; 'operay《川上の方から》

「南」'emakasi《南へ》; 'omakasi《南から》

「北」空欄である

本別で採録した方角を表わす語(澤井 2006)。

「東」'emákasi (山のほう)

「西」'erási (川のほう)

「南」'epási (川下)

「北」'epéray (川上)

切替は、内陸部の本別を、「(十勝川流域にあるから、広い意味で太平洋沿岸地方に含めることができる)」(切替 1998 : 80)とし、山田による上記の指摘、すなわち、「釧路川平野と十勝川平野、日高西部から勇払郡東部の処で、それがとぎれている」に言及し、「沢井氏の本別方言にもこれら(koyka / koy-pok 報告者注)の単語はない」と記している(切替 1998 : 83)。なお、この発表のち、講演記録のなかで、切替は、類似の方位を示す副詞の例として'ekoypokun「西へ」'ekoykaun「東へ」を解説する際に、「これは沢井さんは多分ご存知なかったと思うんですが〔後略〕と発言している(切替 2021 : 131)。なお、同じ話者からアイヌ語の聞き取り調査を行なった報告者の資料にも、これらの単語は採録されていなかった。

山田が作成した「コイカ・コイポク地名分布図」、「コイカ、メナシが北であった例 十勝広尾付近の図」をみ

ると、海岸部の広尾には2組のコイカ・コイボクが確認される(山田 1995: 304)。

なお、内陸部の帯広伏古の方角について『アイヌ語方言辞典』に記録された以外の記録もある(吉田 1984: 55)。帯広伏古の古川コサンケアン(辰五郎)<sup>(716)</sup>氏よりの聞き取りである。そこには、

「9. 死葬」に「死人の頭位は、東、脚位は西である。頭位を西にすれば、鬼になるものであるとして嫌う。“エコイカ ウン エコイポツク ウン”という語がある。

上記のように記録されている。和訳がないので、詳細は不明であるが、方角をあらわしている可能性がある。さらに、山田は、(三) 沙流の古謡の中で歌われたコイカのなかで、「コイカ・コイボク地名がないシュムンクルの世界でも、古謡の中にコイカ・コイボクが歌われていたのであった」(山田 1995: 319)と、久保寺逸彦の『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝』に採録された新平賀(沙流川下流東岸)のエテノア媼が伝承した「始祖神の自叙」に「オ・コイボク・ウン マ」「雨より」という表現にふれ、「沙流川筋でコイカ・コイボクの地名は見当たらなかったのだが、古謡(オイナ)の中では歌われていたのだった。言葉としては使われていたが、地名にはならなかった、ということらしい。」と推察している。

以前、報告者は、更科源蔵が採録した音声資料の調査をしたことがあり、十勝地方の方位方角が録音されていたことを思い出し、北海道博物館に保管されている音声資料を試聴させていただいた。清川ネウサルモン(本別生まれ、沢井トメノの母)の tuytak の中に、okoykaun という単語を確認することができた。

コイカ・コイボクは、伏古では信仰上の意識すべき方角として、本別では口承文芸に言葉としては使われていたが、地名にはならなかった、という山田の推論を補強する例といえるだろう。

山田は、『アイヌ語方言辞典』の内陸の方位名に注目し、内陸の旭川と帯広を選び、「共に方位地名の無かった処」と書き、2つの地域には、「我々がいう、磁石的な方位名が一つも答えられていない」「全部が地物の方角である」ことを挙げた。また、コイカ・コイボクについて、元は方角だったとして以下のように締めくくっている。

「何れにしても、太平洋漁撈民は、海波の上、海波の下という形の言葉で海上の方角を持っていた、それが、だいたい東、西に相当するので、後には方位名と考えられるようになったのであろう(山田 1995: 308)。

「(コイカ・コイボク) なまじ方位名だと思ってしまうのである。つまりコイカ・コイボクは元来は方位名ではなく、何かの(たぶん海流の流れる)方角から来たものであったらしい(ibid.: 308-309)。

山縣資料に記された方角をあらわす語を目にしなれば、十勝の内陸部にもコイカ・コイボクの例がある可能性を想像することができなかった。

### (3)-6 語彙

十勝らしいという印象を受ける単語に、ほたる科ヘイケボタルの名称を挙げるができる。単語ひとつでなにかを決めるのは乱暴であるが、『アイヌ語方言辞典』知里真志保『分類アイヌ語辞典・第二巻(動物編)』でも、北海道各地で採録された名称 ninninke-kamuy など、ninnin-, ninin- がつく名称が多いなかで、井上が採録した「(8) tómtom-kikir (十勝の一部)ヘイケボタル 本別 井上<sup>(717)</sup> 9」(知里 1976: 84)という記述がみられる。山縣資料で「ホタル、トムトム・キキリ(光ル光ル虫)」と記録されている。

さらに、山縣資料に記録されている否定の sien について、『アイヌ語方言辞典』(1964)には2例記録されており、どちらも帯広の例である。切替(1996)、田村が採録した語彙集、報告が採録した語彙集、高橋にも記録がある。詳細については今後の研究を待ちたい。

「大きい」をあらわす語を、広野氏は rukne と発音し、本別では rupne と発音している。十勝の単語を調べると rukne であったが、山縣資料にも記録されていることがわかり、山縣がアイヌ語を学んだ地域の手がかりになる可能性がある。

また、伏古で eramasu と発音し、本別では eramasuy と発音している。

狼を帯広の山川氏は horkewkamuy、本別では orkewkamuy と呼ぶことが報告されている。

山縣「ゑぶい(後門)」

本別で、sípuye ... の肛門(本別 2006: 31)をさすのに対して、帯広では osórpu, -e(服部編 1964: 15)である。

山縣資料の整理分析を通して、十勝伏古のアイヌ語の特徴があらわれていることから、伏古出身の伏根弘三のアイヌ語が色濃く反映されている資料だといえる。解放運動推進本部(編)(2008: 100)に、日本語に不慣れた伏根に山縣と思われる人物が「日本語を教えてやろう」と言い、2人で向かいあって会話をし、日本語の悪いと

(716) 吉田によると、古川さんは明治元年生まれ(吉田 1984: 40)。

(717) 井上壽(昆虫学者)は、昭和20年代から音更町、本別町にて昆虫のアイヌ語名を調査された。『アイヌと虫の生活誌』に以下のように記してある。昭和二十八年最初の調査原稿「アイヌと昆虫」が北隆館の月刊誌「新昆虫」に掲載される。この記事が北海道大学農学部昆虫学教室の内田登一先生に認められ、のちに北大法文学部の知里真志保先生の知るところとなる。知里先生の遺稿「分類アイヌ語辞典・第二巻(動物編)」の昆虫類に、私の採集した昆虫のアイヌ語名が多数引用された(後略)(本別: 169-170)とある。

ころをなおしてもらったという記録がある。

また、方角の語彙により、本別も伏古も太平洋岸からは離れているものの、コイカ・コイポクという方角をあらわす語を使用していたことが新たにわかった。

## 6 まとめ

山縣氏が記録したアイヌ語資料は、音を正確に聞き取り、記録したあとでも修正を重ね、より詳細に精密にアイヌ語を表す工夫をするあとが見られた。アイヌ子弟への教育と布教のため、また、自身の目標に向けて努力を重ねた結果だと思われる。

資料全体を分析した結果、記録された資料の多くは現在知られている十勝地方のアイヌ語との類似性が高いという可能性を示すことができたと考えられる。一方で、現在知られている十勝方言の報告に見られない形も記録されていることが確認された。

山縣資料の翻刻にいたる経緯については以下の通りである。1995年頃、本稿の報告者のひとり、教育史専攻の小川は釧路市で明治34～35年の『北東日報』を調査をしていた。そこで、山縣が本別でアイヌの子どもたちを教えているという記事や、山縣が筆録したという「シノツア」の記事を見つけた。それを当時の職場であるアイヌ民族文化研究センター内で話題にしたことがあった。また、その際、既に山縣について調査を行っていた久木幸男氏の論文を読み、『北東日報』の記事について久木氏にお伝えしたところ、久木氏から、浄照寺にアイヌ語の資料があると教示していただいた。アイヌ語の資料「シノツア」の筆記と和訳を読んだ元同僚が「すばらしい、よく聞き取れている」と話すのを聞いて山縣のアイヌ語の資料に興味を持ったことが、その後長野県に調査に行ってきたきっかけのひとつである。

山縣が生まれた上高井郡は、長野市より少し北にありなかなか行けなかったのであるが、2011年頃、高崎から長野に行き山縣氏の資料や写真を見せていただくことができた。なお、もうひとりの報告者である沢井は小川の元同僚であり、当時はアイヌ語十勝方言の調査中であり、本別町での調査の際に、沢井トメノ氏宅で、山縣氏について知っていることがあるかどうか質問している。年の離れた兄の生年を確認すると、ちょうどその頃学齢期であったらしいが、母からも兄からも特に聞いた記憶がないと話していた。

山縣資料を最初に目にしたときから30年もの時間が経過したが、資料の整理にたずさわる機会に恵まれたことに感謝している。

## 謝辞

内田祐一氏（文化人類学）からは、山川弘氏（帯広伏古出身、大正6年生まれ）や上野サダ氏（帯広伏古出身、大正10年生まれ）の伝承について教示を受けました。また、家屋や煙出し窓など、報告者の民族学的な知識が充分でない多くの点について教示を受けました。記して感謝申し上げます。

本稿を読んでくださった匿名のおふたりの査読者から多くの助言をいただきました。助言や指摘をいただいたことにより修正した箇所が少なからずあったことを記して、心からのお礼を申し上げます。

## 引用文献

- ジョン・パチラー 1926. アイヌ。英。和辞典 第三版、教文館。  
 ジョン・パチラー 1995[1938]. アイヌ・英・和辞典 第四版。岩波書店。  
 浅井亨 1993. 十勝のアイヌ語。十勝大百科事典：339-341。十勝大百科辞典刊行会編。北海道新聞社。  
 井上壽 2006. アイヌと虫の生活誌。釧路アイヌ文化懇話会。  
 内田祐一 1994. アイヌ民族博物館伝承記録 山川弘の伝承。財団法人アイヌ民族博物館。  
 内田祐一 1998. チセの地域差—十勝アイヌを中心に—。アイヌ民族博物館公開シンポジウム アイヌのすまいを考える：112-126。財団法人アイヌ民族博物館。  
 内田祐一・澤井春美 2002. 第九編 アイヌの生活と文化。本別町生活文化誌。961-1068。本別町。  
 奥田統己編 1999. アイヌ語静内方言文脈つき語彙集 (CD-ROMつき)。札幌学院大学。  
 萱野茂 1996. 萱野茂のアイヌ語辞典。三省堂。  
 川村兼一(監修)太田満(執筆・校閲) 2005. 旭川アイヌ語辞典。アイヌ語研究所。  
 解放運動推進本部(編)。第3節 山縣良温の事跡に学ぶ。アイヌ民族に関する学習資料集委員会 共なる世界を願って。97-109。  
 切替英雄 1996. アイヌ語十勝方言による昔話「島を引いて泳ぐオタスの少年の物語」の辞典と文法(1)。北海学園大学学園論集 88: 123-286。北海学園大学。  
 切替英雄 1998a. アイヌ語十勝方言による昔話「島を引いて泳ぐオタスの少年の物語」の辞典と文法(2)。北海学園大学学園論集 98: 315-349。  
 切替英雄 1998b. アイヌの地理的認識。北海道開発の視点・論点：66-86。北海学園大学開発研究所。  
 切替英雄 2021. アイヌ語研究からみた「アイヌ語地名」その2 アイヌ語の方位。北海道博物館第5回特別展 アイヌ語地名と北海道 連続講座・特別フォーラム講演記録：123-141。北海道博物館。  
 金田一京助 1973[1961]. アイヌの生活と民俗。金田一博士喜寿記念 アイヌ文化志 金田一京助選集Ⅱ：1-54。三省堂。  
 久保寺逸彦 2020. アイヌ語・日本語辞典稿 久保寺逸彦著作集 4。草風館。  
 佐藤知己 1995. 「蝦夷言いろは引」の研究。北海道大学文学部言語学研究室。  
 佐藤知己 2001. アイヌ語千歳方言の「第三類の動詞」の構造と機能。北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要7: 51-71。北海道立アイヌ民族文化研究センター。

- 佐藤知己 2005. 「申渡」のアイヌ語訳文に関する一考察. 北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要 11: 1-45. 北海道立アイヌ民族文化研究センター.
- 佐藤知己 2008a. アイヌ語古文獻における言語学的諸問題. 北海道大学文学研究科紀要 124: 153-180. 北海道大学文学部.
- 佐藤知己 2008b. アイヌ語文法の基礎. 大学書院.
- 佐藤知己 2014. 宝永元[1704]年空念上人筆録アイヌ語彙「方言葉」の言語学的考察. 北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要 20. 北海道立アイヌ民族文化研究センター.
- 更科源蔵・更科光 1976. コタン生物記 II 野獣・海獣・魚族篇. 法政大学出版局.
- 澤井春美 2001. アイヌ語十勝方言の親族名称について. 北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要 7: 21-50. 北海道立アイヌ民族文化研究センター.
- 澤井春美 2005. アイヌ語十勝方言の人称接辞 'a-, 'an- の出現条件と例外的事例について. 北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要 11: 47-72. 北海道立アイヌ民族文化研究センター.
- \*沢井春美・田村すゞ子(編集) 2005. アイヌ語帯広方言の資料: 田村すゞ子採録 広野ハルさんの基礎語彙調査資料. 札幌学院大学. \*本稿では「帯広」としている.
- \*澤井春美 2006. アイヌ語十勝方言の基礎語彙集一本別町・沢井トメノ氏のアイヌ語一. 北海道立アイヌ民族文化研究センター. \*本稿では「本別」としている.
- 高橋靖以(編著) 2014. アイヌ語十勝方言例文集 1. 北海道大学アイヌ・先住民研究センター.
- 高橋靖以(編著) 2018. アイヌ語十勝方言文法概説 1. 北海道大学アイヌ・先住民研究センター.
- 田中聖子・佐々木利和 1985. 近世アイヌ語資料について一とくに『もしほ草』をめぐる一. 松前藩と松前 24: 17-32.
- 田村すゞ子 1996. アイヌ語沙流方言辞典. 草風館.
- 田村すゞ子 1997. アイヌ語. 言語学大辞典セレクション 日本列島の言語: 1-88. 三省堂.
- 田村雅史 2010. アイヌ語白糠方言の文法記述. 千葉大学大学院社会文化科学研究科博士論文.
- 知里真志保 1993[1973]. アイヌ語獣名集. 知里真志保著作集第3巻. pp. 85-125. 平凡社.
- 知里真志保 1993[1974]. アイヌ語法概説. 知里真志保著作集第4巻. pp. 3-197. 平凡社.
- 知里真志保 1993[1976]. 知里真志保著作集 別巻 I 分類アイヌ語辞典 植物編・動物篇. 平凡社.
- 知里真志保 1993[1975]. 知里真志保著作集 別巻 II 分類アイヌ語辞典 人間編. 平凡社.
- 中川裕 1985. アイヌ語調査の歴史. ふるほんや第3号: 2-6. 武蔵野古本だより事務局.
- 中川裕(校訂)大塚一美(編訳) 1990. 3. 国造りの神の子と知らず. 鯨肉を一人占めして. 罰せられた狼神の自叙. キナラブック口伝 アイヌ民話全集 1 神話編 1: 44-58. 北海道出版企画センター.
- 中川裕 1998. アイヌ語千歳方言の人称代名詞とその歴史的位. 東京大学言語学論集 '88: 239-253 東京大学文学部言語学研究室.
- 中川裕 2024. アイヌ語公文典. 白水社.
- 服部四郎・知里真志保 1960. アイヌ語諸方言の基礎語彙統計学的研究: 306-342. 日本民族学協会.
- 服部四郎(編) 1964. アイヌ語方言辞典. 岩波書店.
- 久木幸男 1980. 山形良温のアイヌ教育活動. 横浜国立大学教育紀要 20: 1-21. 横浜国立大学.
- 伏根弘三 1926. アイヌ生活の変遷. 財団法人啓明會第十八回講演集: 52-72. 啓明會事務所.
- 北海道教育庁社会教育部文化課編 1988. 昭和62年度アイヌ民俗文化財調査報告書 アイヌ民族調査VII(沙流・十勝地方). 北海道教育委員会.
- 本別町教育委員会編 1989. 沢井トメノ 十勝本別分類アイヌ語辞典. 本別町教育委員会.
- 馬瀬良雄 1983. 長野県の方. 講座方言学 6 一中部地方の方言一: 55-95. 図書刊行会.
- 村崎恭子 1983. アイヌ語基礎語彙集(東別方言と本別方言). 東京外国語大学.
- 目黒治助・内田祐一 1995. 十勝のアイヌ文化誌 沢井トメノ 媼が伝承する本別のアイヌ文化 2 一民具の名称とその伝承(1)一. アイヌ文化 19: 14-37 財団法人アイヌ無形文化伝承保存会.
- 山縣良温 1901a. アイヌの村. 精神界 巻1 7号: 49-59.
- 山縣良温 1901b. 「アイヌ」の宗教概観. 精神界 巻1 8号: 38-41.
- 山田秀三 1994[1984]. 北海道の地名. 北海道新聞社.
- 山田秀三 1995. アイヌ語地名の三つの東西 一特にコイカ・コイポクの分布. アイヌ語地名の研究 第一巻 新装版: 275-323. 草風館.
- 吉田巖 1970. とちあいにぬ研究. 帯広市社会教育叢書 NO14. 帯広市教育委員会.
- 吉田巖 1984. 『民族学研究』篇. 河野正道選. アイヌ史資料集(第二期)第三巻 吉田巖著作編(三). 北海道出版企画センター.
- 吉田巖 2005. [1989] 北海道あいにぬ方言語彙集成 復刻版. 帯広叢書編集委員会.

## 索引

報告者は、アイヌ語資料の整形、表示、索引作成のためにテキストデータベースシステムを開発し、2005年に見出し語が3600語(帯広)、2006年に7800語(本別)のデータベースを作成した。今回の索引は見出し語が921語であり、2005年、2006年の語彙集と比べると規模が多くないが、それでも索引の利用なしに山縣資料の整理作業は困難であり、前半の「アイヌ語単語集」、後半の「アイヌ語講義原稿」の記述全体を見渡すために必要な作業であった。データベースの基本コンセプトは沢井・田村(2005)を参照されたい。

山縣資料のデータベースは、Unicode テキストによるタブ区切りとし、出現位置、山縣による記録、報告者によるアイヌ語表記を1行としたものである。これをPython 言語によって記述したプログラムによって、下に記したように人称接辞等の処理を行い、Unicode テキストによる索引ファイルを生成する。沢井・田村(2005)で行なったようにひとつのファイルから翻刻と索引を同時に作成することが望ましいものの、変体仮名が扱えないという理由によって実現できなかった。

凡例

山縣資料に記録されているアイヌ語を整理するにあたり、注には、現在知られているアイヌ語を書き入れた。索引を作成するにあたり、山縣資料で用いられている変体仮名は現代のかなに統一した。

山縣資料に記録されている語に相当すると思われる形をローマ字アルファベットに変換し、ローマ字のアルファベット順に並べて索引を作成した。ただし、あくまでも山縣資料の単語を調べるための索引であり、ローマ字表記のアイヌ語が正しいと意図しているものではないことを了承されたい。

人称接辞のついた形で記録されている語（「くゆぼ」ku-yupo 実兄）を1語、人称接辞をつけない形 yupo も1語として、合計2語としている。

単語があらわれる場所は以下のように表わす。

atusa あづさ (あ 48)、アツサ (単語 59)

山縣資料の「阿づさ」という語は「単語集（ひらがなで記録されている）」(あ)の48番目に記録されていることを表している。「アツサ」は、「講義原稿（カタカナで記録されている）」(単語)の59番目に記録されていることを表している。

また、amam-e-cikap アمام・エ・チカップ (鳥 2) は、「アイヌ語講義原稿」「鳥」に記録があることを意味する。(人体)や(指示)などの略は、「3(5)「アイヌ語講義原稿」の特徴」の原稿枚数の右に示してあるとおりである。

a ろったあ (ろ 1)、とおんたあ (と 2)、たんたあ (た 5)、トオンタ・ア (指示 26)、タアンタ・ア (指示 27)、ネプタブエエハウアナ (指示 48)、ハウアナ (指示 49)

a-e あえろっく (あ 24)

a-e rok あえろっく (あ 24)

a-macikore あまちこれ (あ 31)、アマチ、コレ (文例 55)、アマチ、コレ (文例 55)、アマチ、クレ (文例 56)、アマチ、クレ (文例 56)

a-matkore あまちこれ (あ 31)、アマチ、コレ (文例 55)、アマチ、コレ (文例 55)、アマチ、クレ (文例 56)、アマチ、クレ (文例 56)

a-nu あぬの (あ 49)、アヌウ (指示 10)、アヌ (単語 64)

a-nu no あぬの (あ 49)

a-nuykar あぬえから (あ 36)

a-peka あべか (あ 4)

a-purihi あぶりひ (あ 21)

aca くころあちや (く 7)、クコロアチヤ (単語 34)

acikara あちゅから (あ 23)、アチュカラ (単語 52)

ahun あふむ (あ 50)、チセ・オレン・アフン (指示 30)

aki くあき (く 2)、あきい (あ 12)、クアキ (単語 31)

akihi あきい (あ 12)

akus アクセン (指示 56)

akus wen アクセン (指示 56)

ama とおんたあま (と 3)、あま (あ 45)、エリカシ・アマ (指示 6)、エスリカ・ウンアマ (指示 7)、トオンタ・アマ (指示 28)

amam-cikap アمام・エ・チカップ (鳥類 2)、アマムエチカップ (鳥 2)

amam-e-cikap アمام・エ・チカップ (鳥類 2)、アマムエチカップ (鳥 2)

ami あみ (あ 52)

amihi アミヒ (人体 2)

amitanne あみたんね (あ 53)

an おきんべあん (お 21)、えとらんねあんべ (え 11)、えれねえこんあん (え 67)、あむ (あ 25)、あんべいたぶあん (あ 38)、ぴりかあん (ひ 11)、もなあん (も 10)、ネプタブエエハウアナ (指示 48)、ハウアナ (指示 49)、ピリカアン (文例 2)、イーカアン (文例 4)、ツウシテキワアン (文例 17)、オキンベ、アン (文例 90)、カムイネアン、クル (文例 126)、コトムアン (植物 23)

an-ekimnekar あねきむねから (あ 41)

an-eyaysanpekoyki あね・やいさんべ・こいき (あ 42)

an-eyaytupare あね・やえとばれ (あ 27)

an-koyki あんごいき (あ 13)

an-oruspe あのるすべ (あ 40)

an-uehokkar あぬえおっから (あ 35)、アヌエ、オカラ (文例 84)、アヌエ、オカラ (文例 84)

an-ueokar アヌエ、オカラ (文例 84)、アヌエ、オカラ (文例 84)

an-ueokkar あぬえおっから (あ 35)

ane あね (あ 37)、アネ (文例 107)

ani あに (あ 1)、アニ (単語 67)

anokay あのかい (あ 7)

anpe あんべねわ (あ 8)、あんべいたぶあん (あ 38)、アンペ (単語 45)、アンペネワ (文例 120)

anpe etap an あんべいたぶあん (あ 38)

anpe ne wa あんべねわ (あ 8)、アンペネワ (文例 120)

ap アプクスエン (指示 55)

ap kus wen アプクスエン (指示 55)

apa-orotpe あばろっぺ (あ 9)

ape あべ (あ 2)、アベ (虫類 24)	caroho ちやろほ (ち 10)、チヤロホ (人体 23)
ape-etunpe アベ・エトンベ (虫類 23)	casnu ちやしぬ (ち 12)、チヤシヌ (文例 98)
apeetunpe あべえとんべ (あ 26)	ci ち (ち 17)
apehuci あべふち (あ 3)	cik クエツキヌ (指示 47)
apekur あべくる (あ 5)、あべくるあん (あ 6)	cikap ちかつぶ (ち 5)、ちかつぶ (う 7)、チカップ (鳥類 1)、チ、カップ (鳥 1)、チ、カップ (鳥 1)
apekur-an あべくるあん (あ 6)	cikap-koyki-p チカップ・コイキツプ (鳥 27)
apetunpe アベ・エトンベ (虫類 23)	cikap-koykip チカップ・コキキツプ (鳥類 16)
apka アプカー (獣類 20)、アプカー (四足 30)、アプカー (四足 32)	cikap-koykip チカップ・コイキツプ (鳥 27)
aporotpe あばろっぺ (あ 9)	cikapkoykip ちかつぶこみぎつぷ (ち 6)
apusta あぶした (あ 16)、あぶしたし (あ 17)、あぶしたまか (あ 18)、アブシタ・シ (指示 4)、アブシタ・マカ (指示 5)	cikarsake ちからさけ (ち 14)、チカラ サケ (文例 127)
apusta asi あぶしたし (あ 17)、アブシタ・シ (指示 4)	cikir ちぎり (ち 9)
apusta maka あぶしたまか (あ 18)、アブシタ・マカ (指示 5)	cikiri ちぎり (ち 9)、チキリ (人体 21)
aputki あぶつき (あ 10)、アブツケ (指示 25)	cikoykip チ・コエキツプ (獣類 1)、チ、コエキツプ (四足 1)、チ、コエキツプ (四足 1)
ari ありそんのくやいぬ (あ 32)、アリ・ソノノ・クヤイヌ (文例 72)	cimakina ちまきな (ち 15)、チマキナ (植物 6)
ari sonno ku-yaynu ありそんのくやいぬ (あ 32)、アリ・ソノノ・クヤイヌ (文例 72)	cimayre-kamuy チマイレ・カモイ (指示 50)
arikiki ありきき (あ 22)、アリキキ (指示 37)	cimayrekamuy ちまいれかむい (ち 8)
arka あるか (あ 44)、アルカ (指示 12)	cinita ちにだ (ち 16)
arki ありきあし (あ 34)	ciokay ちおかい (ち 18)
arki-as ありきあし (あ 34)	cip ちっぶ (ち 3)
arwanpe あるわんべ (あ 46)	cipiyak チビヤク (鳥 9)
as あし (あ 30)、アシ (文例 20)、アシ (文例 38)	cir チリ (鳥 15)、チリ (鳥 26)
asi あぶしたし (あ 17)、あし (あ 30)、アブシタ・シ (指示 4)、アシ (文例 38)	ciray-mun ツライムン (植物 16)
asir あしり (あ 15)、アシリ (指示 1)	ciraymun つらいむん (つ 5)
askepeci アシケベチ (人体 27)	cironnop ちろんのっぷ (ち 2)、チ・ロンノップ (獣類 4)
askepet アシケベチ (人体 27)	cironnop-kamuy チ、ロンノップ、カモイ (四足 4)、チ、ロンノップ、カモイ (四足 4)
aspa あしば (あ 33)、アシバ (文例 80)	circircir(?) しるしちり (し 5)、シルシ・チリ (鳥類 9)
atce あっちうんくる (あ 39)、アッチ、ウン、クル (文例 124)	cise ちせ (ち 1)、チセ・オレン・アフン (指示 30)
atce un kur あっちうんくる (あ 39)、アッチ、ウン、クル (文例 124)	cise or en ahun チセ・オレン・アフン (指示 30)
attus あとうし (あ 29)	cisekorkur ちせころくる (ち 7)、チセコロ、クル (文例 125)、チセコロ、クル (文例 125)
atusa あづさ (あ 48)、アヅサ (単語 59)	ciskar ちしから (ち 4)
atuy あとい (あ 28)、アツイ (気象 39)	cuk ちゆく (ち 11)、チュク (気象 9)
ayapo あやぼ (あ 11)	cup-kamuy チュプカムイ (気象 19)
aykap あいかつぷ (あ 54)、アイカプ (文例 82)	cupke チュプケ (虫類 33)
ayusni あうしにー (あ 51)	e ええるしゆい (え 12)、ええこちやん (え 13)、え (え 54)、あえろつく (あ 24)、エ・エルシュイ (単語 12)、エ・エコチヤン (単語 13)、エ (文例 99)、エ (四足 22)
caca チヤチヤ (気象 57)	e-e ええるしゆい (え 12)、ええこちやん (え 13)、エ・エルシュイ (単語 12)、エ・エコチヤン (単語 13)
caranke ちやらんけ (ち 13)	e-e kocan ええこちやん (え 13)、エ・エコチヤン (単語 13)
carkar つあやらから (つ 3)、ツアヤラカラ (単語 65)	e-e rusuy ええるしゆい (え 12)、エ・エルシュイ (単語 13)

- 語 12)
- e-erusuy ええるしゆい (え 12)
- e-ipe えいべ (え 55)、エイベ (文例 100)
- e-iperusuy シエン・エイベルシュイ (単語 57)
- e-ka えかくおいぎ (え 56)、エカ、ク、オイキ (文例 108)
- e-ka ku-oyki えかくおいぎ (え 56)、エカ、ク、オイキ (文例 108)
- e-kor いころべ (い 20)、いころべおちえ (い 21)
- e-kor pe いころべ (い 20)
- e-kor pe ociwe いころべおちえ (い 21)
- e-kor-pe えころべ (え 9)、えころべおちい (え 10)、エコロベ オチエ (指示 45)
- e-kor-pe ociwe えころべおちい (え 10)、エコロベオチエ (指示 45)
- e-re えれねえこんあん (え 67)
- e-re nekon an えれねえこんあん (え 67)
- e-rekihi えれきひ (え 40)、エレキヒ (人体 8)
- e-ye いおしえゑ (い 11)、えいえ (え 43)、ネプタブ エエハウアナ (指示 48)、エエ (文例 15)、イオシ、エエ (文例 16)
- eani えやに (え 66)
- eaykap えたつきえあいかぶ (え 52)、エタキエ、アイカブ (文例 81)
- ecakoko えちえぎここあん (え 33)、エチェザ・ココアン (指示 29)
- ecakoko-an えちえぎここあん (え 33)、エチェザ・ココアン (指示 29)
- eci-kore-an えちこれあん (え 20)
- eci-siknuka-an えちしつぬかあん (え 70)
- eci-tura-an えちとらあん (え 47)、エチトゥラアン (文例 46)
- eciwka いるかえねちうか (い 3)、いるかいねちうか (い 19)、イルカ・イネチウカ (指示 53)
- ehuye エネフエ (文例 41)
- eisokor いいしよころ (い 15)
- ek えんこたえつく (え 4)、えんこたおままえん (え 8)、エンコタエック (指示 38)、エンコタオママンエック (指示 39)
- ekaci いかち (い 13)
- ekari えかり (え 26)、えかり (え 59)
- ekasi えかし (え 42)、エカシ (気象 56)
- ekasupne いかいしゆぶね (い 5)、イカイシュブネ (虫類 17)
- ekimnekar あねぎむねから (あ 41)
- en チセ・オレン・アフン (指示 30)、シオシマケ、エン シキル (文例 21)、エン (植物 22)
- en-eciwka いるかえねちうか (い 3)、いるかいねちうか (い 19)、イルカ・イネチウカ (指示 53)
- en-ehuye エネフエ (文例 41)
- en-ere えんねれい (え 21)、えんねれい (え 58)
- en-eunkerayte えねうんけらいて (え 62)
- en-kore えんこれ (え 22)
- enci-macikore エ、ンチ、マチコレ (文例 57)、エ、ンチ、マチコレ (文例 57)
- enci-matkore エ、ンチ、マチコレ (文例 57)、エ、ンチ、マチコレ (文例 57)
- ene いね (い 14)、えねいきい (え 50)、エネイ、キイ (文例 65)
- ene iki hi えねいきい (え 50)
- ene iki i エネイ、キイ (文例 65)
- enehuye えねふえ (え 46)
- enewsar えねうさら (え 45)、エネウサラ (文例 25)
- enkota えんこた (え 3)、えんこたえつく (え 4)、えんこたおままえん (え 8)、エンコタエック (指示 38)、エンコタオママンエック (指示 39)、エンコタ (単語 24)
- enkota ek えんこたえつく (え 4)、エンコタエック (指示 38)
- enkota oman wa ek えんこたおままえん (え 8)
- enkota oman we ek エンコタオママンエック (指示 39)
- epe エベ (四足 36)
- epeciro エベ・シロ (四足 35)
- epesiro えべしろ (え 31)
- epesiruo えべしろ (え 31)、エベ・シロ (獣類 24)、エベ・シロ (四足 35)
- epesiruwu えべしろ (え 31)、エベ・シロ (獣類 24)、エベ・シロ (四足 35)
- epone えぼね (え 48)、エホネ (文例 54)
- eram'an エラマアン ワー (指示 17)、ク、エラムアン (文例 26)
- eram'an wa エラマアン ワー (指示 17)
- eraman えらまん (え 1)、えらまや (え 2)、エラムアン ワー (指示 17)
- eraman wa エラマアン ワー (指示 17)
- eraman ya えらまや (え 2)
- eramasu えらましゆ (え 23)
- erampoken エラムボケン (文例 23)
- eramuan ク、エラムアン (文例 26)
- eramutuyupa えらむつえば (え 24)
- eranpoken えらむぼけん (え 44)
- eranpokiwen えらむぼけん (え 44)
- erayray えらいらい (え 37)、エライライ (虫類 32)

ere えんねれい (え 21)、えんねれい (え 58)	プカエチウ (虫類 4)
erikasi えりかし (え 7)、エリカシ・アマ (指示 6)	hapo はぼ (は 3)、ハボ (単語 29)
erikasi ama エリカシ・アマ (指示 6)	hacir はつり (は 11)、ハツリ (文例 37)
erumun えるむん (え 30)、エ・ルムン (獣類 16)、エ ルムン (四足 21)	hauturun ほうつるん (は 13)
erusuy ええるしゆい (え 12)	haw ネプタプエエハウアナ (指示 48)、ハウアナ (指 示 49)
esaman えしやまん (え 28)、エシヤマン (獣類 12)、 エシヤマン (四足 15)	haw an a ハウアナ (指示 49)
esikarun ク、エスカルウン (文例 28)	haw-utur-un ハウツルン (文例 75)
esirka えすりか (え 6)、エスリカ・ウンアマ (指示 7)	hayta ハイタ クル (文例 69)
esirka un ama エスリカ・ウンアマ (指示 7)	hayta kur ハイタ クル (文例 69)
esoksoki えそくさき (え 32)、エソクソキ (鳥類 8)、 エソクソキ (鳥 16)	he しよもいぬるへ (し 43)
eson えそんおまん (え 69)、エソン (指示 23)	hi えねいきい (え 50)
eson oman えそんおまん (え 69)	honi ほに (ほ 6)、ほにしき (ほ 12)、グ・ホニシキ (単 語 58)、ホニ (人体 29)
esuypa エ・シュイバ (指示 51)	honi sik ほにしき (ほ 12)
etak イタッキイ (指示 40)、イデツケキ (指示 41)	horkew ほるけう (ほ 9)、ホル・ケウ (獣類 3)
etaki iki イタッキイ (指示 40)	horkew-kamuy ホル、ケウ、カモイ (四足 3)、ホル、ケウ、 カモイ (四足 3)
etaki ki イタッキイ (指示 40)、イデツケキ (指示 41)	hoynu ほしいぬ (ほ 3)、ホイヌ (獣類 14)、ホイヌ (四 足 17)
etap あんべいたぶあん (あ 38)	hoypu ク、ホユブ (文例 30)
etesu えてしゆしゆ (え 25)	hu-kina-ne フウキナネ (気象 53)
etesusu えてしゆしゆ (え 25)	huci ふじ (ふ 2)、フジ (気象 54)
etoranne くこれとらんね (く 24)、えとらんねあんべ (え 11)、エトランネ (指示 46)	hum ふむ (こ 10)、フム (気象 43)
etoranne an pe えとらんねあんべ (え 11)	humihhi ふみひ (ふ 1)、フミヒ (単語 49)
etu いたう (い 17)、えとう (え 38)、エトウー (人体 3)	hunki ふんき (ふ 3)
etukemkus えとうけむくし (え 41)	hure フレ (虫類 10)、フウレ (気象 51)
etun エトン (虫類 25)	hure-itunnap フレ・エトナップ (虫類 9)
etutanne いたうたんね (い 18)、えとたんね (え 36)、 エト・タンネ (虫類 28)	huritunnap フレ・エトナップ (虫類 9)
eumare えうまれ (え 18)、エ・ウマレ (指示 11)	husko ふしこ (ふ 4)、フシコ (指示 2)
eunkerayte えうんけれいて (え 61)、えねうんけらい て (え 62)	husko-pet ふしこべつ (ふ 5)
eus ブタ・エウシ (指示 3)	i イ (虫類 21)、イ (文例 48)、エネイ、キイ (文例 65)
eyapkir えやぶきり (え 19)、エ・ヤブケレ (指示 31)、エ・ ヤブキリ (指示 32)	i-os いおしえゑ (い 11)、イオシ、エエ (文例 16)、イ オシ、エエ (文例 16)
eyaykatuwen シイインエ・ヤイカツエン (指示 42)、 エヤイカツエン (指示 43)	i-os e-ye いおしえゑ (い 11)、イオシ、エエ (文例 16)
eyaysanpekoyki あね・やいさんべ・こいき (あ 42)	i-os ye いおしえゑ (い 11)、イオシ、エエ (文例 16)
eyaytupare あね・やえとぼれ (あ 27)	icakkere エチヤケレ (単語 53)
eykaun ク、エイカウヌ (文例 85)	ika いかあん (い 10)、イーカアン (文例 4)
hacir はつり (は 11)、ハツリ (文例 37)	ika an イーカアン (文例 4)
hankapuy はんかぶい (は 9)、ハンカブイ (人体 11)	iki いでつけき (い 2)、えねいきい (え 50)、ぴりかね ぶかき (ひ 5)、ピリカ・ネフカキ (指示 36)、イタッ キイ (指示 40)、イデツケキ (指示 41)、エネイ、キイ (文例 65)
hankapuye ハンカブイ (人体 11)	ikokka えこつか (え 51)、エコツカ (文例 68)
hanke はんけ (は 1)、ハンケ (単語 6)	ikokkare えこっかくれ (え 49)、エコツカレ (文例 64)
hankupkaeciw はんく・ぶかえちう (は 4)、ハンク・	

- ikokonpa えここんぱ (え 35)、エ・ココンパ (虫類 27)
- imaki えまき (え 39)、エマキ (人体 4)
- imeru いめる (い 8)、えめる (え 15)、イメル (気象 26)
- imok えもく (え 34)、エモク (虫類 14)
- inaw えなう (え 57)
- inkar えんがら (え 5)、サンニヨ、ワ、インガリ (文例 6)
- inonnoytak えのんにえたつく (え 68)
- inu いぬ (い 16)、しよもいぬるへ (し 43)、ぴりかんいぬ (ひ 4)、ピリカンイヌ (指示 16)、ピリカンイヌ (文例 22)
- ipe えいべ (え 55)、エイベ (文例 100)
- iperusuy えべるしゆい (え 14)、ク・エベルシュイ (単語 58)、シエン・エイベルシュイ (単語 57)
- ipirore いびろれ (い 7)
- ipirorep いびろれ (い 7)、イ・ピロレ (虫類 29)
- irapokkari ク、イラポクカリ (文例 86)
- irkur えりくる (え 53)、エリクル、シリネ、クラムクル (文例 94)
- irkur sirne ku-ramu kur エリクル、シリネ、クラムクル (文例 94)
- iruka いるかえねちうか (い 3)、いるかいねちうか (い 19)、イルカ・イネチウカ (指示 53)
- iruka en-eciwka いるかえねちうか (い 3)、いるかいねちうか (い 19)、イルカ・イネチウカ (指示 53)
- irukay いるかえねちうか (い 3)、いるかいねちうか (い 19)、イルカ・イネチウカ (指示 53)
- irukay en-eciwka いるかえねちうか (い 3)、いるかいねちうか (い 19)、イルカ・イネチウカ (指示 53)
- isam えしやま (え 29)
- isiorore いしおろれい (い 9)、イシ・オロレイ (文例 1)
- isiororey いしおろれい (い 9)、イシ・オロレイ (文例 1)
- isopo えそーぼ (え 27)、エソーポ (四足 5)
- itak えたつきえあいかぶ (え 52)、エタキエ、アイカブ (文例 81)
- itak eaykap えたつきえあいかぶ (え 52)、エタキエ、アイカブ (文例 81)
- itak-sura いたきすら (い 12)
- itekke いでつけき (い 2)、イデッケキ (指示 41)
- itekke iki いでつけき (い 2)、イデッケキ (指示 41)
- itekke ki いでつけき (い 2)
- iteme-kikir イ・テム・キキリ (虫類 19)
- itemekikir いてめききり (い 6)
- itemkikir イ・テム・キキリ (虫類 19)
- iunin イウニン (文例 47)
- iyaykipte いやいきぷて (い 4)、イヤイキプテ (単語 66)
- iyayraykere やいらいけれ (や 3)、ヤイヤイケレ (単語 60)
- ka えかくおいき (え 56)、か(て 11)、ぴりかねぶかき (ひ 5)、ピリカ・ネフカキ (指示 36)、エカ、ク、オイキ (文例 108)
- ka oiki えかくおいき (え 56)
- kamuy カムイネアン、クル (文例 126)
- kamuy ne an kur カムイネアン、クル (文例 126)
- kamuy-itunnap カムイ・エトナツプ (虫類 7)
- kamuy-kotan かむいこたん (こ 2)
- kamuynomi カムイノミ (文例 129)
- kanna-kamuy カンナ・カムイ (気象 13)
- kannkamuy カンナ・カムイ (気象 13)
- kapat-cir カバッチリ (鳥類 15)、カバッチリ (鳥 25)
- karakasseka カラカセカ (文例 36)
- katu カツエン (単語 15)
- katu wen カツエン (単語 15)
- kay ぴりかねぶかき (ひ 5)、ピリカ・ネフカキ (指示 36)、カイ (単語 62)
- kaype カイベ (気象 41)
- kem けむ (け 1)、ケム (人体 14)
- kenas けなし (け 3)
- kenas-pa けなしば (け 4)
- ker けり (け 2)
- keraan けらあん (け 5)、ケラアン (単語 55)
- keri けり (け 2)
- kewtum けうとも (け 6)
- kewtumu けうとも (け 6)
- ki いでつけき (い 2)、き (き 2)、ぴりかねぶかき (ひ 5)、ピリカ・ネフカキ (指示 36)、イタッキイ (指示 40)、イデッケキ (指示 41)、キ (虫類 12)、キ (植物 19)
- kikir キキリ (虫類 1)、キキリ (虫類 22)
- kim キムオロ (気象 3)
- kim or キムオロ (気象 3)
- kim-or きむおろ (き 3)
- kimkamuy きんむかむい (き 5)、キムン・カモイ (獣類 11)、キムン、カモイ (四足 13)
- kimosere きもせれ (き 4)、キモセレ (文例 11)
- kimun キムン (四足 14)
- kimun-kamuy きんむかむい (き 5)、キムン・カモイ (獣類 11)、キムン、カモイ (四足 13)、キムン、カモイ (四足 13)

- kina キナ (植物 7)
- kira きら (き 6)、キラ (文例 19)
- kirosore きもせれ (き 4)
- kisar きさら (き 1)、キサラ (人体 24)
- kisara きさら (き 1)、キサラ (人体 24)
- ko-iruska こいるしか (こ 13)
- ko-komke ここむけ (こ 16)
- kocan ええこちやん (え 13)、エ・エコチヤン (単語 13)
- koiruska コイルシカ (文例 62)
- kokka こつかいあ (こ 11)
- kokka-e-a こつかいあ (こ 11)
- kokkaea コッカイヤー (文例 12)
- kokkapake こっかばけ (こ 3)、コッカバケ (人体 28)
- komke こむけ (こ 15)
- komni こむに (こ 17)
- komni-tay こむにたい (こ 18)
- koneka こねか (こ 14)
- konnarpe くこんなるべ (く 8)、クコンナルベ (単語 35)
- konru コンル (気象 25)
- konrusuy くころんるすい (く 23)、クコン、ルスイ (文例 115)
- kor いころべ (い 20)、いころべおちえ (い 21)、くころさぼ (く 5)、くころあちや (く 7)、くこれとらんね (く 24)、クコロアチャ (単語 34)
- kor-pe えころべ (え 9)、えころべおちい (え 10)、エコロベ オチエ (指示 45)
- kor-pok-kur ころぼっくる (こ 7)
- koraca くころあちや (く 7)、クコロアチャ (単語 34)
- kore えちこれあん (え 20)、えんこれ (え 22)
- koretoranne クコレトランネ (文例 116)
- korkoni ころこに (こ 6)、コロコニ (植物 1)
- kosne こしね (こ 12)、コシネ (文例 51)
- kossapo クコサボ (単語 30)
- kotan こたん (こ 1)
- kotankor-kamuy コタン・コロ・カモイ (鳥類 10)、コタン、コロカモイ (鳥 19)
- kotankorkamuy こたんころかむい (こ 4)
- kotcake こつちやけ (こ 5)、コッチャケ (単語 20)
- kotom コトムアン (植物 23)
- kotom an コトムアン (植物 23)
- koy こい (こ 8)、コイ (気象 40)
- koy-hum こいふむ (こ 9)、コイフム (気象 42)
- koyka コエガ・オロ (気象 6)
- koyka or コエガ・オロ (気象 6)
- koyki あんごいき (あ 13)
- koypok コエボコオロ (気象 4)、コエボコ (気象 5)
- koypok or コエボコオロ (気象 4)
- koyruska コイルシカ (文例 62)
- ku-aki くあき (く 2)、クアキ (単語 31)
- ku-ani たあんべくあに (た 6)、タアンベ ク・ワニ (単語 50)
- ku-eram'an ク、エラムアン (文例 26)、ク、エラムアン (文例 26)
- ku-eramuan ク、エラムアン (文例 26)、ク、エラムアン (文例 26)
- ku-esikarun ク、エスカルウン (文例 28)、ク、エスカルウン (文例 28)
- ku-eykaun ク、エイカウヌ (文例 85)、ク、エイカウヌ (文例 85)
- ku-honi グ・ホニシキ (単語 58)
- ku-honi sik グ・ホニシキ (単語 58)
- ku-hoyupu ク、ホユブ (文例 30)、ク、ホユブ (文例 30)
- ku-iperusuy ク・エベルシュイ (単語 58)
- ku-irapokkari ク、イラポクカリ (文例 86)、ク、イラポクカリ (文例 86)
- ku-konnarpe くこんなるべ (く 8)、クコンナルベ (単語 35)
- ku-konrusuy くころんるすい (く 23)、クコン、ルスイ (文例 115)、クコン、ルスイ (文例 115)
- ku-kor くころさぼ (く 5)、くころあちや (く 7)、くこれとらんね (く 24)、クコロアチャ (単語 34)
- ku-kor aca くころあちや (く 7)、クコロアチャ (単語 34)
- ku-kor etoranne くこれとらんね (く 24)
- ku-kor sapa くころさぼ (く 5)
- ku-koraca クコロアチャ (単語 34)
- ku-koretoranne クコレトランネ (文例 116)
- ku-kossapo クコサボ (単語 30)
- ku-nospa ク、ノスバ (文例 29)、ク、ノスバ (文例 29)
- ku-nukar くぬから (ぬ 3)
- ku-oyki えかくおいき (え 56)、エカ、ク、オイキ (文例 108)
- ku-oyra ク、オイラ (文例 27)、ク、オイラ (文例 27)
- ku-pa くば (く 12)、ク、バ (文例 32)、ク、バ (文例 32)
- ku-ramu エリクル、シリネ、クラムクル (文例 94)
- ku-ramuosma くらむおしま (く 19)、クラム、オシマ (文例 95)、クラム、オシマ (文例 95)
- ku-sini くしに (く 16)、しに (し 30)、クシニ (文例

- 59)
- ku-sinuynak ク、シヌイナック (文例 31)、ク、シヌイナック (文例 31)
- ku-sitoma くしとま (く 11)、クシトマ (文例 24)
- ku-taraypa ク、タライバ (文例 74)、ク、タライバ (文例 74)
- ku-turesi くつれし (く 6)、クツレシ (単語 33)
- ku-yayeninkor くやえにんころ (く 22)
- ku-yayeninkoro くやえにんころ (く 22)
- ku-yayesanniyo ク、ヤエ、サンニヨ (文例 112)、ク、ヤエ、サンニヨ (文例 112)
- ku-yayesannniyo くやえさんによ (く 21)
- ku-yayesioro くやえしおろ (く 17)、ク、ヤエシオロ (文例 73)、ク、ヤエシオロ (文例 73)
- ku-yaynu ありそんのかやいぬ (あ 32)、アリ・ソノノ・クヤイヌ (文例 72)
- ku-ye クエツキヌ (指示 47) ku-ye cik nu クエツキヌ (指示 47)
- ku-yupo くゆぼ (く 1)、クユボ (単語 32)、クユボ (単語 36)
- kuani くあに (く 3)、クアニ (単語 43)
- kuani たあんべくあに (た 6)、クアンベ ク・ワニ (単語 50)
- kukew こうけゑ (く 9)
- kukewe こうけゑ (く 9)、クークエ (人体 32)
- kunnano クンナノ (文例 44)、クンナノ オブニ (文例 111)
- kunnano opuni クンナノ オブニ (文例 111)
- kunncup クンネチユブ (気象 18)
- kunne くんね (く 13)、クンネ (気象 50)、クンネ (文例 43)
- kunne-cup クンネチユブ (気象 18)
- kunnano くんなの (く 15)、くんなのおふに (く 25)
- kunnano opuni くんなのおふに (く 25)
- kur くる (く 20)、あっちうんくる (あ 39)、しくぶくる (し 24)、ハイタ クル (文例 69)、エリクル、シリネ、クラムクル (文例 94)、クル (文例 105)、アッチ、ウン、クル (文例 124)、カムイネアン、クル (文例 126)、クル (鳥 5)
- kus アブクスエン (指示 55)
- kusur くする (く 10)
- kusuru くする (く 10)
- kusuyep くみしゆゑ (く 4)、クキシュエ (鳥類 4)、クイシュエブ (鳥 6)
- kuy くい (く 26)、ク、イ (文例 101)、ク、イ (文例 101)
- kuytop クキトック (鳥類 17)、クイトック (鳥 29)
- ma ま (ま 5)、マ (文例 88)
- maci まち (ま 1)、マチ (単語 42)
- macikore あまちこれ (あ 31)、アマチ、コレ (文例 55)、アマチ、クレ (文例 56)、エ、ンチ、マチコレ (文例 57)
- maka まか (ま 6)、あぶしたまか (あ 18)、アブシタ・マカ (指示 5)、マカ (植物 13)
- makayo まかよ (ま 7)、マカヨ (植物 12)
- mat まち (ま 1)
- mata また (ま 4)、マタ (気象 10)
- matkore あまちこれ (あ 31)、アマチ、コレ (文例 55)、アマチ、クレ (文例 56)、エ、ンチ、マチコレ (文例 57)
- matne マツネ・シタ (獣類 8)、マツネ、シタ (四足 8)、マツネ (四足 9)
- matne sita マツネ・シタ (獣類 8)、マツネ、シタ (四足 8)
- matne-sita まつねした (ま 2)
- matnsita まつねした (ま 2)
- maw マウ (四足 28)
- mayayke まやえけ (ま 3)、マヤイケ (指示 13)
- mean めあん (め 1)、メ・アン (指示 20)、メアン (気象 16)
- menoko めのこ (め 2)、しくぶめのこ (し 23)、メノコ (単語 27)、メノコ (気象 61)
- mi み (み 2)
- mici みち (み 1)、ミチ (単語 28)
- mim みむ (み 5)
- mina みな (み 4)
- mo も (も 1)、モ (四足 27)
- mo-iwa もいわ (も 2)
- mo-kenas もっけなし (も 3)
- mo-pet もうべつ (も 12)、モーベツ (文例 92)
- mokor モコロ (指示 52)
- mom もむ (も 13)、モム (文例 89)
- momanpe もまんべ (も 5)、モ・マン・ベ (獣類 19)、モマンベ (四足 26)
- mona もなあん (も 10)、モナ、アン (文例 10)
- mona an もなあん (も 10)
- mona-an モナ、アン (文例 10)、モナ、アン (文例 10)
- monrayke もんらいけ (も 11)、モンライケ (文例 60)
- mos もし (も 6)、モシ (虫類 37)
- mosospe もそしべ (も 7)、モソシベ (虫類 38)
- moy-or もいおろ (も 8)
- moymoyke モイモイケ (気象 34)
- moyuk もゆっく (も 4)、モ・ユック (獣類 17)、モユッ

- ク (四足 24)
- muk ムツク (植物 9)
- mukar むから (む 1)
- mun ムン (植物 17)
- nak ガク (文例 79)
- nankor ナンコロ (植物 24)
- ne あんべねわ (あ 8)、アンベネワ (文例 120)、カムイネアン、クル (文例 126)、ネ (植物 25)
- nekon ねこなぼかい (ね 3)、えれねえこんあん (え 67)、ネコナポカイ (文例 113)
- nekon pokay ねこなぼかい (ね 3)、ネコナポカイ (文例 113)
- nekona ねこなぼかい (ね 3)、ネコナポカイ (文例 113)
- nekona pokay ねこなぼかい (ね 3)、ネコナポカイ (文例 113)
- nep ねぶた (ね 1)、ぴりかねぶかき (ひ 5)、ピリカ・ネフカキ (指示 36)、ネプタブエエハウアナ (指示 48)、ネフタタ (文例 9)
- nep tap e-ye haw an a? ネプタブエエハウアナ (指示 48)
- nep tata ねぶた (ね 1)、ネフタタ (文例 9)
- nepkon たあんべねぶこん (た 10)、タアンベ、ネブコン (文例 117)
- ni ニ (四足 19)
- nikap にえかつぶ (に 6)
- ninkewehe にんけゑへ (に 5)、ニンケエ・ヘ (人体 31)
- nis にす (に 1)、ニス (気象 22)
- nisu にしゆ (に 2)
- niueo にうえお (に 3)、ニ・ウエオ (獣類 15)、ニウエオ (四足 18)
- niuweo ニ・ウエオ (獣類 15)
- no あぬの (あ 49)
- nociw のちう (の 6)、ノチウ (気象 29)
- noka のか (の 7)
- non のん (の 4)、ノン (人体 17)
- nospa ク、ノスバ (文例 29)
- notkiri のちぎりり (の 5)、ノチキリリ (人体 18)
- notkirih ちぎりり (の 5)、ノチキリリ (人体 18)
- noya のや (の 1)、ノヤ (植物 18)
- noya-us-i のやうし (の 2)
- noyus-i のやうし (の 2)
- nu いぬ (い 16)、ぬ (ぬ 4)、あぬの (あ 49)、ヌ (指示 9)、アヌウ (指示 10)、クエツキヌ (指示 47)、アヌ (単語 64)
- nucaktek ヌチャツ・テック (指示 14)
- nukar ぬから (ぬ 2)、くぬから (ぬ 3)
- num ぬむ (ぬ 9)
- numke ぬんけ (ぬ 10)
- nunpa ぬんぼ (ぬ 6)
- nunuka ぬぬか (ぬ 11)
- nup ぬぶ (ぬ 1)
- nup-kes ぬぶけし (ぬ 7)
- nup-pa ぬっぱ (ぬ 8)
- nupeki ヌベキ (気象 27)
- nupuri のぼり (の 3)、ヌブリ (気象 35)
- nusa ぬさ (ぬ 5)、ヌサ (文例 128)
- nuykar あぬえから (あ 36)
- ociwe いころべおちえ (い 21)、えころべおちい (え 10)、エコロベ オチエ (指示 45)
- ohak おはつく (お 5)、オハック (単語 11)
- oharkisamun おはらきさむん (お 8)、オハラキサムン (単語 23)
- ohetke シキワ・ワッカ・オヘツケ (人体 20)
- ohonnno おほんの (お 25)
- oiki えかくおいき (え 56)
- okimunpe おきんべあん (お 21)、オキンベ、アン (文例 90)
- okimunpe an おきんべあん (お 21)、オキンベ、アン (文例 90)
- okay おっかい (お 9)、オッカイ (単語 26)、オッカイ (気象 60)
- okokko おこっこ (お 10)
- okuyma おくいま (お 16)、オクイマ (人体 37)
- om-kursutu オンクリスツ (人体 19)
- om-kurusutu おんくりすつ (お 14)
- oman えんこたおままえん (え 8)、えそんおまん (え 69)、ぴりかおまん (ひ 13)、エンコタオママンエック (指示 39)、ピリカオマン (文例 3)
- omeanei おめあに (お 13)、オメアニ (人体 10)
- omke おむけ (お 23)
- onanci オナズ (人体 26)
- onici おにち (お 20)、オニチ (文例 83)
- onne オンネ (単語 8)
- onuman おぬまん (お 17)、オヌマン (文例 45)
- oo おお (お 4)、オオ (単語 10)
- ooat おおあち (お 11)、オオアチ (虫類 15)
- opitta おびった (お 3)、オピッタ (指示 15)
- opuni おぶに (お 22)、くんなのおぶに (く 25)、オブニ (文例 110)、クンナノ オブニ (文例 111)
- or おろ (お 1)、おろわ (お 2)、オロ (指示 22)、チセ・オレン・アフン (指示 30)、リコオロ (単語 3)、ラオロ (単語 4)、バナオロ (気象 2)、キムオロ (気象 3)、コエ

- ボコオロ (気象 4)、コエガ・オロ (気象 6)、オロワ (文例 121)、オルウン (鳥 12)
- or un オルウン (鳥 12)
- or wa おろわ (お 2)、オロワ (文例 121)
- or-un おるうん (さ 12)
- oro おろわ (お 2)、オロ (指示 22)、リコオロ (単語 3)、ラオロ (単語 4)、オロワ (文例 121)
- oro wa おろわ (お 2)、オロワ (文例 121)
- oruspe あのあるすべ (あ 40) os いおしえゑ (い 11)、イオシ、エエ (文例 16)、イオシ、エエ (文例 16)
- osimonsamun おしもむさむん (お 7)、オシモムサムン (単語 22)
- osirus おしるし (お 19)
- osirusi オシルシ (文例 77)
- oske おしけ (お 24)
- osmak おしまけ (お 6)
- osmake おしまけ (お 6)、オシマケ (単語 21)
- osor おしよろ (お 15)
- osoro おしよろ (お 15)、オシヨロ (人体 36)
- otop おとつぷ (お 12)、オトツプ (人体 6)
- otopi おとつぷ (お 12)、オトツピ (人体 7)
- otta とおつた (と 12)、オッタ (植物 21)
- otuwasi おつうわし (お 18)、オトウワシ (文例 63)
- oupeka オウベカ (指示 35)
- oyki えかくおいき (え 56)、エカ、ク、オイキ (文例 108)
- oyra ク、オイラ (文例 27)
- pa くば (く 12)、ク、バ (文例 32)
- pake ばけ (は 5)、バケ (人体 16)
- pana バナオロ (気象 2)
- pana or バナオロ (気象 2)
- panke ばんけ (は 2)、パンケ (単語 38)
- parara ばらら (は 14)、バララ (植物 15)
- parewrew ばれうれう (は 6)、バ・レウレウ (虫類 5)
- pas パス (鳥 4)
- pase ばせ (は 12)、パセ (文例 50)
- pase-kamuy ソンノ・バアセ・カムイ (指示 57)
- paskur ばすくろ (は 7)、パスクロ (鳥類 3)、パスクロ (鳥 3)
- pattaki ばったき (は 8)、バツカキ (虫類 39)
- paykar ばいから (は 10)、パイカラ (気象 7)
- pe いころべ (い 20)、いころべおちえ (い 21)、ペ (へ 1)、えとらんねあんべ (え 11)、ペ (虫類 26)、ペ (四足 29)
- peka あべか (あ 4)
- peker べけれ (へ 4)
- penka ペンケ (単語 37)
- penke ペんけ (へ 5)
- penramuhu ペンラムフ (人体 30)
- pepekerciw ペベケリ・チウ (鳥類 12)
- pepekeri-ciw ペベケリ・チウ (鳥類 12)
- pesi ペシ (文例 40)
- pet-ca ベつちや (へ 7)、ベツチャ (気象 36)
- pet-car ベつちやろ (へ 8)
- pikan びかん (ひ 6)、ヒカン (単語 25)
- pinne ぴんねした (ひ 2)、ぴんねらう (ひ 3)、ピンネ・シタ (獣類 9)、ピンネ、シタ (四足 10)、ピンネ (四足 11)
- pinne raw ぴんねらう (ひ 3)
- pinne sita ぴんねした (ひ 2)、ピンネ・シタ (獣類 9)、ピンネ、シタ (四足 10)
- pinne-raw ピンネラウ (獣類 23)、ピンネラウ (四足 34)
- pinraw ピンネラウ (獣類 23)、ピンネラウ (四足 34)
- pipa びばいる (ひ 8)
- pipa-us-i びばうし (ひ 7)
- pipus-i びばうし (ひ 7)
- pirka ぴりか (ひ 1)、ぴりかねぶかき (ひ 5)、ぴりかあん (ひ 11)、ぴりかおまん (ひ 13)、ピリカ・ネフカキ (指示 36)、ピリカ (単語 14)、ピリカ (単語 16)、ピリカアン (文例 2)、ピリカオマン (文例 3)、ピリカ (文例 52)、ピリカ (文例 119)
- pirka an ぴりかあん (ひ 11)、ピリカアン (文例 2)
- pirka nep ka iki ぴりかねぶかき (ひ 5)、ピリカ・ネフカキ (指示 36)
- pirka nep ka ki ぴりかねぶかき (ひ 5)、ピリカ・ネフカキ (指示 36)
- pirka nep kay iki ぴりかねぶかき (ひ 5)、ピリカ・ネフカキ (指示 36)
- pirka nep kay ki ピリカ・ネフカキ (指示 36)
- pirka oman ぴりかおまん (ひ 13)、ピリカオマン (文例 3)
- pirkan ぴりかんいぬ (ひ 4)、ぴりかん (ひ 12)、ぴりかんうらい (ひ 15)、ピリカンイヌ (指示 16)、ピリカアン (文例 2)、ピリカンウライ (文例 14)、ピリカンイヌ (文例 22)
- pirkan inu ぴりかんいぬ (ひ 4)、ピリカンイヌ (指示 16)、ピリカンイヌ (文例 22)
- pirkan uraye ぴりかんうらい (ひ 15)、ピリカンウライ (文例 14)
- pireore ピロレ (虫類 31)
- pirpa ぴりば (ひ 14)、ピリバ (文例 13)
- po ぼう (ほ 1)、ポー (単語 44)
- po-sita ぼうした (ほ 10)

pokay ねこなぼかい (ね3)、ネコナポカイ (文例 113)	rayyoci ライヨチ (気象 14)
pokna-sir ほつくなしり (ほ8)	re えれねえこんあん (え67)
poknsir ほつくなしり (ほ8)	reki レキ (人体5)
pon ほん (ほ2)、ポン (単語9)	rekihi えれきひ (え40)、エレキヒ (人体8)
pon-apka ほなぶかあ (ほ7)、ポナプカー (獣類21)、 ポナプカー (四足31)	rep-un れぶん (れ1)
pone ぼね (ほ5)、ポネ (人体13)	repkamuy レブン・カモイ (獣類2)、レブン、カモイ (四足2)
popokiciw ぼうぼぎちう (ほ11)、ポウポキチウ (鳥類11)、 ポウポキチウ (鳥20)	repun-kamuy レブン・カモイ (獣類2)、レブン、カモイ (四足2)、 レブン、カモイ (四足2)
poro ぼろ (ほ4)、ポロ (単語7)	rera れら (れ6)、レラ (気象11)
posita ポー・シタ (獣類10)、ポー、シタ (四足12)、ポー、 シタ (四足12)	retar れたり (れ4)、れたる (れ7)、レタル (気象49)、 レタリ (鳥14)
purihi あぶりひ (あ21)	retatcir れたっちり (れ3)、レタッチリ (鳥類7)、 レタッチリ (鳥13)
puta ブタ・エウシ (指示3)	rewe レエ (指示34)
puta eus ブタ・エウシ (指示3)	rewke れうけ (れ5)、レウケ (指示33)
ra ラオロ (単語4)	rewsi れうす (れ8)、レウス (文例109)
ra or ラオロ (単語4)	ri りい (り5)、リイ (単語1)
ra oro ラオロ (単語4)	rik リコオロ (単語3)
ra-or らおろ (ら2)	rik or リコオロ (単語3)
ram らむ (ら1)、ラム (単語2)	rik oro リコオロ (単語3)
ram-or らむおろ (ら3)	rik-or りこおろ (り4)
ram-osiroma ラムシロマ (文例97)	rikpuyar りくんぶやら (り2)
ramacite うこあん・らまちてあん (う19)、ウコ、アン、 ラマチテアン (文例93)	rikun りくん (り1)
ramacite-an うこあん・らまちてあん (う19)、ウコ、 アン、ラマチテアン (文例93)、ウコ、アン、ラマチテ アン (文例93)	rikun-puyar りくんぶやら (り2)
ramatkor らまちころ (ら13)、ラマチコロ (文例67)	rrior りこおろ (り4)
ramu エリクル、シリネ、クラムクル (文例94)	riten リテン (気象45)
ramu-osiroma らむしろま (ら14)	riten-ota りてんおた (り6)、リテン・オタ (気象44)
ramuan らむあん (ら12)、ラム、アン (文例66)、ラム、 アン (文例66)	ritota りてんおた (り6)、リテン・オタ (気象44)
ramuosma くらむおしま (く19)、クラム、オシマ (文 例95)	riya リヤ (鳥8)
rannuma らんぬま (ら6)、ランヌマ (人体25)	riya-cipiyak りやちびやく (り3)、リヤ、チビヤク (鳥 類5)、リヤ、チビヤク (鳥類5)、リヤ、チビヤク (鳥 7)、リヤ、チビヤク (鳥7)
rapu ラブ (虫類33)	riycipiyak りやちびやく (り3)、リヤ、チビヤク (鳥 類5)、リヤ、チビヤク (鳥7)
rapucupke らぶちゆぶけ (ら4)、ラブチュプケ (虫類 33)	rok あえろつく (あ24)
rase らあし (ら5)、ラーシ (人体15)	roma ロマ (植物5)
ratcitara らった <sup>ら</sup> (ら15)、ラツツダラ (単語18)	ror ろったあ (ろ1)、らおろ (ら2)
raw ぴんねらう (ひ3)	ror ta a ろったあ (ろ1)
ray らい (ら10)、ライ (文例53)	rorunpe ろるんべ (ろ2)
ray'oci ライヨチ (気象14)	rotta ろったあ (ろ1)
ray-o らいよ (ら8)、ライヨ (気象15)	rotta a ろったあ (ろ1)
ray-yo ライヨ (気象15)	ru しよもいぬるへ (し43)
raykur らいくる (ら11)	ru-mun ル・ムン (四足23)
rayoci らいよち (ら7)、ライヨチ (気象14)	rukne-mat ルツクネマツ (気象55)
	rur-sam-un ルルサンム (気象37)
	rurkor ルウルコル (単語54)

rusuy ええるしゆい (え 12)、エ・エルシュイ (単語 12)	sien yaykatuwen しいいん・やいかつゑん (し 8)
ruwe ルエ (文例 106)	siipe しべ (し 41)
ruy うはっするい (う 3)	sik ほにしき (ほ 12)、グ・ホニシキ (単語 58)
ruyanpe ルヤンペ (気象 24)	sikannatki しかんなつき (し 38)
ruye ルエ (文例 106)	sikari しかり (し 25)
saha さは (さ 18)	sikari-pet しかりべつ (し 26)
sak さく (さ 6)、サク (気象 8)	sikarpet しかりべつ (し 26)
sakma さつま (さ 13)	siki しきひわ・わっか (し 14)
sakorpe さころべ (さ 17)	siki wa wakka しきひわ・わっか (し 14)
san さん (さ 16)	sikihi しきひ (し 13)、シキヒワ・ワッカ・オヘツケ (人体 20)、シキヒ (人体 22)
sanke さんけ (さ 15)	sikihi wa wakka ohetke シキヒワ・ワッカ・オヘツケ (人体 20)
sanniyo サンニヨ、ワ、インガリ (文例 6)	sikiri シオシマケ、エン シキル (文例 21)
sanniyo wa inkar サンニヨ、ワ、インガリ (文例 6)	sikkama しつかま (し 45)
sanpe さんべ (さ 9)	siknak しきがく (し 31)、シキガク (文例 78)
sanpe-takne さんべたつくね (さ 8)、サンペ・タックネ (文例 96)	siknuka えちしつぬかあん (え 70)
sanptakne さんべたつくね (さ 8)、サンペ・タックネ (文例 96)	sikup しくぶめのこ (し 23)、しくぶくる (し 24)
sapo くころさぼ (く 5)、さぼ (さ 4)、サボ (単語 40)	sikup kur しくぶくる (し 24)
sapo くころさぼ (く 5)	sikup menoko しくぶめのこ (し 23)
sar さろ (さ 1)、さろ (さ 11)、サロ (鳥 11)	sikup-kur シクプクル (気象 59)
sar-orun さろるうん (さ 10)	sikup-menoko シクプメノコ (気象 58)
sarorkamuy サロ・ルウン・カモイ (鳥類 6)、サロ、ルウン、カモイ (鳥 10)	simoye しもい (し 16)
sarorun-kamuy サロ・ルウン・カモイ (鳥類 6)、サロ、ルウン、カモイ (鳥 10)、サロ、ルウン、カモイ (鳥 10)	sinep しねーぶ (し 36)
sat さつ (さ 14)	sini くしに (く 16)、しに (し 30)、シニアン (文例 58)、クシニ (文例 59)
satke さつてき (さ 19)	sini-an しに (し 30)、シニアン (文例 58)
sattek さつてき (さ 19)	sinkep しんけつぷ (し 47)、シンケップ (植物 11)
sawre さうれ (さ 7)、サウレ (文例 61)	sinot しのつ (し 7)、しのつ (し 33)、シノツ (指示 8)
sesek せいせつけ (せ 1)、セイセック (指示 18)、セセッキ (気象 33)	sinuynak ク、シヌイナック (文例 31)
sey せい (せ 2)	siosmake シオシマケ、エン シキル (文例 21)
sey-us-pira せい (せ 2)	sipe しべ (し 41)
si し (し 1)、シ (人体 35)	sipuy しぶい (し 29)
si-osmake シオシマケ、エン シキル (文例 21)	sipuye しぶい (し 29)
si-osmake en sikiri シオシマケ、エン シキル (文例 21)	sir しり (し 17)
sien しいいん・やいかつゑん (し 8)、しいいん (し 11)、シイインエ・ヤイカッエン (指示 42)、シイイン (指示 44)、シエン・エイベルシュイ (単語 57)	sir-ekurok しりいいくろつく (し 46)
sien e-iperusuy シエン・エイベルシュイ (単語 57)	sir-oterke しろてれけ (し 44)
sien eyaykatuwen シイインエ・ヤイカッエン (指示 42)	sir-peker シリベケリ (文例 42)
	sir-si-moye しりしもい (し 19)
	sir-simoy シリシモイ (気象 20)
	sir-simoye シリシモイ (気象 20)
	sir-us シル、シ (鳥 18)、シル、シ (鳥 18)
	sirkunne しりくんね (し 49)
	sirmeman しりめまん (し 22)
	sirne エリクル、シリネ、クラムクル (文例 94)
	siro シロ (四足 37)
	sirpeker しりべけり (し 21)

sirpeker-cupkamuy しりべけりちっくかむい (し 39)	taanpe nepkon たあんべねぶこん (た 10)、タアンベ、ネブコン (文例 117)
sirpirka しりぴりか (し 20)、シリヒリカ (気象 28)	taanta たんた (た 4)、たんたあ (た 5)、タアンタ・ア (指示 27)
sirpopke しりぼぶけ (し 6)、シリポプケ (指示 19)、シリ・ポフケ (気象 17)	taanta a たんたあ (た 5)、タアンタ・ア (指示 27)
siruo シロ (四足 37)	takne たつくね (た 2)、タックネ (単語 48)
sirus しるし (し 4)	tanne たんね (た 1)、タンネ (単語 47)
sirus-cir シルシ、チリ (鳥 17)、シルシ、チリ (鳥 17)	tanne-okokko タンネ・オコッコ (虫類 2)
sirusi しるし (し 4)	tanpa たんぱ (た 9)
sirutcir(?) しるしちり (し 5)、シルシ・チリ (鳥類 9)	tanpa-yuk たんぱゆっく (た 3)、タンバ・ユック (獣類 22)、タンバ、ユック (四足 33)、タンバ、ユック (四足 33)
sisam ししやも (し 42)	tanta たんた (た 4)、たんたあ (た 5)
sita した (し 2)、ぴんねした (ひ 2)、シタ (獣類 6)、マツネ・シタ (獣類 8)、ピンネ・シタ (獣類 9)、シタ (四足 6)、マツネ、シタ (四足 8)、ピンネ、シタ (四足 10)	tanta a たんたあ (た 5)
sita-kor-pe したころべ (し 3)、シタコロベ (獣類 7)、シタコロベ (四足 7)	tap ネプタプエエハウアナ (指示 48)
sitkor-pe したころべ (し 3)、シタコロベ (獣類 7)、シタコロベ (四足 7)	taraypa ク、タライバ (文例 74)
sitoma くしとま (く 11)、クシトマ (文例 24)	taskor たすころ (た 7)、タスコロ (気象 1)
sittokewe しつとけゑ (し 15)、シットケエ (人体 12)	tata ねぶたた (ね 1)、ネフタタ (文例 9)
siw しう (し 34)	tayki タイキ (虫類 11)
siw-kina しうきな (し 35)	teeta てた (て 5)
siwnin しうにん (し 48)、シユニン (気象 52)	tekehe てけへ (て 1)、テケへ (人体 1)
so ソ (植物 4)	tekkotor てっところ (て 7)、テッコトロ (人体 33)
somo しよもいぬるへ (し 43)	tekkotoro てっところ (て 7)、テッコトロ (人体 33)
somo inu ru he しよもいぬるへ (し 43)	teme テメ (虫類 20)
sonno ありそんのくやいぬ (あ 32)、ソンノ・バアセ・カムイ (指示 57)、アリ・ソンノ・クヤイヌ (文例 72)	terinne てりんね (て 8)、テリンネ (気象 47)
sonno pase-kamuy ソンノ・バアセ・カムイ (指示 57)	tes てし (て 9)
sorma ソロマ (植物 3)	tese てせ (て 2)
soso ソソ (単語 68)	tes-ka てしか (て 10)
soy そい (え 17)	teskor てしころあん (て 15)
soya しよや (し 12)、シヨヤ (虫類 6)	teskor-an てしころあん (て 15)
su しう (し 27)	tesmani てしまに (て 6)
suma しゆま (し 37)、スマ (気象 46)	to とう (と 9)、と (と 10)、とおつた (と 12)
sunke しゆんけ (し 10)、シュンケ (単語 46)	to otta とおつた (と 12)
sunku しゆんく (し 40)	tokes とけし (と 17)
supuya しゆぶや (し 32)	tokko ドッコ (虫類 35)
suye スエ (文例 102)	tokkoni どつこに (と 8)、ドッコニ (虫類 34)
ta ろったあ(ろ 1)、とおんたあ(と 2)、とおんたあま(と 3)	tokom とこむ (と 14)
taanpe たあんべくあに (た 6)、たあんべねぶこん (た 10)、タアンベ ク・ワニ (単語 50)、タアンベ、ネブコン (文例 117)	tokom-or とこむおろ (と 15)
taanpe ku-ani たあんべくあに (た 6)、タアンベク・ワニ (単語 50)	tom とむ (と 6)
	tomempiro とめんびろ (と 1)、トメンビロ (鳥類 13)
	tomenpiro トメンビロ (鳥 22)
	tomotuye ともつゑ (と 13)、トモツエ (文例 39)、トモツエ (文例 87)
	tomtom-kikir トムトム・キキリ (虫類 36)
	tomtomkikir とむとむきぎり (と 7)
	tonomokor とのまころ (と 16)
	toon とおんたあ (と 2)、とおんたあま (と 3)

- toon ta a とおんたあ (と 2)
- toon ta ama とおんたあま (と 3)
- toonta トオンタ・ア (指示 26)、トオンタ・アマ (指示 28)
- toonta a トオンタ・ア (指示 26)
- toonta ama トオンタ・アマ (指示 28)
- toorunpe とうるんべ (と 5)、トールンベ (虫類 16)
- toy とい (と 11)、トイ (気象 48)
- toyta といたあん (と 18)
- toyta-an といたあん (と 18)
- tukar ツカラ (獣類 13)、ツウカラ (四足 16)
- tura えちとらあん (え 47)、エチトゥラアン (文例 46)
- turesi くつれし (く 6)、クツレシ (単語 33)
- tuste ツウシテキワァン (文例 17)
- tuste wa an ツウシテキワァン (文例 17)
- tustek つして (つ 1)、ツシテ (単語 63)
- tuwa つわ (つ 4)、ツワ (植物 2)
- tuy トイ (単語 61)
- tuyma といま (と 4)、トイマ (単語 5)
- ucepeukote ウチェベウコテ (植物 8)
- uehokkar あぬえおっから (あ 35)、アヌエ、オカラ (文例 84)
- ueo ウエオ (四足 20)
- ueokar アヌエ、オカラ (文例 84)
- ueokkar あぬえおっから (あ 35)
- uhuyka ウフイカ (文例 103)
- ukao うかお (う 14)、ウカオ (文例 35)
- ukattuyma うか・とうえま (う 15)、ウカトウエマ (文例 34)
- uko うこあん・らまちてあん (う 19)、ウコ、アン、ラマチテアン (文例 93)
- uko-an うこあん・らまちてあん (う 19)、ウコ、アン、ラマチテアン (文例 93)、ウコ、アン、ラマチテアン (文例 93)
- ukocaranke うこちやらんけ (う 11)、ウコ、チヤランケ (文例 8)、ウコ、チヤランケ (文例 8)
- ukoraye うこらい (う 22)
- ukosanniyo ウコ、サンニヨ (文例 7)、ウコ、サンニヨ (文例 7)
- ukosanniyo うこさんによ (う 10)
- ukoyki うこいけ (う 9)、ウコエケ (文例 76)
- un あっちうんくる (あ 39)、エスリカ・ウンアマ (指示 7)、アッチ、ウン、クル (文例 124)、オルウン (鳥 12)
- unin ウニン (文例 49)
- upas うばっす (う 2)、うはっするい (う 3)、ウバッス (気象 12)
- upas ruy うはっするい (う 3)
- urar うらり (う 8)、ウラリ (気象 23)
- uraye ぴりかんうらい (ひ 15)、ピリカンウライ (文例 14)
- urki ウル・キ (虫類 13)
- us うす (う 20)、ウス (文例 104)
- usey うせい (う 1)、ウセイ (気象 32)
- utcikama ウッチカマ (人体 9)
- uteksam-un うてきさむうん (う 16)
- uteksamun ウテキサムウン (文例 33)
- utomoye うともいあん (う 17)、ウトモイアン (文例 71)
- utomoye-an うともいあん (う 17)、ウトモイアン (文例 71)
- uwa うわ (う 4)、ウワ (単語 51)
- uyaykocakoko うやいこちや・ここあん (う 18)、ウヤイコチャ、ココアン (文例 70)
- uyaykocakoko-an うやいこちや・ここあん (う 18)、ウヤイコチャ、ココアン (文例 70)、ウヤイコチャ、ココアン (文例 70)
- wa おろわ (お 2)、えんこたおままえん (え 8)、あんべねわ (あ 8)、しきひわ・わっか (し 14)、エラマアン ワー (指示 17)、シキワ・ワッカ・オヘツケ (人体 20)、サンニヨ、ワ、インガリ (文例 6)、ツウシテキワァン (文例 17)、アンベネワ (文例 120)、オロワ (文例 121)、ワ (植物 20)
- wakka しきひわ・わっか (し 14)、シキワ・ワッカ・オヘツケ (人体 20)、ワッカ (気象 31)
- we エンコタオママンエック (指示 39)
- wen アプクスエン (指示 55)、アクセン (指示 56)、カツエン (単語 15)、エン (単語 17)、エン (単語 57)
- wo-orun ウヲルウン (鳥 24)
- worcikap うをるん・ちかっぶ (う 5)、ウ・ヲルン・チカップ (鳥類 14)、ウヲルウン、チカップ (鳥 23)
- worun うをるん (う 6)
- worun-cikap うをるん・ちかっぶ (う 5)、ウ・ヲルン・チカップ (鳥類 14)、ウヲルウン、チカップ (鳥 23)、ウヲルウン、チカップ (鳥 23)
- ya えらまや (え 2)
- yaki やき (や 5)、ヤキ (虫類 40)
- yam やんむ (や 1)、ヤンム (指示 21)、ヤンム (気象 21)
- yam-wakka やんむわっか (や 2)
- yaoskep やおしけっぶ (や 4)、ヤ・オシケッブ (虫類 3)
- yatotta ヤドツタ (鳥 28)
- yayeninkor くやえにんころ (く 22)

yayeninkoro くやえにんころ (く 22)  
yayesanniyo ク、ヤエ、サンニヨ (文例 112)  
yayesannniyo くやえさんによ (く 21)  
yayesioro くやえしおろ (く 17)、ク、ヤエシオロ (文  
例 73)  
yayikokkare ヤイコツカレ (文例 118)  
yaykatuwen しいいん・やいかつゑん (し 8)  
yaynu ありそんのかやいぬ (あ 32)、アリ・ソンノ・ク  
ヤイヌ (文例 72)  
yayrayke ヤイライケ (文例 122)

ye いおしえゑ (い 11)、えいえ (え 43)、クエツキヌ  
(指示 47)、ネプタプエエハウアナ (指示 48)、エエ (文  
例 15)、イオシ、エエ (文例 16)、イオシ、エエ (文例  
16)  
yo ヨ (植物 14)  
yu ゆう (ゆ 1)、ユ (単語 39)、ユウ (気象 38)  
yuk ユック (獣類 18)、ユック (四足 25)  
yupo くゆぼ (く 1)、ゆぼ (ゆ 3)、クユボ (単語  
32)、クユボ (単語 36)、ユ (単語 39)

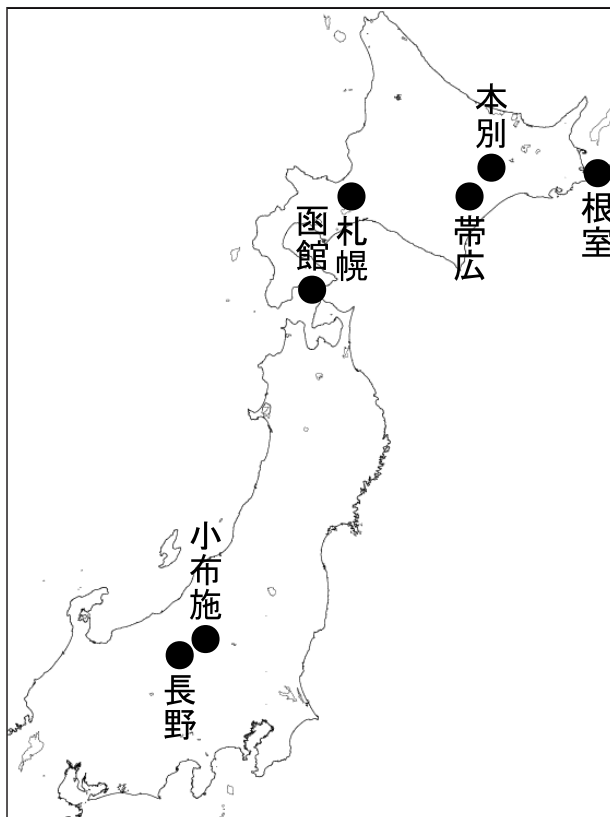


図1 関係地域図

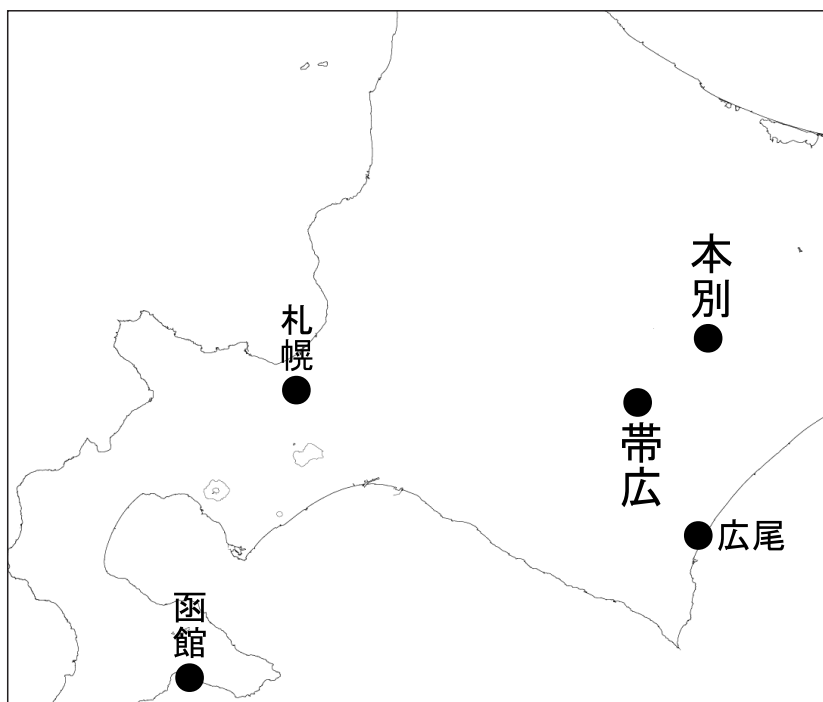


図2 北海道内関係地域図



写真1 開教記念之桜の前で

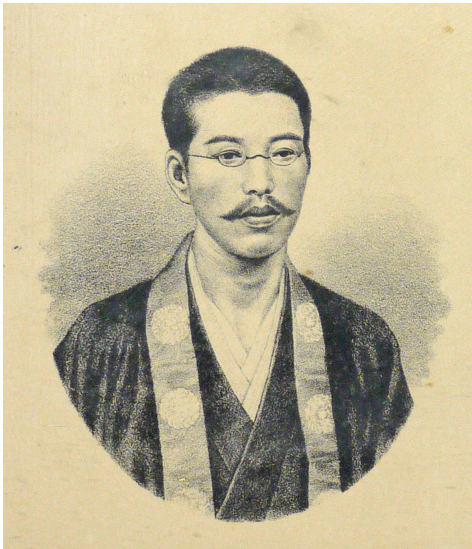


写真2 山縣の肖像画

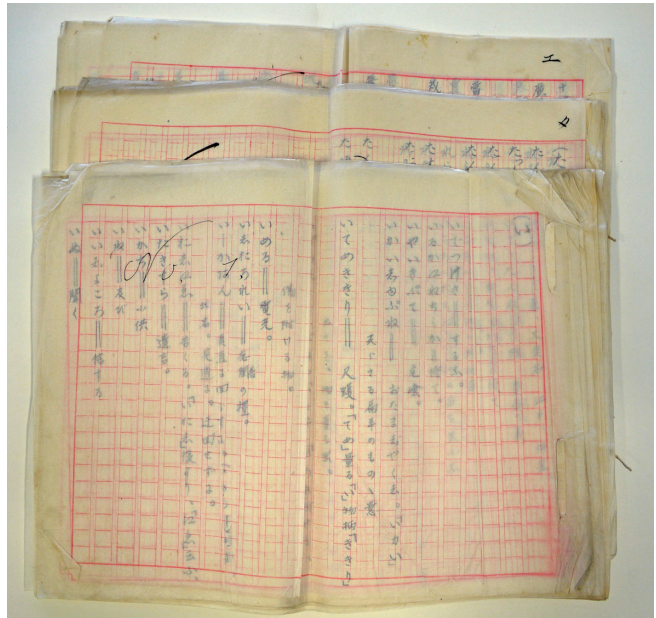


写真3 アイヌ語単語集 No.1 表紙

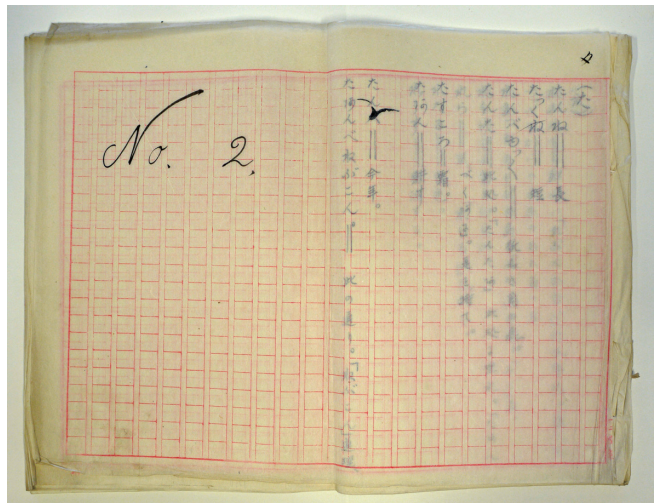


写真4 アイヌ語単語集 No.2 表紙

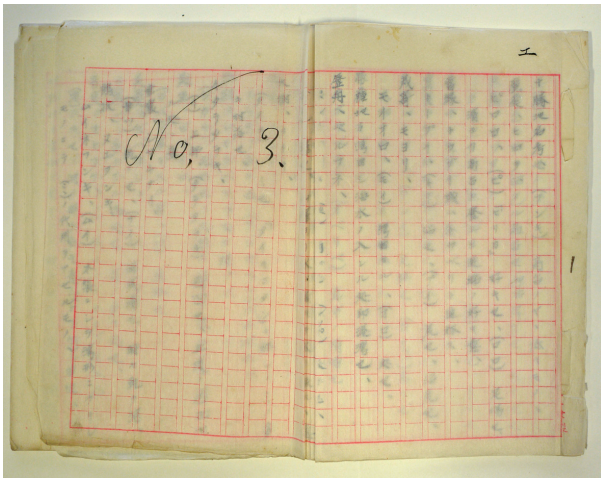


写真5 アイヌ語単語集 No.3 表紙

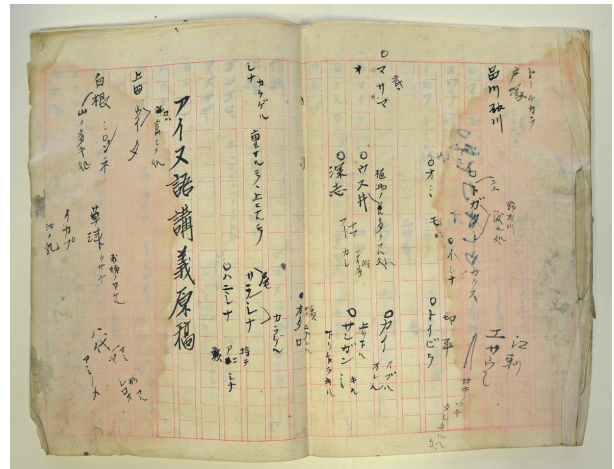


写真6 アイヌ語講義原稿表紙

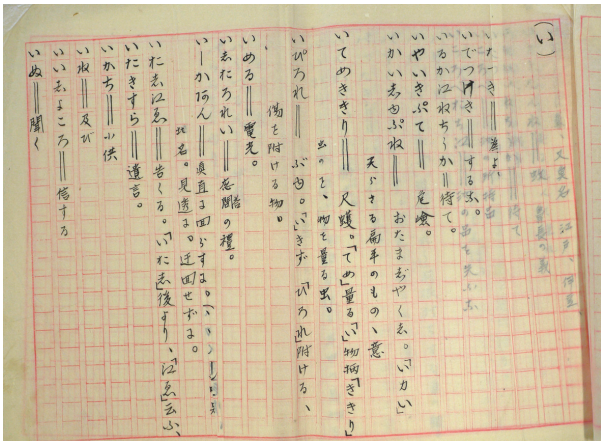


写真7 アイヌ語資料 本紙の例 (No.1 の最初)



図1 山田秀三による「コイカ・コイボク地名分布図」  
 (山田 1995 : 306)

## "Ainu Language Lecture Manuscripts" Written by Yamagata Ryouon

SAWAI Harumi and OGAWA Masahito

---

This paper introduces Ainu language materials collected from the late nineteenth to the early twentieth century by Yamagata Ryouon (1866–1934), a Buddhist priest who conducted field recording in the Tokachi region of Hokkaido.

Yamagata, who belonged to the Shinshū Ōtaniha, was assigned to visit Hokkaido by his sect, and in 1897, he first set foot in the Tokachi region. Through his encounter with Fushine Kouzo, the regional leader of the indigenous Ainu, Yamagata agreed to take responsibility for the education of Ainu pupils.

It is considered that due to Yamagata's role as a Japanese educator engaged in teaching, and also because he held an interest in Ainu religious beliefs and customs, Yamagata learned the Ainu language on his own initiative.

The materials introduced in this paper contain accurate Ainu language records comprising

approximately 480 Ainu–Japanese lexical entries and 500 Japanese–Ainu lexical entries. Predating the investigations and published Ainu language records of Kindaichi Kyosuke, who is regarded as a pioneer of modern Ainu linguistics, these materials can be unequivocally regarded as highly valuable historical sources.

Following Yamagata's death, these materials were carefully preserved at the temple where he was born, Joshoji Temple in Obuse Town, Nagano Prefecture. After the passage of more than 120 years, they have now been organized and transcribed for the first time.

Analysis conducted by a contributor to this paper indicates that the materials display numerous linguistic features characteristic of Ainu language as used in the Tokachi region.

